

---

# バカと幼なじみと召喚獣

ミニス

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

バカと幼なじみと召喚獣

### 【Nコード】

N9692T

### 【作者名】

ミニス

### 【あらすじ】

明久の家の隣に住む幼なじみが明久達と高校生活を楽しむ物語です

## 第一話 クラス分け（前書き）

作者は本作が初書きです

文才等もなく誤字や脱字等おかしいところも多々出てくると思います

## 第一話 クラス分け

わたし達が文月学園に入学してから二度目の春、わたしは桜を眺めながら幼なじみと一緒に学校に向かって上り坂を歩いていた。

坂を上り学校の校門に着くとある声に呼び止められました。

鉄人「おはよう吉井、久多羅木」

声のした方をみるとそこには浅黒い肌をした短髪の男の人が立っていた。

明久「あ、おはようございます。西む……鉄人」

今挨拶をしたのがわたしの幼なじみの吉井明久。わたしはアキって呼んでるの。でもアキ、今は言い直さなくてもよかったんじゃないの？ あ、わたしも早く挨拶しないと。

棗「おはようございます西村先生」

鉄人「吉井、何でわざわざ言い直した。お前は素直に西村先生と言えんのか？ まあいい、受け取れ」

わたしとアキは封筒を受け取った。これはクラス発表だ。確認のために封を切る。けど中身を確認しなくてもどのクラスかはわかってる。

鉄人「久多羅木はともかく吉井」

明久「何ですか、鉄人」

鉄人「俺はお前を去年一年みて」

アキは西村先生と話しながら封筒をあけるのに苦勞してるみたい。  
まあ見なくてもわかっているはずだけど……。あ、あけられたみたい。

鉄人「喜べ吉井。お前への疑いはなくなった」

「吉井明久……Fクラス」

「久多羅木棗……Fクラス」

鉄人「お前はバカだ」

## 久多羅木棗（オリキャラ紹介）

くたらぎなつめ  
久多羅木棗

身長が145cmと小柄な女の子。髪は黒色の腰まである長いポニーテールで胸がDサイズ。瞳は黒色。目はやや垂れ目で優しそうな感じがある。身長が低いのが悩み。

明久とは小学校の入学前に知り合ってそれから家族ぐるみの付き合い。明久の家の鍵を持っていたりなぜか明久の仕送りの管理などもやっている。明久と一緒に行動することが多い。そのため明久や雄二の起こしたことによく巻き込まれる。明久達の問題によく巻き込まれていたためか運動神経や体力は明久に近い。ただ明久達と違い鉄人から明久達と一緒に逃げて捕まったとしても巻き込まれていくだけなのを鉄人も知っているためほとんどの場合処罰はない。成績はCクラスなのだが明久と一緒にいたいがためにわざとFクラスになるように振り分け試験で調整した。優しい女の子なのだが明久関連で暴走することがある。

## 第二話 自己紹介

明久「ねえ、なつめ」

棗「なに？」

明久「確かなつめって1年の時結構点数取れてたはずだよ。それでなんでFクラスなの？」

棗「アキと一緒にのクラスがよかったからわざとFクラスになるようにしたただだよ」

明久「それは嬉しいけど、もし僕がFクラス以外に行く可能性は考えなかったの？」

棗「あはは。アキでそれはないよ」

明久「ちよつと！？ 笑いながら悲しくなるようなこと言わないでよ！」

アキと2人で今はFクラスに向かっています。やっぱりアキとの会話は楽しいね。まだHRまで時間もあまるしAクラスを見に行かないか誘われて行くことにした。わたしもAクラスがどんな感じが気になるし。

明久「これがAクラス……」

棗「すごいね……」

はつきり言ってこれ以上言葉が出てこない。みた感じ教室の広さは

普通の教室の3〜5倍はありそう。黒板はなく壁全体を覆うほどの  
プラズマディスプレイ。ほかにもいろいろと……

明久「……もう、行こうかFクラスに」

棗「……そうだね」

わたし達はFクラスに足を向けた。

明久「これがFクラス……」

棗「すごいね……」

うん。すごいよね。さつきとは逆の意味で。えつと、まず机がちやぶ台で椅子は座布団。しかも綿がほとんど入ってない。もしかして畳力びてない？ ほかにもいろいろ……。これが学力カーブ制度の1番下ね。これは酷い。ここまでやるって学園は何考えてるんだろ。これ、勉強する環境じゃないよ。

棗「えつと、席はどこでもいいみたいだね」

わたしは空いてる席に座って、その隣の席にアキが座った。

雄二「明久早いな。遅刻するのかと思っていたが。それとおはよう、久多羅木」

棗「おはよう、ゆうくん」

アキの隣の席はゆうくんなんだね。なんだろう、2年でもいろいろ巻き込まれそうな気がする。



明久「遅刻なんてできないよ。なつめに迷惑かけるし」

雄二「怒らすと怖いしな……」

明久「そだね……」

棗「なんか失礼なこと言ってない」

雄二「気のせいだ」

そんなので納得するわけないでしょって思って追撃しようとしたんだけど……。

「HRを始めます」

担任らしき人がきた。

福原「おはようございます。2年F組担当の福原慎です。よろしく  
お願いします」

先生は黒板に名前を書こうとして、やめた。どうやらチヨークもな  
いようだ。

福原「では、自己紹介でも始めましょうか。廊下側の人からお願い  
します」

秀吉「木下秀吉じゃ。演劇部に所属してある」

ん？ ひでちゃん。同じクラスなんだねー。男だっってわかってる

けど、やっぱり女の子にしかみえないよねー。あ、ひでちゃんの自己紹介が終わったみたい。次は……。

康太「……………土屋康太」

また知り合いだ。なんか知り合いが多いな。

美波「　　です。海外育ちで、日本語は会話はできるけど読み書きは苦手です」

女の子の声だ。よかったよ女の子がわたしだけじゃなくて

美波「あ、でも英語も苦手です。育ちはドイツだったので。趣味は

」

みなちゃんだ。

美波「趣味は吉井明久を殴ることです」

相変わらずだなー。次はアキみたいだね。

明久「　　コホン。えーっと、吉井明久です。気軽に『ダーリン』って呼んでくださいね」

なるほど、呼んでいいなら呼ぼうかな。しかし、わたしが言うより早く…………。

『ダアアーリイーン!!』

クラスの男性陣からのダーリンコール。なんだろう。気持ち悪くなってきたよ。アキをみてみたらどうやら同じような感じみたい。

明久「失礼。忘れてください。とにかくよろしくお願いいたします」

だよ。取り消すよね。あ、もうわたしの番だ。

棗「久多羅木棗です。先程自己紹介していた吉井明久の幼なじみです」

……なんだろう。きゆうに男性陣がカッターを構えたんだけど。照準はアキみたい。

棗「えーっと、みんな落ち着いて、暴力はいけないよ」

きいてくれるかな？ 少し待ってたら一応はわかってくれたのか、ただの先送りかわからないけどカッターをしまってくれた。……Fクラス、かなり危険かも知れない

棗「とりあえず、よろしくおねがいします」

自己紹介が終わったと同時に教室のドアが開いた。

瑞希「あの、おくれて、すいま、せん……」

あれ？ なんで？

福原「今自己紹介をしているところなので、姫路さんもお願ひします」

瑞希「は、はい！ 姫路瑞希といます。よろしくおねがいします」

……」

棗「みいちゃん。質問いい？」

瑞希「なんですか。クーちゃん」

棗「なぜFクラスに？」

瑞希「振り分け試験の最中、高熱を出してしまって……」

棗「あー、そんなことがあったのか」

振り分け試験途中退席だから無得点だもんね。しかし、みいちゃんの熱がでたと言った後のクラスの反応はどうなんだろ。例えば……

『そういえば、俺も熱（の問題）がでたせいでFクラスに』

『ああ。化学だろ？ アレは難しかったな』

『俺は弟が事故に遭ったと聞いて実力を出し切れなくて』

『黙れ1人っ子』

『前の晩、彼女が寝かせてくれなくて』

『今年一番の大嘘をありがとう』

などなど。Fクラス……ここまでとは。大変かも。

あれ？ 気づいたらアキとゆうくと先生がいない。どこにいったんだろ？ 考え事していると周り見えなくなるから注意しないと。みいちゃんが近くににいるし話してようかな。

棗「まさかみいちゃんがFクラスだとは思わなかったよ」

瑞希「わたしもクーちゃんがFクラスだとは思わなかったです。同

じ質問をしますけど、なぜFクラスに？」

棗「アキと一緒にいたかったからわざとFクラスになるようにしたんだよ」

瑞希「そうですか」

あれ、なんだろう。なんかみいちゃんが困ってるみたいだけど。あ、先生とアキとゆうくんがもどってきた。

福原「坂本君、君が自己紹介最後の1人ですよ」

雄二「Fクラス代表の坂本雄二だ。俺のことは代表でも坂本でも、好きなようによんでくれ」

ゆうくんがそう言った後。

雄二「さて皆に1つ聞きたい」

ゆうくんに視線が集まる。それを確認したゆうくんは教室内を見渡して皆はその視線を追った。

雄二「Aクラスは冷暖房完備の上、座席はリクライニングシートらしいが」

雄二「不満はないか？」

『大ありじゃあー！！』

Fクラスの魂の叫びだった。

## 第二話 自己紹介（後書き）

はい。素人が無理するものではありませんでした。

棗「そうだね。むりしたね。頑張りすぎる必要はないんだよ」

う、ありがとう。今回そんなにうまく出来なかったから、次は今回よりは少しでもうまく出来るよう頑張るよ。

棗「頑張り過ぎないように頑張ってね」

棗「次回は第三話作戦会議の予定らしいですよ。またね」

### 第三話 戦争への誘導

棗サイド

今のFクラスは興奮状態にある。まあ、気持ちにはわかるけどさ。FクラスとAクラスの設備を比べさせたらこうなるよ。しかもそんな興奮状態のなか、更にゆうくんが周りを煽ってるし……。

雄二「だろう？ 俺だってこの現状は大いに不満だ。代表として問題意識を抱いている」

『そうだそうだ！』

『いくら学費が安いからと言って、この設備はあんまりだ！ 改善を要求する！』

『そもそもAクラスだって同じ学費だろ？ あまりに差が大きすぎる！』

雄二「みんなの意見はもつともだ。そこで」

あれ？ ゆうくんが笑ってる。しかもあの笑い方……何かたくらんでるときのだ。

雄二「これは代表としての提案だが……FクラスはAクラスに試験召喚戦争を仕掛けようと思う」

え？ 戦争？ しかもAクラス。

『勝てるわけがない』

『これ以上設備が落とされるなんて嫌だ』

「姫路さんがいたら何もいらぬい」  
「久多羅木さんと付き合いたい」

あちこちから悲鳴が……。まあFクラスとAクラスじゃ設備の差と同じくらいの戦力差があるしね。なにせ文月学園の試験は時間制限有り、点数上限無しだし。Aクラスの人達はみんな三桁当たり前だし。この否定的な状況でゆうくんはどうするのかなつと。ちなみにラブコールがあつたけどスルー、相手にするの面倒だし。

雄二「そんなことはない。必ず勝てる。いや、俺が勝たせてみせる」

「何を馬鹿なことを」

「できるわけないだろう」

「何の根拠があつてそんなことを」

雄二「根拠ならあるさ。このクラスには試験召喚戦争で勝つことのできる要素が揃っている」

お、クラスの雰囲気が変わった。

雄二「それを今から説明してやる。おい、康太。畳に顔をつけて姫路のスカートを覗いてないで前に来い」

康太「……………！(ブンブン)」

瑞希「は、はわっ」

ついでるね。顔に畳の跡が。

雄二「土屋康太。こいつがあのお有名な、寡黙なる性識者だ」  
ムツリーニ



康太「……………！(ブンブン)」

『ムツツリー二だと』

『馬鹿な、奴がそうだと言うのか……………？』

『だが見る。あそこまで明らかな覗きの証拠を未だに隠そうとして  
いるぞ……………』

『ああ。ムツツリの名に恥じない姿だ……………』

瑞希「????？」

みいちゃんはムツツリー二の由来がわからないせいか、疑問符を浮かべてるね。ムツツリスケベのことだって教えたほうがいいかな？  
んで、今そのムツツリー二は、畳の跡を手でおさえてる。

雄二「姫路のことは説明するまでもないだろう」

瑞希「えっ？ わ、私ですかっ？」

雄二「ああ。うちの主戦力だ。期待している」

『そつだ。俺たちには姫路さんがいるんだつた』

『彼女ならAクラスに引けをとらない』

『ああ。彼女さえいればなにもいらぬ』

雄二「木下秀吉だつている」

『おお……………！』

『ああ、アイツ確か、木下優子の……………』

雄二「当然俺も全力を尽くす」

『確かになんだかやってくれそうな奴だ』

『坂本って、小学生の頃は神童とか呼ばれていなかったか?』

『それじゃあ、振り分け試験の時は姫路さんと同じく体調不良だったのか』

『実力はAクラスレベルが二人いるってことだよな!』

クラスの雰囲気はかなりよくなってきたね。士気もかなり上がってるし。

雄二「それに、吉井明久だっている」

……シン

あゝ、凄まじい士気の急降下。

明久「ちよつと雄二! どうしてそこで僕の名前を呼ぶのさ! 全くそんな必要ないよね!」

『誰だよ、吉井明久って』

『自己紹介の時に久多羅木さんが幼なじみだって言ってたアイツじやね』

『ああ。あの異端者か』

『どうする。あの時は久多羅木さんがやめるよう言ったからやめたけど……』

『殺るか?』

明久「ちよつと待ってよみんな!! 何でカッターなんか構えてるのさ!?!」

雄二「まあ待てお前ら、まずはこっちの話をきけ。処刑はその後でもできるだろ」

明久「僕に味方はいないの!？」

うぐん。とりあえず、危なくなりそうだったらまたお願いしてみようかな……。一度聞いてくれてるからもしかしたらまた聞いてくれるかもだし。

雄二「さて、知らないようなら教えてやる。こいつの肩書きは《観察処分者》だ」

『……それって、バカの代名詞じゃなかったっけ?』

明久「ち、違うよっ! ちょっとお茶目な十六歳につけられる愛称で」

雄二「そうだ。バカの代名詞だ」

明久「肯定するな、バカ雄二!」

『おいおい。《観察処分者》ってことは、試召戦争で召喚獣がやられると本人も苦しいってことだろ?』

『だよな。それならおいそれと召喚できないヤツが一人いるってことになるよな』

雄二「気にするな。どうせ、いてもいなくても同じような雑魚だ」

明久「雄二、そこは僕をフォローする台詞を言うべきところだよな」

「？」

雄二「とにかくだ。俺達の力の証明として、まずはDクラスを征服してみようと思う」

Dクラスね。みいちゃんがいるし、まあ勝てるんじゃないかな。勝ってFクラスの勢い付けをしようとしてるのかも。さて、わたしはどうしようかな。Fクラスに入るために全教科40〜60点くらいしか取ってないし……。みいちゃんは回復試験を受けるだろうからそのとき一緒に受けてもいいけど……。まあ後で、クラス代表&参謀のゆうくんにきいてみようかな。

雄二「皆、この境遇は大いに不満だろう？」

『当然だ！！』

雄二「ならば全員筆を執れ！ 出陣の準備だ！」

### 第三話 戦争への誘導（後書き）

棗「なんか今回、ほとんど原作をそのまま使った感じだよね」

そうなんだよね。まあたまには……

棗「たまにはって……まだキャラ紹介をいれても四つ目ですよ」

すみません。

棗「それと前回言ったタイトルと違うんだけど」

こつちの都合でかえました。予定だったし問題はないとおもう。  
……ないといいな。

棗「まったく。それじゃあ次は何になるの？」

宣戦布告、かな？

棗「それでは、次は第四話 宣戦布告 の予定です。またね」

## 第四話 宣戦布告

棗サイド

雄二「Dクラスへの宣戦布告の使者だが、明久か久多羅木のどちらかにやってもらう」

明久「……下位勢力の宣戦布告の使者ってたいてい酷い目に遭うよね？」

わたしが行っておこうかな。いくらなんでもここは学園、アキが思ってることはそうそうないだろうし。

棗「ゆうくん。わたしが行くよ」

雄二「そうか、頼む。開戦は今日の午後からと伝えてくれ。……久多羅木、ちよっと来い」

わたしはゆうくんのところに言って少し話をしてから教室をでた。

明久サイド

明久「ねえ、雄二」

雄二「なんだ明久？」

明久「宣戦布告の使者を決める時、僕かなつめのどちらかが行くって事になってたけど、僕となつめの二人で行くって選択肢はなかったの？」

雄二「それでもよかつたんだがな。一緒に行かせると久多羅木が暴走する可能性があったからな」

明久「どうしてさ？」

雄二「はっきり言うんだな。明久が使者をやった場合、確実にDクラスにボコボコにされる」

明久「それがわかって僕にも行かせようとしてたの!？」

そんな危険なことをさせようとしてたのか。

雄二「当然だ。で、明久と久多羅木で行った場合、久多羅木の前でボコボコにされるわけだが、そうだったら久多羅木はどういう行動をとると思う」

明久「えっと、怒りながら止めようとしてくれるのかな？」

雄二「ああ。そうだろうな。ただ、そのまま暴走まで行く可能性もあつてな……」

ああ、なるほど。そんなことになったら試召戦争どころじゃないね。

明久「でも、僕一人で行っても結局ボロボロになって戻ってくるんですよ。なつめがDクラスに攻める可能性は？」

雄二「大丈夫だ。ボロボロの状態でもお前の笑顔を見せればあいつは問題ない」

明久「だつたら一緒に行つても大丈夫だつたんじゃない？」

雄二「なんだ？ お前は殴られてるときに笑うのか。そんな趣味があつたのか？」

明久「ないね。どうしよう、こんな話してたらなつめが心配になつてきた」

雄二「大丈夫だろ」

明久「でも……」

雄二「心配性だな。まあ、お前が戦争を仕掛ける理由が姫路と久多羅木のためだしな。……ムツツリーニ」

康太「……………準備はできてる」

明久「？」

雄二「久多羅木に気付かれないように盗聴器を仕掛けてもらった。久多羅木一人ではどうにもならない状況になつたらのり込むぞ」

雄二、人のことは言えないよね。

棗サイド

わたしはDクラスに向かっている。歩きながらさつき教室でゆうくに言われたことを思い出していた。言われたのは宣戦布告について。下手にはでるな。挑発はやりすぎるな。相手が力で解決しようとしてきたら反撃はせずに身を守るだけにしろ、とのこと。



どれも苦手だよ。なんか不安になる内容もあるんだけど。挑発に関しては……必要があればするつもりだったけどね。宣戦布告を受けてもらわないと戦争が始められないから。でめ挑発つてすぐ苦手なんだよね。さて、そろそろDクラスにつく。相手に宣戦布告して受け入れさせる。これもある意味戦いだよね。だから始めよう。皆より先に、Fクラスが戦争をできるようにするための、わたしの戦争を。

棗「すみません。Dクラスの代表さんと呼んでもらっていいですか？」

クラスにいる人に話して代表を呼んでもらう。

『おい、代表。なんかちっこいのがお前に用があるってよ』

棗「ちっこい言わないで下さい」

人が気にしてることを。

平賀「代表の平賀だ。んで、なんの用だ」

棗「あ、はい。わたし達FクラスはDクラスに試験召喚戦争を申し込めます」

『なんだとー！！』

おお、息ピッタリだ。

平賀「FクラスがDクラスに？」

棗「はい」

平賀「勝てると思ってるのか？」

棗「当たり前じゃないですか。じゃなきゃ戦争なんて仕掛けませんよ」

『アイツ調子にのってないか？』

『たかがFクラスがなに言ってるやがる』

『おとなしくゴミのところに帰れよ』

平賀「そうか。だが、俺達にメリットもないのに受けても？」

棗「いえいえ、そちらはメリットしかないはずですよ」

平賀「なぜ？」

棗「DクラスがFクラスに負けるわけがない。勝てて当然だと思っ  
ているんでしょう？」

『わかってるじゃないか』

『なに当たり前なこと言ってるんだ』

平賀「当然だな」

棗「なら、やっぱりメリットしかないですよ。確実に勝てるクラス  
で試召戦争の経験と召喚獣の操作の練習ができるしね」

さっきから周りがうるさいな。

棗「ねえ、Dクラス代表。周りを静かにしてもらっていいかな」

ん？ なんだろう。一人近寄ってきた。そいつはわたしの肩に手をのせてきた。

『なあ、平賀。もうコイツ黙らせてFクラスに投げ込んでこようぜ』

平賀「おいおい……」

なにこの人？ なんでキレてんの？ わたし何かしたっけ？ うん、覚えがない。まあ、とりあえず暴力で何とかしようとする感じだし、こつちも相応の対処をしてもいいんだよね。やりますか。わたしは自分の肩にのせられている手を掴んで足を払い、うつ伏せに倒し、掴んでいた手をねじり上げる。

『いててて。何しやがる！ ていうかはなせ！』

何この人？ 威勢だけだ……。はっきり言って弱い……。

棗「何しやがるって……正当防衛だけど？ それとこつちはDクラス代表と大事な話をしてるんだから邪魔しないで」

平賀「あー。すまない。そいつ沸点低いんだ……」

そうなんだ。まあなんとなくわかったけどさ。

棗「そつか。とりあえず話の続きしようか」

平賀「いや、もう話し合いはいい。戦争を受けるよ」

棗「あれ？ いいの？」

平賀「ああ。これ以上やっても状況は悪化しかないからな」

なんだ。せつかく追い込む材料を手に入れたのにさ。ま、いつか。

棗「それじゃあ、受けるって言うてくれたし、いつ開戦とかの確認をしとこうか」

平賀「頼む」

棗「開戦は今日の午後からだよ」

平賀「午後からだな。わかった」

ちなみにこの会話の間、ずっとさっきのヤツの手をねじり上げたままだったりする。さて、宣戦布告も終わったしFクラスに帰るかな。

#### 第四話 宣戦布告（後書き）

今回でやっと棗が活躍です。

棗「本当にやっとだね」

まあこれからは出番も増えていくと思うよ。

棗「それは嬉しいね。これからアキとはどうなるのかな？」

それはこれからの事なのでわかりません

棗「そうですね……」

棗「えっと、次回は第五話 作戦会議 です。またね」

## 第五話 作戦会議

棗サイド

棗「ただいま。宣戦布告してきたよ」

明久「おかえり。なつめ」

雄二「おう。無事なようだなによりだ」

瑞希「お疲れ様です。くーちゃん」

雄二「それじゃ、これから作戦会議にはいるか。久多羅木、明久、ムッツリーニ、秀吉、姫路、島田はついてきてくれ」

ここでするんじゃないんだ。

棗「ほら呼ばれたよ、アキ。早く後を追わないと」

わたしはアキの手を掴んで、ゆうくんの後を追う。

明久「そうだね」

瑞希「二人とも待ってください」

美波「あの二人仲いいわね……」

秀吉「そうじゃのう」

康太「……妬ましい」

雄二「久多羅木、開戦は午後からと伝えたな」

棗「うん。しつかりと」

美波「それじゃ、先にお昼ご飯ってことね」

棗「アキ、ちゃんと持ってきてる？」

明久「大丈夫。ちゃんと持ってきてるよ」

秀吉「ん？ 何の話じゃ」

明久「お弁当の話だよ」

雄二「ああ、なるほど。今日は明久が当番の日だったのか」

雄二「さて、話を試召戦争のことに変えるぞ」

秀吉「雄二。一つ気になっていたんじゃが、どうしてDクラスなんじゃ？ 段階を踏んでいくならEクラスじゃろうし、勝負にでるならAクラスだろう」

瑞希「そういえば、確かにそうですね」

雄二「まあな。当然考えがあつてのことだ。Eクラスを攻めない理由は簡単だ。戦うまでもない相手だからな」

明久「え？ でも、僕らよりクラスが上だよ？」

棗「アキ、それは振り分け試験の時点では向こうが強かったかもしれないけど、実際は違うんだよ。周りにいるメンバーをよく見てみて」

明久「美少女が三人とバカが二人とムツツリが一人いるね」

雄二「誰が美少女だと!？」

明久「ええっ!？ 雄二が美少女に反応するの!？」

康太「……………(ポツ)」

明久「ムツツリ二まで!？」

棗「まさか、アキにバカだと思われてたんだね……………」

明久「なつめまで!？ どうしよう、ぼくだけじゃツッコミきれない!！」

秀吉「まあまあ。落ち着くのじゃ。雄二にムツツリ二に久多羅木」

アキ弄るのたまにはいいね。

雄二「久多羅木はもうわかかってるみたいだな。要するにだ、姫路に問題のない今、Eクラスとやっても勝てる。Aクラスが目標である以上はEクラスなんかと戦っても意味がない」

明久「Dクラスは厳しいの?」



雄二「確実に勝てるとは言えないな」

明久「だったら、最初から目標のAクラスに挑もうよ」

雄二「初陣だからな。派手にやって今後の景気づけにしたいだろ？

それにAクラスに勝つためのプロセスだしな」

棗「ゆうくんちょっといいかな」

雄二「なんだ」

棗「Fクラスに入るために点数をあんまりとってないんだけど。戦争が始まったらみいちゃんと一緒に回復試験受けた方がいい？」

雄二「今点数はどのくらいだ。召喚獣の操作もどんな感じが教えてくれ」

棗「全部40〜60ってところ。召喚獣はアキと同じくらいに動かせるよ」

雄二「明久と同じくらいか……。なら、回復試験は受けなくていい。明久と組んで時間稼ぎにまわってくれ」

棗「ん。わかった」

明久「雄二、さっきの話だけどDクラスに勝てなかったら意味がないよ」

雄二「負けるわけがないさ。お前らが俺に協力してくれるなら勝て

る

雄「いいか、お前ら。ウチのクラスは最強だ」

第五話 作戦会議（後書き）

棗「今回、短いし酷いね」

言うな。わかってる。次はなんとかしてみたい。

棗「はあ。まあいいや。次は第六話 Dクラス戦 ですよ。またね」

## 第六話 Dクラス戦？

棗サイド

FクラスとDクラスの戦争が始まった。わたしとアキは先攻部隊をまとめている。他の部隊は、中堅部隊でひでちゃんとみなみがまとめている、本隊はもちろん代表のゆうくん。ムツツリー二は一人で動いてるって。偵察部隊らしい。それと、これはあまり関係ないけど、戦争が始まる前にみなみにみなちゃんと言わないで欲しいと言われちゃった。

棗「一対一ではできるだけ戦わないで！」

明久「点数が少なくなったら無理しないで、回復試験を受けてくるんだ！」

わたし達先攻部隊は十五人、Dクラスの前線部隊はまだ様子見なのか八人。

棗「アキ、あの人とやるよ！」

明久「うん、わかったよ。なつめ！」

ゆうくんも無茶言ってくれるよね。戦いながら周りの様子を確認して指示をだせて。そして初の戦死者が出たみたい。

鉄人「さあ来い！ この負け犬が！」

『て、鉄人！？ 嫌だ！ 補習室は嫌なんだっ！』

鉄人「黙れ！ 捕虜は全員この戦闘が終わるまで補習室で特別講義だ！ 終戦まで何時間かかるかわからんが、たっぷりと指導してやるからな」

『た、頼む！ 見逃してくれ！ あんな拷問耐え切れる気がしない！』

鉄人「拷問？ そんなことはしない。これは立派な教育だ。補習が終わる頃には趣味が勉強、尊敬するのは二宮金次郎、といった理想的な生徒に仕立て上げてやるう」

『お、鬼だ！ 誰か、助けっ イヤアア (ボタン、ガチャ)』

周りが沈黙してる。まあそりゃ目の前であんなの見ればね。

棗「さあ皆、補習室(地獄)に行きたくなかったら、勝つしかないよ！」

『そつだ。勝てばいいんだ！』

『もう様子見なんてやってられるか！ 増員の要請をしろ！』

あれ？ なんかDクラスから嫌な命令が聞こえたんだけど……。増員が来るまでに敵部隊を0か、0に近づけないと。今のままで増員はきついよ。

明久「今までと同じように一対複数で戦うんだ！」

棗「アキ、こっちもやるよ」

明久「オツケーだよ」

棗・明久「サモン」

数学 Fクラス 吉井明久&久多羅木棗 43点&57点

VS

数学 Dクラス 長谷川大樹 87点

ちなみにわたしの召喚獣は、わたしの容姿でデフォルメされて、青色の着物を着ている。武器は日本刀。

相手がアキに襲い掛かってきた。アキは相手の攻撃を左に避けて、から空きの脇腹に木刀で攻撃する。

明久「ほい。なつめ、パース」

攻撃した時の勢いでこちらにとばしてきた。

棗「オツケーだよ」

飛んでくる召喚獣に刀を横に一振り。

数学 Fクラス 吉井明久&久多羅木棗 43点&57点

VS

数学 Dクラス 長谷川大樹 0点

うん。たいした点数じゃなくてよかった。

このくらいの点差なら召喚獣の操作経験少しあるし問題ないね。なんで操作経験があるのか言っておくね。アキの観察処分者の仕事に召喚獣だして操作の練習してたんだよね。実はわたしが観察処分

者だった、とかそういうのではないよ。

棗「ちよっときついな……」

わたしは周りをみて、誰にも聞こえないように呟いてみる。相手の前線部隊は残り三人、こっちも被害はあるけれどそれ以上残っているからなんとかなる。なるといいな。もうかなり近くにDクラスの増援が……たぶん十五人くらい。こっちの戦力を超えるね。

棗「（アキ、状況が悪化してきたら、最悪の状況になる前に後退するよ）」

明久「（わかったよ、なつめ）」

わたしはアキとアイコンタクトをとる。こんな不安を煽るような会話を周りに聞こえるようにする必要はないからね。

## 第六話 Dクラス戦？（後書き）

とりあえず分割ってことになった

棗「でもこれなら、今回でD戦終わらせてもよかったんじゃない」  
出来ればそうしようと思ってたんだけど……。

棗「だけど？」

ぶっちゃん「ここから先はノープランだ！」

棗「はあゝ。なんか思い付くことを期待しよう。次回は 第七話  
Dクラス戦？ です。またね」



## 第七話 Dクラス戦？

雄二サイド

俺は今ムツツリー二から状況を聞いている。

雄二「前線部隊は予想以上にやってくれてるな」

康太「……久多羅木、明久は問題ない。周りは結構削られている」

雄二「そんなのはわかりきってる」

今はまだいいだろうが、必ず前線部隊は押し切られる。こっちは援軍を前線に送ってないんだから、しょうがない。物量には勝てん。姫路はまだ時間がかかる。……久多羅木と明久には頑張ってもらおうか。

棗サイド

化学 Fクラス 久多羅木棗 & 吉井明久 52点 & 53点

VS

化学 Dクラス 阿東公平 & 久我拓海 0点 & 0点

Dクラスの援軍が来てからわたし達は苦戦を強いられてる。相手の方が人数が多いから一対多の状況になかなか持っていけないしね。周りの被害もかなりだ。これ以上は無駄に潰すだけだね。後退しよう。

棗「皆、後退するよ！」

秀吉サイド

さつきから前線部隊の状況を報告係が知らせてくれているのじゃが、やっぱりおされておるらしい。

美波「前線はもう限界みたいね」

秀吉「すぐ動けるようにしといたほうがいいのう」

そんな話をして、そんなにかからずに報告がきたのじゃ。

『前線が後退を開始した！』

美波「前線の援護に行くわよ！」

秀吉「総員突撃じゃ！」

棗サイド

棗「あつ！ ひでちゃん！」

秀吉「大丈夫かの？ 今どんな状況じゃ？」

明久「僕となつめは無傷だけど、ほかはかなり厳しいよ」

美波「それじゃ、なつめと吉井以外は回復試験に行つて」

それじゃわたし達はつと。

棗「アキ、わたし達はそのまま戦つよ」

明久「当然だね」

それはもちろんだね。無傷なのに回復試験を受けてもしょうがない。今の点数より上を取れるなら話はかわってくるけどね。

棗「それとこれからの指揮はひでちゃんとみなみがよろしくね」

秀吉「わかつたのじゃ」

美波「任せて」

指揮を出す人が多いと混乱するからね。もう話は終わりみたい。Dクラスの群れがかなり近くに来てるよ。

雄二「サイド」

ウチの中堅の戦闘が始まつたらしい。ペースとしてはなかなかだ。それにあいつもそろそろだしな。

瑞希「お待たせしました」

雄二「おう。おわつたか」

瑞希「はい。それで今どんな状況ですか？ 吉井君は？」

姫路、わかりやすいヤツだな。

雄二「今は前線部隊が中堅部隊と合流して戦っている。それと明久

は無事だ」

それじゃあこっちも動くか。

秀吉サイド

『横溝がやられた！ これで布施先生側は残り二人だ！』

『五十嵐先生側の通路だが、現在俺一人しかいない！ 援軍を頼む  
！』

『藤堂の召喚獣がやられそうだ！ 助けてやってくれ！』

まずいのう。物凄い劣勢じゃ。久多羅木達は……ありえないことになってるのう。さすがに援護は頼めん。

秀吉「布施先生側の人達は召喚獣を防御に集中させるのじゃ！ 五十嵐先生側の人は総合科目の人と交代しながら勝負するのじゃ！ 藤堂は残念だが諦めるのじゃ」

『了解』

とりあえず言われた事には全て指示を出し終わったあと、また別の声が聞こえた。

美春「ようやく見つけました！ お姉さま！」

美波「げっ！ 美春」

秀吉「何じゃ島田。知り合いかのう」

美春「なっ!? お姉さま! 美春というものがありながらそんな豚や……ごめんなさい、間違いました。制服が違ったので女の子だと気付くのに時間がかかりました。豚野郎は忘れてください」

秀吉「……それは、ワシのことを言っておるのかのう?」

美春「そうですよ」

秀吉「ワシは男じゃ!?!」

美波「美春、いい加減ウチのことは諦めなさいって言ったでしょ」

秀吉「ところで島田よ、さっきからアヤツが言っておるお姉さまって」

美春「嫌です! お姉さまはいつまでも美春のお姉さまなんです!」

美波「来ないで! ウチは普通に男が好きなの!」

ああ。なんとなくわかったぞい。ようはあの美春とやらは女の子が、というか島田が好きなのじゃな。島田も苦労してるのう……。

秀吉「その美春とやら」

美春「なんですか?」

秀吉「おぬしの恋愛を別に否定はしないのじゃが」

美波「否定してよ!?!」

秀吉「今は戦争中じゃから、持ち出されると困るのじゃ」

美波「ねえ！ 木下！」

秀吉「安心するのじゃ。おぬしがそつち系でないのはわかっておる」

美春「なら、無理矢理奪うしかないですね。サモン」

秀吉「島田よ。ここでヤツを倒して補習室に叩き込むぞい。サモンじゃ」

美波「そうね。そうすれば一時的にでも平和が、安息が。サモン」

苦労してるようじゃな……。

化学 Fクラス 木下秀吉&島田美波 63点&53点

VS

化学 Dクラス 清水美春 94点

相手の召喚獣が突っ込んできた。やっぱり島田に。今二人は鏢迫り合いをしている。ワシは鏢迫り合いをしているところに一撃を入れる。その後邪魔に思ったのか島田との戦いをやめてワシの方に襲い掛かってきたのじゃ。隙だらけの召喚獣に島田が一撃。

化学 Fクラス 木下秀吉&島田美波 63点&32点

VS

化学 Dクラス 清水美春 0点

島田は鏢迫り合いでダメージを受けたみたいじゃがまあ大丈夫じゃ

ろう。

美波「補習の西村先生、早くこの危険人物を補習室へお願いします！」

鉄人「おお、清水か。たつぷりと勉強漬けにしてやるぞ。こっちに  
来い」

美春「お、お姉さま！ 美春は諦めませんから！ このまま無事に  
卒業出来るなんて思わないでくださいね！」

最後に物凄く物騒な言葉を残していったの……。

棗サイド

周りからは状況が悪い知らせが結構聞こえてくる。援護にいかない  
と。

明久「ねえ、なつめ」

棗「何？」

明久「一対四と二対八、どっちがいい？」

棗「は？」

アキの質問の意味がわからない。なんでそんなでかい数字が出てくるの？ その疑問がアキにもわかったのかある場所に指をさした。その場所には、Dクラスの生徒が八人こっちに向かってきてる……。

第七話 Dクラス戦？（後書き）

栗「わざわざモブまで名前つけてるんだね」

なんとなくね。適当に名前作るのも大変だ。

栗「それじゃ、次は第八話 Dクラス戦？ です。またね」



## 第八話 Dクラス戦？

棗サイド

さて、こっちに向かってきてる八人はどうしようかな。周りを確認しても手が空いてる人はいない。二人でやるしかないね。そうだね。まず確認しておこう。

棗「アキ、古典は何点くらい取れてるの？」

これは確認しとかないとね。なんせ、こっちに向かって来る群れは古典の先生を連れて来てるんだから。近くの他のフィールドに逃げてもいいけどその前に捕まりそうだし。

明久「あと1点。そうあと1点で……」

棗「あと1点で？」

明久「二桁になる」

棗「一対八ね」

明久「今全く悩みがなかったよね!？」

今のを聞いて何を悩むの？ どうしようかな、アキと一緒に勉強をしようかな。

棗「アキ、全部避ける自信ある？ あるなら二対八でいけるよ」

明久「出来るよ。ていうか出来ないと僕が痛いしね」

棗「まあそうだね」

最初の出来るよ、で止めとけば良かったのに。

明久「それでどうするの？ 結構不利な状況だけど」

棗「アキ、少しは考えようね。とはいってもわたしも自信ないけど……。そうだね、簡単に言っちゃうと同士討ちでもしてもらおうかな。あとは敵の召喚獣を盾にするつもりだし」

明久「うーん。まあ、やってみるよ」

そろそろあっちも準備出来るのかな。出来るだけ早く来てくれると嬉しいけど。

明久「敵が来たよ」

棗「始めようか」

棗・明久「サモン」

古典 Fクラス 久多羅木棗 & 吉井明久 58点 & 9点  
VS  
古典 Dクラス Dクラス八人 平均95点

『なんだ、あの点数』

『これならアイツはそれほど気にしなくていいな』

『さつさと潰すぞ』

アキ、散々言われてるね……。

敵が先に動き出してきた。最初は出来るだけ回避に専念して、隙をみつけて攻撃する。相手が多いんだからしょうがない。それを続けていたら、前と後ろからの挟みうちをしてきたよ。前から来る召喚獣から何とかした方がいいね。一步左に動いて攻撃を避けてから、攻撃してきた召喚獣の腕を掴んで後ろから来ている敵に投げつける。投げられた召喚獣と後ろから来ていたのがぶつかって倒れる。倒れて体勢を立て直してるうちに数回攻撃して終わり。

棗「これで二つ」

アキも何人が倒したみたいだけどまだきついな。

『たった二人なのになんで勝てないんだ！』

『くそ！ 攻撃が当たらない！』

雄二「久多羅木、明久、あと少し持ちこたえろ！」

やっとだね。後ちょっと耐えれば状況は変わる。

『援軍だ。合流される前にこいつらだけは倒すぞ！』

おとなしくやられるつもりはないよ。

ゆうくんが合流した時には八人いた敵は三人にまで減っていた。残

っていたのはゆうくんの部隊が片付けたよ。

雄二「無事だな久多羅木、明久、秀吉、島田」

棗「なんとか」

明久「同じく」

秀吉「結構ギリギリじゃ」

美波「ウチもよ」

雄二「そうか。皆には悪いがこのままDクラスの頭を討ちに行くぞ。やってもらうことがあるからな」

やること……それは皆でDクラス代表までの道を作ること。

明久「いた。Dクラス代表だ」

棗「アキ、行くよ」

わたし達はDクラス代表に駆け出した。けど邪魔が入ったよ。

美紀「Dクラス玉野美紀、サモン」

明久「近衛兵！」

わたし達の最後の仕事、近衛兵の気を引いとくこと。代表を討つのは別の人がやってくれるからね。

瑞希「あ、あの……」

平賀「あれ、姫路さん。どうしてここに」

瑞希「その……Fクラスの姫路瑞希です。Dクラス代表に現代国語勝負を申し込めます」

平賀「はあ。……どうも」

勝負は一瞬でついた。

そのあと、ゆうくんとDクラス代表で戦後対談が行われて、条件付きで設備は交換しないってことになった。

明久サイド

明久「なんとかDクラスに勝てたね」

棗「そうだね」

今僕達は戦争が終わって、なつめと一緒に帰宅している。

明久「明日は丸一日補給試験だね」

棗「そうだね。アキ、ちょっと提案があるんだけど」

明久「何？」

棗「わたしとこれから一緒に勉強しない？ 嫌なら断ってくれていいけど」

嫌どころかありがたい提案だと思うよ。

明久「うん。ありがと。お願いするよ」

棗「これから一緒について言ったけど、今日だけの話じゃないよ?」

明久「うん。むしろ嬉しいよ」

棗「わかったよ。アキ、さっきも言ったように今日から始めるからね」

なつめは笑顔だった。その笑顔が可愛くて……。その笑顔を見ただけで顔が熱くなった。

## 第八話 Dクラス戦？（後書き）

棗「やっとDクラス戦が終わったね」

はい。終わりました。無理矢理な感じがありますが。

棗「まあ無理矢理だったね。次頑張ってるね。次は第九話 休息です。またね」

## 第九話 休息

棗サイド

今日は疲れた。二年が始まったばかりなのにこんなに忙しく、騒がしくなるなんてね。まあ、わたしも騒がしいのは結構好きだけど、初日から戦争するとは思ってなかったし。でも、なんで戦争を仕掛ける気になったんだらう。きっかけはたぶんアキとゆうくんだよねん、まあ考えても仕方ないね。そだね。明日の事を考えよう。

明日は丸一日補給試験に充てるんだったね。わたしもここでちゃんとやっとなないと次はきついかも。次はBクラスらしいし。今どれくらい点数取れるのかな。アキとの勉強は今日から始めたけど、今までも一人でやってきてるんだしね。

棗「得意科目は別にしても他は、Cクラス上位くらいはとれたらいいいな」

まあテストは明日なんだし、やってみないことにはわからないんだから、今は考えなくていいね。ああ、そうだ。明日のお弁当、わたしが当番だった。とりあえず冷蔵庫をみて、何を作るか考えながら寝よう。もういい時間だし。

棗「う、うん。眩しい」

わたしは目を覚ました。どうしよう。遮光カーテンにしようかな？

まあいいや。とりあえず起きてお弁当を作り、朝ご飯を食べて、学校に行く準備をして家を出る。それでアキの家の前でアキが出てくるのを待つ。ちゃんとアキ、起きてるかな？ そんなことを気にしていたらアキが出てきた。



明久「おはよう、なつめ」

棗「おはよう、アキ」

わたし達は挨拶をしてから学校に向かって歩いた。

明久「今日のテストはなんかいけそうな気がするよ」

棗「アキ……、一日勉強したくらいじゃそこまで変わらないと思うよ。でも頑張つてね」

明久「もちろんだよ」

わざわざ相手のやる気を削ぐ必要もないしね。

学校についてわたし達はFクラスにいる。

雄二「おお、明久。今日も早いな」

明久「まあね」

雄二「まあ、起きれなかった場合、久多羅木が起こしているんだろ  
う」

棗「うん。玲さんから合鍵もらってるし」

雄二「玲？」

明久「僕の姉さんだよ」

『殺せー！ー！！』

このクラスの事はよくわからない。いったい何が原因で、今アキが狙われてるんだろう。

棗「ほら、皆落ち着いて」

『退くんだ久多羅木さん！ そいつを殺せない！』

『なぜ邪魔をするんだ！？』

棗「だから落ち着いてって。それとーつ言っておくけど、アキに危害を加える人は」

『吉井に制裁を与える者は？』

棗「嫌いだよ」

あ、皆散った。

明久「た、助かったよ。なつめ」

棗「何が理由かわからなかったけど、アキも災難だね」

ホントは理由はなんとなくはわかってるけど、まさか姉がいるっただけであそこまでなるものなのかな。

雄二「ほう、FFF団を黙らせるとはな」

棗「何？ そのFFF団って？」

雄二「簡単に言うと人の幸せが許せない奴らの集まりだ」

棗「そんな危険なのがあったんだ……」

ほんとにこのクラスなんなんだろう……。

あとでアキに聞いたら入ってないみたい。よかったよ、入ってなくて。

雄二「だが明久、お前の家に何回も遊びに行ってるが、一切見たことないが？」

明久「それはそうだよ。姉さんアメリカに行ってるし」

雄二「ふうん」

棗「ほらアキ、ゆうくん。もう時間みたいだよ」

今はお昼休み。

棗「アキ、調子はどう？」

明久「ダメかな。振り分け試験の時と同じ感じだよ」

それはそうだろうね。一日で結果が変わるなら誰も苦労はしない。

雄二「よし、昼にするか。今日はラーメンとカツ丼と炒飯とカレー」

にすっかな」

なにそれはツッコミまち？

棗「はい。アキお弁当」

明久「ありがとう。なつめ」

美波「なつめって吉井にしかお弁当を作らないの？」

棗「そのつもりだけど」

なんだろう。みなみが怖い。なんかみなみの後ろに黒いものが見える……。

秀吉「姫路は料理は作れるのかのう」

瑞希「私は作ることを禁止されています。条件付きでなら出来ますけど」

雄二「禁止されてるのか。何をしたんだ。てか、条件って……」

瑞希「条件はくーちゃんか吉井くんのどちらかがいれば作っていいつてものです」

棗「何で禁止にしたか。それは一人でやらせると何をするかかわらないから」

アキが震えてる。まあわたしもだけど。

棗「みいちゃんがあんな事を二度としなくなるまで、わたしかアキが見てるどころじゃないと作らせないようにしたの」

秀吉「ちなみに何をしたんじゃ？」

棗「料理の味付けと言って硫酸、硝酸カリウム、クロロ酢酸などを使ってたよ」

雄二「それは一人で作らせちゃいけないな」

ゆうくんの顔が青くなってる。どうやら危険性を認識してくれたらしい。

明久「あれで入院しかけたもんね」

棗「そうだね。それとみいちゃんの為に言うておくけど、薬品を使わない料理は普通に美味しかったよ」

瑞希「ありがとうございます」

雄二「さて、さっさと飯食って午後に備えるか」

明久「結果は振り分け試験の時と変わらない感じだね」

棗「朝も言ったように一日くらいじゃ変化なんてまずないよ。焦らずにこれから毎日やっていけば、必ず結果はついてくるよ」

明久「そうだね。焦らずに頑張るよ」

今は学校が終わって帰宅中。このままアキの家に行って勉強してまた明日って流れになる。

アキの家についてアキが勉強の準備を始める。ほんと、やる気になったんだね。わたしも準備し終えて、カバンの中に入れていた物を手に取る。

明久「あれ？ なつめ、それって」

棗「うん。そうだよ」

これは、アキから貰った一番大切な宝物。誕生日とかでもプレゼントを貰ったりしたけどこれは特別、アキがわたしにくれたはじめてのプレゼント。それをいつも私は持ち歩くの。

## 第九話 休息（後書き）

棗「なんかタイトルと中身が違うような」

いいの。気にしない。

棗「それで、わたしの大事な物出してどうするの？」

まあ気にしない。

棗「教えてくれてもいいじゃん。はあ、次は第十話 Bクラス戦  
です。またね」

## 第十話 Bクラス戦？

美波「そういえば坂本、次の目標のことだけど」

雄二「ん？ 試召戦争のか？」

美波「うん」

Dクラス戦が終わってから二日目。わたし達はお昼を食べたあと、次の戦争の話を始めました。

美波「次はBクラスなの？」

雄二「ああ。そうだ」

美波「どうしてBクラスなの？ 目標はAクラスなんでしょう」

なんでBクラスなのかが疑問なんだね。わたしはなんとなくゆうくんが考えてることがわかったけど。

雄二「正直に言おう。どんな作戦でも、うちの戦力じゃAクラスに勝てない」

美波「それじゃあBクラスが最終目標？」

雄二「いいや、そんなことはない。Aクラスをやる」

明久「雄二、さっきと言ってることが違うじゃないか」



雄二「クラス単位では勝てないと思う。だから一騎打ちに持ち込むつもりだ」

明久「一騎打ちに？ どうやって？」

雄二「久多羅木。説明頼む」

棗「え？ なんでわたし？」

急に話を振られてもこまるんだけどな。

雄二「どうせこの後、俺がどういう方法で一騎打ちに持っていかうとしているか、もう大体わかってるんだろ？ なら明久に説明するのも面倒だから任せる」

いいのかな、それで……。

明久「雄二、なんか酷いこと言ってる？」

棗「まあ、いいのかな？ とりあえず一騎打ちに持ち込むためにBクラスを使うんだよ」

明久「え？ どういうこと？」

棗「じゃあアキ、問題です。試召戦争で下位クラスが負けた場合、設備はどうなると思う？」

明久「え？ うん。………ごめん。わからない」

棗「……みいちゃん、答えをどうぞ」

瑞希「下位クラスは負けたら設備のランクが一つ落とされます」

棗「うん。正解。BクラスならCクラスの設備に落とされるんだよ」

明久「へへ、なるほど」

棗「続けてアキに問題です。上位クラスが負けた場合はどうなると思っ？」

明久「悔しい」

わたしは軽く頭を横に振る。しかも溜め息つきで。

明久「なつめ、僕を見捨てないで」

棗「ということ、またみいちゃん。答えをどうぞ」

瑞希「相手クラスと設備が入れ替えられちゃうんですよね」

棗「うん、そうだね」

明久「つまり、うちに負けたクラスは最低の設備と入れ替えられるわけだね」

棗「そうだよ。それでそのシステムを利用して、交渉するの。ゆうくん、もうこの辺でいいかな？」

雄二「ああ。十分だ」

瑞希「交渉、ですか？」

雄二「Bクラスをやったら、設備を入れ替えない代わりにAクラスへと攻め込むよう交渉する。設備を入れ替えたならFクラスだが、Aクラスに負けるだけならCクラスですむ」

明久「ふんふん。それで？」

雄二「それをネタにAクラスと交渉する。Bクラスとの勝負直後に攻め込むぞって感じにな」

明久「いろいろ考えてるんだね。僕なんて何も思いつかなかったよ」

雄二「お前と比べるな」

秀吉「しかしこの内容を久多羅木も考えておったとはのう」

棗「たまたまだよ」

雄二「んじゃま、Bクラスとの戦争に勝つぞ」

昼休み終了のベルが鳴り響いた。Bクラスとの戦争の始まりだよ。わたし達の目的は敵を教室に押し込むこと。わたし達はほぼ全戦力を投入してBクラスに向かって走っています。今回のこちらの主武器は数学。数学は得意科目だからそこそこ戦えるね。

『いたぞ、Bクラスだ』

『高橋先生を連れてくるぞ！』

Bクラスのメンバーは十人位。様子見かな？

『生かして帰すなーっ！』

物騒な言葉とともに戦いが始まった。

総合 Fクラス 近藤吉宗 764点

V S

総合 Bクラス 野中長男 1943点

点数高いな。っとわたしもやろう。

数学 Fクラス 久多羅木棗 349点

V S

数学 Bクラス 金田一裕子 159点

『何！？ その点数！ ホントにFクラス！？』

棗「数学は得意なんだ」

ほかにも得意科目はあるけどね。

瑞希「お、遅れ、まし、た……。うめ、んな、さい……」

みいちゃん。運動苦手だもんね。

『来たぞ！ 姫路瑞希だ！』

明久「姫路さん、来たばかりで悪いんだけど……」

瑞希「は、はい。行って、きます」

『長谷川先生、Bクラス岩下律子です。Fクラス姫路瑞希さんに数学勝負を申し込みます!』

瑞希「あ、長谷川先生。姫路瑞希です。よろしくお願いします」

『律子、私も手伝う』

『サモン』

みいちゃんの召喚獣はアクセサリーをつけていた。

『そ、それって!?!』

『私達で勝てるわけじゃない!』

あ、みいちゃんいいなあ。腕輪持ちだね。

瑞希「それじゃあ、いきますね」

数学 Fクラス 姫路瑞希 412点

V S

数学 Bクラス 岩下律子&菊入真由美 189点&151点

瑞希「ごめんなさい。これも勝負ですので」

みいちゃんの召喚獣が敵二人の召喚獣を、大剣で一刀両断し、決着はついた。

『い、岩下と菊入が戦死したぞ!』

『なっ! そんな馬鹿な!?!』

『姫路瑞希、噂以上に危険な相手だ!』

『それに久多羅木とかいうのも厄介だぞ!』

敵は動揺してるね。今のうちにここの戦いを終わらせよう。

明久「なつめ、僕はちよつと教室に戻るよ」

棗「何かあったの?」

明久「ちよつと気になることがあるだけだよ」

棗「……わかったよ。何人が連れてくる?」

明久「いや、大丈夫」

棗「そう、とりあえずわたしはこの突破に専念するよ」

明久「うん。お願いね」

わたし達は廊下のBクラスを撤退させて目的通り教室に押し込んだ。……ところで、戦争が終わったよ。どうやらBクラスと協定を結んだらしい。

棗「何これ?」

教室は酷い状況だった。穴だらけになったちゃぶ台、壊された筆記具。

雄二「ちよつと教室を空けてる間にやられてな」

棗「うん？ 教室を空けてたの？ 今回の協定とかに関係あるのかな？」

雄二「ああ。その協定で空けてたからな」

Bクラス最低だね。いや、この言い方は正しくないね。この言い方だとBクラス全員が最低になっちゃうしね。こんなことをやるのは少数だろうしね。

康太「Cクラスの様子がおかしい」

雄二「漁夫の利を狙うつもりか。いやらしい連中だな」

明久「雄二、どうするの？」

雄二「そうだな。Cクラスとも協定を結んでおくか。久多羅木、明久ついて来てくれ」

それで現在Cクラス代表を呼び出しているところだよ。

小山「何かよう？」

棗「あ、小山さんだ」

小山「久多羅木さん!？」

なんでそんなに驚くんだろ？

雄二「なんだ、知り合いか？」

棗「うん」

雄二「まあいい。Fクラス代表としてクラス間交渉にきた。時間はあるか？」

小山「クラス間交渉？ ふうん……」

雄二「ああ。不可侵条約を結びたい」

小山「不可侵条約ね……」

ん？ 小山さんがわたしをみてる。ここはクラスのために一言言っておこうかな。

棗「小山さん。拒否権はないよ」

笑顔で言ってみた。でもどうしたんだろう。さっきからわたし達をみてたCクラスの男子がいきなり顔を赤くして、顔を背けたよ

小山「！ ……わかったわ。その条約結びましょう」

小山さん？ なんで震えてるの？

雄二「そうか。破らないことを期待する」



小山「破らないわ。あんなのは二度とごめんよ」

雄二「？ とりあえず話は終わった。帰るぞ」

明久「なつめ？ なんかあの人震えてたけど何かしたの？」

棗「一回だけね。わたしがアキの話したら、そのアキのことをバカにしてきたから、ちよつとだけお仕置きしてあげたんだよ」

雄二「なるほど、トラウマか……」

明久「なるほどね……。とりあえず今日はもう帰ろうか」

第十話 Bクラス戦？（後書き）

たぶん次でBクラスは終わるんじゃないかと

棗「はいね。Dクラスは三つも使ったのに」

まあ、あくまでたぶんですから。

棗「それじゃ、次は第十一話 Bクラス戦？ です。またね」

## 第十一話 Bクラス戦？

棗サイド

今日はBクラスとの戦争だったけど、Bクラスとの協定で今日の勝負は途中で終わりになったよ。その協定をするために、クラスを空けてる時に誰かはわからないけど、教室を荒らされた。そんな姑息な手を使う人に負けるわけにはいかないよね。だから絶対に勝つ。

それで今は、アキとの勉強も終わって自分の部屋にいる。わたしはバックの中にあるアレを探しているんだけど……。みつからない。アキの家に置いてきちゃったかな？ でもアキの家では見てないよね？ 学校に忘れたのかな？

棗「うん。明日学校で探してみよう」と

それで次の日、学校についたら教室は大変なことになってたよ。

『くそ！ 俺の聖典が！』

『俺もだ！ 聖典をこんなにしやがって！』

『聖典をこんなに切り裂きやがって！』

『畜生！ こんなことやった奴は許さない！』

どうやらわたしだけじゃなくて他の人達も物が無くなってたみたいだね。で、朝教室に行ったら盗まれた物が返還されてたらしい。ボ

口ポロになつてたり、壊されてるらしいね。なんだろう。嫌な予感  
しかないんだけど。でもなんだろう？ 聖典って？ まあいいや。  
わたしも探してみよう。

棗「……あつた」

わたしが使つてるちゃぶ台に置かれてた。壊された状態で。わたし  
の宝物。『ビーズで作ったブレスレット』が……。そんなものが宝  
物？ って疑問に思う人もいるだろうけどわたしには確かに大事な  
物なんだ。

棗「あははは」

こんなことをしてくれたのは何処のどいつかな？ いやどこかはわ  
かつてるね。Bクラスだ。誰かは知らないけど……ゆうくんは知っ  
てるかな？

棗「ゆうくん。……ちょっといいかな？」

雄二「ん、何だ？ ……どうかしたのか？」

ゆうくんがなんか警戒してる。まあそんなのどうでもいいよね。

棗「昨日、教室を荒らした奴が誰かわかる？」

雄二「……ああ」

棗「そいつ、教えてくれない？」

明久「なつめ、なんか怖いよ？」

それは、そうだよ。怒ってるしね。しかしFクラスにいる話に加わってない人が震えてるね。もしかして、わたしがかなりブチ切れ状態だっってわかってるのかな？

棗「そんなことはないよ、アキ。それでゆうくん、教えてくれない？」

雄二「……Bクラス代表の根本だ」

棗「あのきのこ頭か……」

アイツはろくな噂がなかったね。たしか、カンニングの常連。目的の為には手段は選ばない奴。例えば、『球技大会で相手チームに衣服盛った』とか『喧嘩に刃物は当然装備』とかだね。デフォルテ

棗「ゆうくん。一応確認しておくけど、間違いないね？」

雄二「ああ。間違いないな」

棗「わかった。ちょっと滅ぼして来る」

雄二「久多羅木待て！！今は戦争中なんだぞ！」

棗「大丈夫、戦争なんだから、血が流れたって、何の問題もない」

雄二「大ありだ！ここは学園だ。紛争地帯と一緒にするな」

棗「なら、戦争を終わらせたら、滅ちゃっていい？」

雄二「ダメに決まってるだろうが！　だが虐めるくらいなら構わん」  
棗「納得は出来ないけど、わかつたよ。出血も無く、暴力を受けた  
痕跡すら残さないように虐めるよ」

雄二「あ、ああ……。それで、いい……」

棗「それじゃ、この戦争……。すぐ終わらせようか。あははは」

雄二・明久「……」

わたしは戦争が再開されるのを待つことにした。待ってるよ。すぐ、  
潰しに行くから。わたしは教室を出た。

明久サイド

なつめが教室を出て行ったみたいだ。

雄二「おい、明久。なんで久多羅木は暴走しそうなんだ。あの状態  
はホントに怖いから……」

それはそうだよな。どうやってか知らないけどなつめの周りには黒  
いオーラみたいなのがみえてたからね。しかも誰の目から見ても確  
認出来るからね。表情とかは変わらないけど雰囲気が変わるし。普  
段可愛い女の子が、美少女が、ああなるとホントに怖い。雄二です  
ら恐れる位だ。でもさっきのを見た感じ、ブチギレてはいるけどま  
だ暴走まではしていない。それが唯一の救いだ。

明久「わからないよ。何か理由があるとは思っけど……」

僕はちやぶ台の上にあるものをみた。

明久「あゝ。これが理由かも」

雄二「ん？　なんだそれは？　ビーズの……ブレスレットか？」

明久「うん。昔なつめにあげたんだよ」

雄二「なるほど。それを壊されればああなるわな」

明久「とりあえずこれは直しておこうかな」

雄二「ああ、そうしておけ。で、これからの事を話しておくが、はつきり言つて、もうBクラス戦は勝ちが確定した。久多羅木がああなったからな。作戦も要らないだろう。問題は戦争が終わった後だ。久多羅木を止めないといけない」

明久「そうだね。でもどうやって止めようか？」

雄二「お前が、命懸けで羽交い締めして、なんとかしろ」

明久「うわっ！？　丸投げだよ！」

雄二「安心しろ。久多羅木は暴走はしてないんだ。それならお前の頑張り次第ですぐ止まる。さて、そろそろ戦争も開始だな。頼むぞ明久」

明久「もし止められなかったら？」

雄二「簡単だ。久多羅木に問題児のレッテルを貼られて、下手すれ

ば観察処分者になるだろうな」

明久「わかった。全力で止めるよ！」

棗サイド

時間だ。戦争の開始だね。じゃあわたしも行くか。Bクラスへ。

棗「Bクラスに到着っ」と

今展開されてるフィールドは古典と数学ね。ならまずは、数学のフィールドの方を片付けよう。

わたしは数学のフィールドにいるFクラスの群れを無理やり前へ進んだ。少ししてやっと前線についた。戦ってるのはFクラスもBクラスも少数だね。わたしはそんなにちまちまやるつもりは無いんだよ。

棗「ちよつとどいてね」

わたしは無理やりBクラスに入り込んだ。

秀吉「久多羅木？ どうしたのじゃ？ なんか怖いぞい」

棗「Bクラス代表をさっさと潰したいから、すぐに戦争を終わらせるよ」

『アイツなに言ってるんだ』

『そんなこと出来るわけないだろう』



『調子にのるんじゃないぞ!』

棗「うるさいな。このフィールドにいるBクラス生徒全員に勝負を申し込みます。サモン」

『こいつバカなのか?』

『バカなんだろうな。そうじゃなきゃこの人数差でやろうとはしないだろ』

棗「そんなことはいいから、さつさと召喚するか逃げるかしてください。まあ、こっちは勝負を仕掛けているのだから、それを受けずに逃げたら敵前逃亡で補習室に連行ですけどね?」

『『『サモン』』』

数学 Fクラス 久多羅木棗 349点

VS

数学 Bクラス Bクラス十三人 平均168点

敵の召喚獣三体が襲い掛かってきた。けど……。

棗「邪魔」

三体の召喚獣を全て一振りで終わらせたら。

『今何があつたんだ!?!』

『わからない! 見えなかった!?!』

今のわからないんじゃない？ 『今の』 わたしには勝てないよ？ 今の状態なら召喚獣の操作がともスムーズに出来るんだよね。それと今なら目視出来ない速度で動くなんて余裕よ？

棗「それじゃ残りもサクツとやつちやいますか」

残っていた十体の召喚獣を一瞬で片付けた。最初の三体と同じように一振りです。

数学 Fクラス 久多羅木棗 349点

VS

数学 Bクラス Bクラス十三人 0点

『なんだアイツやばいぞ！』

『アイツを早く潰すぞ！』

『そのFクラス女子に古典で勝負を申し込みます！』

ああ。獲物に向かって歩いてるうちに違うフィールドに入ってたんだ。

棗「サモン」

古典 Fクラス 久多羅木棗 152点

VS

古典 Bクラス Bクラス十一人 0点

古典は得意じゃないけど、それでも大丈夫みたいだね。

後もう少しでつく。

『これ以上は行かせない!』

『ここで止める!』

棗「どいてくれない? わたしはそこにいるゴミに用があるの」

『確かにアイツはゴミだ! だが今は戦争中で、アイツは一応このクラスの代表だ』

『そうだ。あのゴミがやられたら俺達の負けだからな』

『あんなゴミを守りたくないが、しょうがないんだ。と言うわけで高橋先生、そのFクラス女子に化学勝負を申し込む』

『『『サモン』』』

化学……ね。わたしの勝ちだね?

棗「サモン」

化学 Fクラス 久多羅木棗 368点

VS

化学 Bクラス Bクラス近衛兵四人 平均197点

『数学だけじゃなかったか……』

『選択を間違えたな……』

棗「それじゃ、終わらせるね」

わたしは召喚獣を動かし、今までの人達と同じように一瞬で終わらせたら。」

棗「後はお前だけ。化学のフィールドのままでいいね。ということで、Fクラスの久多羅木です。Bクラスの代表に勝負を申し込みます。サモン」

根本「お前なんか俺に勝てると思ってるのか？」

棗「当たり前でしょ。あんなことをしたことを後悔させてあげる」

根本「これを見ても勝てると思ってるのか？」

そういつてゴミはポケットから封筒を取り出した。

棗「それがどうしたの？」

根本「これはお前のじゃないのか？」

棗「残念ながら。わたしのは昨日、教室を襲撃されたあと無くなって、今日、壊れた状態で戻ってきたから」

根本「ちつ。コイツはお前のじゃなかったのか。あっちだったか」

『おい、根本それは何だ？ 教室襲撃ってのは？』

『壊れて戻ってきたとか言ってたぞ』

『もしかしていつもの卑怯か？』

『だからか。さっきからあの女の子が常に黒い何かわからないものを噴出してるのが謎だったんだが』

棗「とりあえずこれは預からせてもらおうよ」

今わたしはさっきまでゴミが持っていた封筒を持っている。

根本「！？ いつ盗った！？」

棗「盗るタイミングなんていくらでもあったよ？ それとさっさと勝負を受けてくれない？ 早くこの戦争を終わらせたいんだ。そのあとやることもあるしね」

根本「く、くそが！！ サモン」

他の人と同じく一瞬で倒した。わたし達Fクラスの勝利。

棗「さてそのゴミ。わたしはお前を潰すことにしたよ」

雄二「明久！！ 久多羅木を止める！！」

明久「わかってるよ！！」

わたしはアキに羽交い締めにされた。どうしよう？ 今なら振りほどけるけど。

棗「アキ。何してるの？ 邪魔しないで？」

明久「ダメだよなつめ。これ以上はダメだよ。ね、落ち着いて？」

わたしはアキに頭を撫でられながら説得されていた。羽交い締めにしなから頭を撫でるなんて以外と器用だね。納得はしてないけどアキに従っておくことにしようかな。

棗「わかったよ。もう暴れないから離して？」

明久「本当に？」

棗「心配ならわたしの頭を撫でて？」

明久「ん。わかったよ」

アキに頭を撫でられた。暴れないって言ったのに……。でもアキに頭を撫でられるとそんなことがどうでもよくなる。わたしは気持ちよくて、うん、アレだ。顎を撫でられてた猫が気持ちよさそうに目を細めてる状況、が今のわたしの状況だったりする。ちなみにこの時のわたしの写真をムッツリーニが撮ってたらしいね。しかもその写真が過去最大の売上が叩き出したとかなんとか。それとムッツリーニがちの海に沈んでた。

雄二「ふう。なんとかあったか。よくやった明久。さて、Bクラス  
の男子も女子も、久多羅木をみて顔を赤くしないで戦後対談といこうか？ 本来なら設備を明け渡してもらい、お前らには素敵な  
ちやぶ台をプレゼントするところだが、特別に免除してやらんでも  
ない」

ゆうくんの発言に、周りがざわついてるね。

雄二「落ち着け、皆。前にも言ったが、俺達の目標はAクラスだ。ここがゴールじゃない」

秀吉「うむ。確かに」

雄二「ここはあくまで通過点だ。だからBクラスが条件を呑めば解放してやるうかと思う」

根本「……条件はなんだ」

雄二「条件？ それはお前だよ、負け組代表さん」

根本「俺、だと？」

雄二「ああ。お前には散々好き勝手やってもらったし、正直去年から目障りだったんだよな」

普通なら誰かしら弁護するんだろうけど、やっぱり誰もしないね。そう言われることをやってきたんだから。

雄二「そこで、Bクラスに特別チャンスだ。Aクラスに行って、試合の準備が出来ると宣言して来い。ただしあくまでも戦争の意思と準備があるとだけ伝えるんだ」

根本「……それだけでいいのか？」

雄二「ああ。Bクラス代表がこれを着て言った通りに行動してくれたら見逃そう」

ゆうくん。それをどこで手に入れたの？ それ、ここの女子の制服だよな？

『あ。ちょっといいか？』

雄二「なんだ？」

『さっきの女の子があんなになったのはそのゴミが理由か？』

雄二「ああ。そうだ。思い入れのある大事なものを壊されたようだな」

『あのゴミ最低ね！』

『女の敵ね！』

『いえ！ 人類の敵ね！』

『ああ。それでか。あの女の子のチートみたいな強さわ』

雄二「まあ、そうだな。普段はあんなじゃないからな」

『てことはなんだ？ 俺達はあそのゴミのせいで、勝ち目の戦いをやらされてたのか？』

雄二「そうなるな」

『そうか。……皆聞いたな！ 俺達はFクラスの出した条件を呑むぞ！』



『了解だ!』

『任せて!』

今の人が代表の方がこのクラスの為になるんじゃないの?

『相手があのごみだからな。手荒な方法を使って構わん。必ず実行させる』

棗「ゆうくん。もう、戦後対談も終わったみたいだし、わたしは帰るね」

雄二「ん? おお。お疲れ」

明久「待ってなつめ。僕も帰るよ」

今は帰宅中。そういえばBクラスでの戦いを見てた人達から殲滅姫とか殲滅天使なんていう二つ名をつけられたよ。しかもその二つ名は広がりつつある状況。どこまで広がるかわからないから怖いね…。それと奪い取ったやつはみいちゃんだったよ。

明久「そういえば、はい。これ」

そういつてアキが出したのは……。

棗「あれ? でも……」

壊れたよね?

明久「さっき僕が直しといたんだよ。ということ、なつめ、どう

ぞ  
」

棗「あ、ありが、とう」

わたしはアキが直してくれたブレスレットを受けとった。今わたしは恥ずかしさと嬉しさで顔が真っ赤だよ。恥ずかしさの理由は直すということを全く考えることがなかったこと。嬉しさは直ってまたわたしのところにあるということ。

棗「あれ？ ブレスレットのサイズがかわってる」

明久「ああ、なつめに合うようにしてみたけど、計ったわけじゃないからもしかしたらまたダメかもだけど」

わたしはブレスレットを着けた。それはサイズがちょうどよかった。

棗「アキがくれたブレスレット、はじめて着けられたよ」

明久「あはは、そうだね」

わたしは宝物を着けたまま帰宅した。

## 第十一話 Bクラス戦？（後書き）

棗「今回の、なんか無理矢理な感じがしない？」

しない？ どころか無理矢理です。

棗「言い切っちゃうの？」

まあいいじゃない。そんな無理矢理な状況でも宝物はなんとかしたんだから。

棗「まあ、それは嬉しいけどさ。さて、次は第十二話 思い出の予定です。またね」

## 第十二話 想い出

わたしは今困っている。自分のいる場所が全くわからない。まあそれも当たり前なんだけどね。ここに来たのはつい最近なんだし。一人で出かけたのは間違いだっただけかな。ここまででもうわかってもらえてると思うけど。現在わたしは迷子です。人に道を聞いてみようと思っても周りには誰もいないし……。

棗「どうしよう。泣きたくなってきた……」

さつきも言ったようにわたしはここに来たばかり。お父さんの仕事の都合で引越しをしなければいけなくなったの。うんまあ、それでも会社と交渉してくれたのか、もともとなのかわからないけど幼稚園を卒園するまでは引越しはしないって。それで幼稚園を卒園して仲のよかった友達お別れ会をやって、数日後、わたしは引越しをすることになった。はつきり言ってしまうえば引越しはあまり乗り気ではない。なんでわざわざ友達と別れなければいけないのかとも思う。お父さんにそのことを言ったこともある。そのときお父さんは困ったような顔をしてたっけ。そして必ず「確かにこの友達とはお別れになるけど、それでも友達なのはかわらない。それに向こうでしか得られないものもある。とても大切なものがみつかるかもしれない」

そして引越しが終了して、ちょっと退屈になってきたから、引越ししてきたばかりのまだよくわからない場所を少し散歩でもしようかなと。親に出かけることを告げて家を出て、最初の状況になる。

棗「もう小学生になるんだから一人でも大丈夫って思ってた一人だけ、失敗したかも。兄さんも連れて来ればよかったな」

わたしはこの春から近くの小学校に通うことになっている。

棗「でもどうしようかな。この状況で一番の行動は人に道を聞くのが一番だろうけど。……本当に誰もいないしな」

そんなことを言いつつ周りを見渡していたら一人現れた。わたしと同じくらいの背丈で髪は茶色。たぶん年は同じくらいだよな。あ、向こうがこっちに気付いたみたい

「どうしたの？　なんか困ったような、泣きそうなような顔をしてるけど」

棗「えっと、ちょっと道がわからなくて」

「そっか。じゃあ案内するよ。どこにいくの？」

棗「え？」

しまった！　自分の家の住所を知らない！　自分の家の住所が書かれてるものは……ない……。手詰まり……。ね。

「どうしたの？」

棗「えっと、実は家に帰りたんだけど住所がわかるものがなくて……」

「ん、そっか、困ったね」

人が見つかってても住所知らないから結局聞けないじゃん。ああどう

しよつ。

わたしはとうとう泣いてしまった。

「え！？ ちょっとどうしたの!？」

男の子は急に泣き出したわたしにどうしたらいいかわからないよ  
うだった。

棗「やっと人にあえて……、……これで帰れると思ってたから」

「ん〜。あ、そうだ」

そういつて男の子はポケットから何かを取り出した。

「これあげるよ」

棗「これはブレスレット？」

「そうだよ」

わたしはその男の子が取り出した『ビーズで作られたブレスレット』  
をじつと見て、受けとった。それで着けてみようとしてみたけど小さ  
すぎて着けられなかった。

棗「小さい……」

「あはは……、ごめんね。作るときにサイズは全く気にしてなかつ  
たからだね」

棗「え、作った？」

「そうだよ」

わたしは驚いた。着けられないけど作れるんだね。それになんだかこの男の子と話していると落ち着く。さっきまでの気持ちが悪落ちていた状況はどこにいったのか。わたしはブレスレットをしっかりと握ってみる。うん。気のせいかもしれないけど勇気もやる気も湧いてくる。

「アキ君、どうかしたのですか？」

また誰か来た。今度は女の人だ。女の方はわたしの顔をじっと見て

「アキ君、女の子を泣かせるなんていけませんね」

「ちょっと待って!?! 違うから!! この子が迷子らしくて」

「迷子なんですか？」

棗「は、はい」

「なら案内しますよ。住所がわかるものがありますか？」

棗「すみません。ないです」

「そうですね。それではここまでどのように歩いてきたか道順は覚えてますか？大体でいいので」

棗「え？ はい。ある程度は……」

「そうですか。それではここでポーとしててもしょうがないですし、来た道を少しづつ戻ってみましょうか。では、いきましよう」

そういつて女の人はわたしの手を取って歩き出した。さっきの男の子も一緒に。わたしはいろいろな話をしながら二人と一緒に歩いていたら、前に知っている人が現れた。わたしの双子の兄。

棗「あ、兄さん！」

兄さんがこっちに気付いたみたいだ。もう大丈夫かな。

棗「あの、ありがとうございます。家族に会えたのでたぶんもう大丈夫です」

「そうですか。それではお別れですね」

「じゃ〜ね〜」

わたしは兄さんに合流して家に帰った。どうやら兄さんもここらへんを散歩していたみたい。

今は自分の部屋にいる。わたしは思い出していた。思い出すのは昼間の男の子。

棗「また会えないかな？　そういえば名前知らないや」

わたしは少しの時間しか一緒にいなかったけど、あの男の子のことが気になっていた。



棗「名前聞いておけばよかったな……」

わたしが知ってる男の子の名前は、女の人が言っていた『アキ君』と  
言うことくらいしかわからない。

棗「アキ……か」

ビーズのブレスレットを握ってみる。

棗「うん。なんかわかんないけど、また会えるような気がする」

なんの根拠もない。でも確かにわたしはそう思えた。そして男の子  
に貰ったブレスレットはわたしの宝物にした。それくらい大事な物。

あれから数日、あの男の子とは会えてない。そして小学校の入学式  
の日、入学式が終わったあと、教室で簡単に自己紹介をすること  
になった。

葵「水無月葵です。よろしくお願いします」

自己紹介は順調に進んでいってある男の子の番になった。

明久「吉井明久です。よろしくお願いします」

棗（あ！ あの子だ！）

わたしは嬉しかった。またあえたから。学校が終わったあと話しか  
けたら向こうも覚えてくれていた。わたしとアキが仲良く話してた  
ら親が来た。わたしの親と知らない人。その人はどうやらアキの親  
らしい。なんか親同士で仲良くなったとか。で、話を聞いてみたら

実は家は隣同士。よく今まで会わなかったと思うくらいだよ。

棗「これからよろしくね。アキ」

引越しをして友達とお別れしなくちゃいけなくなったけど、今は引越ししてよかったと思ってる。

わたしは目を覚ました。

棗「ずいぶん懐かしい夢を見たよ。やっぱり昨日あんなことがあったからかな？」

今日は土曜で休日。それで昨日はBクラスの後半戦があった。そこでプレスレットが壊されて、直してもらって。そしてわたしは宝物を見た。

棗「さて、動こうかな。どうせアキのことだから、休日だからってまだ寝てるはずだし、起こしにでもいこうかな」

わたしはアキを起こしに行くために行動を開始した。

## 第十二話 想い出（後書き）

棗「まさかこのときの話をやるとは思わなかったよ」

こっちはやるタイミングをみつけるのが大変でしたけどね。

棗「恥ずかしいな」

まあまあ昔の話もたまにはいいもんです。

棗「さて、次は第十三話 Aクラス の予定です。またね」

### 第十三話 Aクラスでの再会

Bクラス終戦から土日挟んだ月曜。今わたしはアキと一緒に学校に向かつて歩いている。

明久「今日は丸一日補給試験だね」

棗「うん、そうだね。たぶんBクラス戦の時と点数はそんなに変わらないと思うけどね」

明久「僕は今回はちょっと自信あるかも」

棗「あはは、そっか期待してるよ」

今日は丸一日補給試験を受けて、次のAクラスの準備をする。やっとここまでできたね。わたしもテスト頑張ろう。

そして教室について。

雄二「おう、明久。相変わらず早いな」

秀吉「おはようじゃ」

瑞希「おはようございます」

美波「アキ、たまには遅刻でもしたら？」

みなみはBクラス終戦後にアキを脅して、呼び方を変えさせたらしい。

明久「おはよう。それと美波、それはおかしいんじゃない？」

棗「おはよう。皆も早いね」

瑞希「はい。次の戦争の為に少しでも勉強しておこうと思ひまして」

棗「あはは、やる気いっぱいだね」

確か一騎打ちのはずだけど、この準備は無駄にならないような気がする。

雄二「頼もしいな」

秀吉「まったくじゃ。ワシも頑張らんとこのう」

それからしばらく話をしたら先生が来て、HRが始まった。それから補給試験を受けて、準備は整った。宣戦布告は明日するらしい。翌日わたし達は教室でゆうくんからのAクラス戦の説明を受けていた。

雄二「まずは皆に礼を言いたい。周りの連中には不可能だと言われていたにも関わらずここまでこれたのは、他でもない皆の協力があったることだ。感謝している」

ゆうくんがお礼ね。珍しいね。

明久「ゆ、雄二、どうしたのさ。らしくないよ？」

雄二「ああ、自分でもそう思う。だが、これは偽らざる俺の気持ちだ」

にゃ〜。ゆうくんが素直だ。

雄二「ここまで来た以上、Aクラスにも勝ちたい。勝って、生き残るには勉強すればいいってもんじゃない現実を、教師どもに突きつけるんだ！」

『おおー！』

『そつだー！』

『勉強だけじゃないんだー！』

いやーこのクラスって、土気の上下って結構簡単かもね……。

雄二「皆ありがとう。そして残るAクラス戦だが、これは一騎打ちで決着をつけたいと考えている」

やっと本題だね。一騎打ちに持つてくのは知ってるけど、どうやって戦うかは知らないんだよね。

『どづいつことだ？』

『誰と誰が一騎打ちをするんだ？』

『それで本当に勝てるのか？』

雄二「落ち着いてくれ。それを今から説明する。やるのは当然俺と

翔子だ」

明久「ねえ雄二、霧島さんって姫路さんより強いよね。一騎打ちでなんとかなるの？」

雄二「明久の疑問はもつともだ。翔子は学年首席。まともにやったら勝ち目はないかもしれない。だが、それはDクラス戦もBクラス戦も同じだっただろう？まともにやりあえば俺達に勝ち目はなかった。今回も同じだ。俺は翔子に勝ち、FクラスはAクラスを手に入れる。俺達の勝ち揺るがない。俺を信じてくれ。過去に神童と言われた力を今皆に見せてやる」

『『おおー！！』』

皆のテンションは最高潮だね。まあ、今まで不利な状況をなんとかしてきた人の言葉だからってのもあるんだろうけどね。

雄二「さて具体的なやり方だが……一騎打ちではフィールドを限定するつもりだ」

秀吉「フィールド？ なんの教科でやるつもりじゃ？」

雄二「日本史だ」

日本史？ 別に苦手だとかは聞いたことはないけどな……。

雄二「ただし、内容は限定する。レベルは小学生程度、百点満点の上限あり、純粋な点数勝負だ。俺がこのやり方を選んだ理由は一つ。ある問題が出れば、アイツは確実に間違えると知っているからだ。

その問題は 『大化の改新』」

秀吉「何年におきた、とかかのう?」

雄二「その通りだ、その年号を問う問題が出たら俺達の勝ちだ」

瑞希「あの、坂本君」

雄二「なんだ姫路」

瑞希「霧島さんとは、その……仲がいいんですか?」

雄二「アイツとは幼なじみだ」

ああ、なるほど。さっきから霧島さんのことをアイツとか翔子って呼んでたからちょっと疑問には思ってたけど……幼なじみかあ。

『総員狙えー!』

雄二「なぜ上履きを構える!?!」

全男子がゆうくんの上履きを構える。それと全男子って言ったけどアキとひでちゃんは除くだよ。

『黙れ、男の敵! Aクラスの前に貴様を殺す』

雄二「ちょっと待て!! このクラスにはもう一人美少女の幼なじみ持ちがいるじゃないか!! アイツはいいのか!?!」

『アイツも許せないが……』



『吉井への制裁か、久多羅木さんに嫌われるか。比べるまでもない』

『だから我々は吉井には手を出さない!』

雄二「なんて理不尽な……」

瑞希「あの、吉井君」

明久「ん？ なに、姫路さん」

瑞希「吉井君は霧島さんのことをどう思いますか？」

明久「そりゃ美人だよな。でも……」

瑞希「……………」

明久「なんで姫路さんは僕に攻撃態勢をとるの！？ それに美波はその持ち上げた教卓をどうするつもり!？」

まったくみなみは……。ていうかみいちゃんもみなみと同じ方向に進んでる……。とりあえず助けよう。

棗「ほら、二人とも落ち着いて」

瑞希「どいてください、くーちゃん。吉井君におしおきしないといけないんです」

美波「そうよ、どきなさい」

棗「なぜする必要があるの?」

瑞希「吉井君が霧島さんに気があるみたいでしたから」

美波「そうよ。これは必要なことよ」

棗「あのねえ。確かにアキは美人だとか言ってたけど、そんなのじや攻撃する理由にはならないよ。それにアキはまだ何か言おうとしてたみたいけど、それを二人の都合がいいところで遮って攻撃しようだなんて。何考えてるの？ そんなことでアキに危害を加えないでくれる？」

瑞希・美波「……………」

うん。わかってくれたかな。

雄二「とにかくだ！ 俺と翔子は幼なじみで、小さな頃に間違えて嘘を教えていたんだ。アイツは一度覚えたことは忘れない。だから今、学年トップの座にいる。俺はそれを利用してアイツに勝つ。そうすれば俺達の机は」

『『システムデスクだ！』』

そしてAクラスへの宣戦布告の時にわたしとアキはある人を見つけた。髪は赤茶色のショートで目は水色。ややつり目にメガネをかけた女の子。

明久「え！？ な、なんで!？」

棗「どうしてここにいるの?」

葵「やあ、久しぶりだね」

わたしとアキが小学生の頃に知り合った幼なじみの水無月葵。でも、ここにいるのはおかしいんだけど。

棗「確か入学するのがかなり大変なレベルがかなり高い進学校だかに行っただんじゃ？」

葵「うん。行ったよ。ただあそこは真面目君ばかりで退屈です。

それで面白そうなここに転校してきたわけ。今年の春からこの生徒だよ。よろしくね」

明久「うん。またこれからもよろしくね」

棗「これからまたよろしくね」

葵「しかしまあ、ここにアキとなつめがいるとはね。転校したのは正解かな。面白くなりそうだよ」

明久「あはは、お、お手柔らかに……」

棗「そうなるとあおいちゃんはAクラスなんだね」

葵「まあ、当たり前と言えば当たり前じゃない。なつめは……Fクラスだったけ？」

棗「そうだよ。アキと一緒にいたかったからね」

葵「相変わらずだね。てことは私達に戦争をしかけてるクラスだね」

明久「うん。そうなるね」

葵「二人が相手だからって手は抜かないからね？」

棗「臨むところだよ」

雄二「交渉は成立した。教室に戻るぞ」

明久「そういうことらしいからじゃあね」

棗「またあとで」

葵「おお、またあとでな」

わたし達はあおいちゃんと話してたからあとで交渉の内容をゆうくんから聞いた。五対五の勝負になったらしい。兄さんとあおいちゃんは出てくるだろうし、かなりきつくない？

学年首席は霧島翔子……この情報、認識はもう古いかもしれない。

第十三話 Aクラスでの再会（後書き）

葵「ということなので今回から登場の葵です」

棗「ホントに久しぶりだね」

葵「そうだね。細かいことはまたキャラ紹介書いてくれるらしいからその時で」

棗「あはは」

葵「んじゃまあ、次回、第十四話かな？ Aクラス戦 らしいね。またな」

## 第十四話 Aクラス戦？

Aクラス戦が始まる。勝負は五回勝負で三勝した方の勝ち。科目選択権はFクラスが三回あるらしい。有利そうに見えるけど、きついやね。

雄二「さあ、お前ら勝ちにいくぞ」

わたし達は誰が選抜されたかと言うと、わたし、アキ、ムッツリー二、みいちゃん、ゆうくんの五人。ムッツリー二とみいちゃんに期待だね。

高橋「それでは一人目の方、どうぞ」

学年主任の高橋先生だ。はじまるね。さて向こうは一人目は誰かな？

久保「僕が行こう」

雄二「なに！？ いきなり学年次席だと？ なにを考えている。まさか圧倒的な戦力差を見せ付けてFクラスの士気を落とすのが目的か？ まあいい、姫路頼む」

瑞希「あ、は、はい」

棗「頑張つてね、みいちゃん」

瑞希「はい。頑張つてきます」

棗「ゆうくん、その考えはたぶん当たりだと思うけど、違つと思う

よ

雄二「？ どういうことだ？」

棗「簡単だよ。久保君よりも強いのがいるってこと」

明久「そうだね。あの二人は確実に久保君より強いだろうしね」

雄二「？ 明久、どういう意味だ」

明久「Aクラスには昴とあおいがいるからね」

雄二「葵ってのは知らないが昴ってのは、久多羅木昴だろ？ アイツは確か学年の五位、十位くらいの成績じゃなかったか？」

棗「それがそうでもないんだよ。兄さんは順位が出る試験ではいつも手を抜いてるらしいから……。実際は学年首席か、それに近い成績があるはずだよ」

雄二「まさか、それは予想外だな……。葵って言うのは？ 去年名前を聞いたこともないが？」

明久「それはそうだね。二年になってから転校してきたって言うってたし」

雄二「その葵ってのはどんな奴なんだ？」

棗「わたしとアキの幼なじみ。それで得意科目は無し、苦手科目も無しのオールラウンダー。たぶんだけど、霧島さんを超えるんじゃないかと思ってる」

雄二「なんだと!? まさか、予想外すぎだろ……」

明久「それじゃあ、一通り話したし姫路さんの方をみようか」

棗「それもそうだね。みいちゃんを応援しないと」

高橋「それでは科目はどうしますか?」

久保「総合科目をお願いします」

高橋「わかりました。それでは……」

高橋先生が総合科目のフィールドを張り、二人は召喚して、一瞬で勝負はついた。

総合科目 Fクラス 姫路瑞希 4409点

VS

総合科目 Aクラス 久保利光 3997点

『マ、マジか!?!』

『いつの間にこんな実力を!?!』

『この点数、霧島翔子に匹敵するぞ……!』

まあ騒ぐのも無理ないよね。Aクラスでも滅多にみれない点数だしね。

瑞希「ただいまです」



明久「うん。おかえり」

一回戦はAクラスが科目を選択したけど、Fクラスが勝ったね。これならまだ勝ち目はあるね。

雄二「……………」

瑞希「どうしたんですか？」

雄二「ん？ ああ、いや、なんでもない」

さっきの話で考えてるのかな？

棗「安心してゆうくん、もしその二人に勝てなくても、他の戦いで勝って三勝すればいいだけなんだから。もうみいちゃんが一勝してるからあと二勝でいいんだからね」

雄二「…………… そうだな」

高橋「それでは二人目の方、どうぞ」

Aクラスから出てきたのは、髪は黒色のショート、目は黒色、普通に限りなく近いけど垂れ目の男の子。わたしの兄さん。

昴「そんじゃま、やりますか」

雄二「よし、明久。任せる。頼りにしている」

明久「ふう……。やれやれ、僕に本気を出させてこと？」

ゆうくんのアキ弄りだね。だいぶ落ち着いたのかな。

雄二「ああ。もう隠さなくてもいいだろう。この場にいる全員に、お前の本気を見せてやれ」

『おい、吉井って実は凄いヤツなのか？』

『いや、そんな話は聞いたことないが』

『いつものジョークだろ？』

なんでみんな、そんなに真面目に議論してるの？

昴「ん？ おお！ 明久が相手か。それで本気ってのは？」

明久「そうだね。実は僕、左利きなんだ」

昴「知ってるが、それがどうした？」

明久「しまった〜！ 幼なじみ相手じゃこれは通じない！」

幼なじみじゃなくても通じないよ。あおいちゃんなんか爆笑してるし……。

昴「まあとりあえず、久しぶりだな」

明久「うん。久しぶりだね昴」

昴「ホントに久しぶりだな。てっきり避けられてるのかと……」

明久「普段あわないのは、昴との行動時間が合わないからじゃないかな」

昴「まあそれもそうだな」

明久「それで科目はどっちが選ぶ？」

昴「そうだな。明久、そっちが決めてくれ」

明久「わかったよ。高橋先生、数学をお願いします」

高橋「わかりました」

アキ、本気で言ってるの？ わたしと同じように兄さんも数学は得意なんだよ？

昴「それじゃあ、始めるか。サモン」

兄さんのデフォルメされた召喚獣で、大剣を持って鎧を着ている。装備はみいちゃんのに近いかな。そして腕には黒の腕輪。たしか特殊系だっけかな？

明久「うわー、やっぱり当たり前のように腕輪装備してるよ。っと、サモン」

数学 Fクラス 吉井明久 134点

VS

数学 Aクラス 久多羅木昴 613点

雄二「明久。バカのお前が三桁なんて、いつそんなに取れるようになった？ カンニングか？」

明久「失礼だよ、バカ雄二！ そんなことするわけないでしょ。これでも戦争を始めた日から毎日勉強したんだから。かなりなつめに助けられたけど」

雄二「なるほど、久多羅木が教えてたのか。明久には効果ありそうだな」

昴「明久やるじゃないか。少しは楽しめるかな？」

葵「へえ、あのアキが勉強をね」

昴「明久は俺の腕輪の力がどんなのか知ってるっけ？」

明久「いや、特殊系だっけとしか知らないよ」

昴「なら見せてやるよ。腕輪の力」

明久「いいの？ 腕輪使うのって点数消費するんでしょ？」

昴「問題ない。それじゃ俺は、俺から見て左の方向に攻撃するから、絶対に避けるよ。全力でだ。じゃないと消し炭になるぞ」

そういつて腕輪の力を使う。腕輪が光って、攻撃が始まった。アキはもちろん言われたとおり全力で避けた。わたしも兄さんの腕輪の力を始めてみたけど、これは反則じゃない？ 見た目は普通の砲撃系みたいだったけど、大きさがおかしい。フィールドの半分を普通に埋め尽くす程の黒い砲撃。

明久「な！？ なにこれ！？ 範囲がとんでもないんだけど！？」

昴「だから言っただろ。全力で避けるって」

明久「でもこんな高火力だし点数も結構減ってるはず……」

数学 Fクラス 吉井明久 134点

VS

数学 Aクラス 久多羅木昴 563点

明久「たった50点！？」

雄二「範囲は広いけど威力は低いとかか？」

昴「いや、威力も高いぜ。最低でも300は削れるからな」

棗「その威力で、そのコストはおかしくない？」

昴「まあ、普通ならおかしいな。特殊系の腕輪ってどういうものか知ってるか？」

棗「いや、知らないけど……」

昴「まあ、あとで教えてやるよ。あんまり聞かれない話かもだしな」

明久「それはいいけど、そうになると腕輪の力を連続で使われるとこっちはなにも出来ないじゃん」

昴「安心しろ。腕輪は使わない。使つとすぐ終わってつまらないか

らな」

明久「それはよかったよ。じゃあ始めようか」

兄さんの召喚獣がアキの召喚獣に大剣を振り下ろした。それをアキは左に避けて兄さんの召喚獣に三回攻撃をいれた。兄さんは振り下ろした大剣を横に振ったけど、アキはそれを後ろに下がって避けた。

数学 Fクラス 吉井明久 134点

VS

数学 Aクラス 久多羅木昂 467点

昂「召喚獣の操作は難しいな」

明久「あんまりダメージになってない……」

そんなことを言うてから、また二人は動き出した。そしてアキが優勢で進んでた戦いにも変化があった。兄さんの召喚獣の攻撃がアキの召喚獣にかすったみたい。

明久「ぎゃああああー！ー！ 斬られた場所が熱いし痛いー！ー！」

葵「なあ、昂。アキに何があつたの？」

まあ、疑問に思うのは当然だよ。なにせアキは今、叫びながら床をのたうちまわってるんだから。

昂「ん？ ああ、明久は観察処分者でな。召喚獣が受けたダメージの一部を召喚者にフィードバックするっていう楽しい機能がつくん

だ」

葵「なるほど。それは楽しい機能だね」

明久「全然楽しくないよ！！」

数学 Fクラス 吉井明久 0点

VS

数学 Aクラス 久多羅木昂 78点

雄二「かすっただけで0点になったか。しかしまあ明久がここまでやるとは思ってたがな」

棗「おかえりアキ」

明久「ただいま。うう……体が痛い」

瑞希「大丈夫ですか？」

明久「うん。なんとか」

棗「それにしても、アキがあんなに点数取れてるとは思わなかったよ」

明久「実はあれだけ取れてるのは数学だけなんだよね。他は80〜90ってところだし」

雄二「まさか明久がそんなに取れるとはな。久多羅木と一緒に勉強したのは、かなりいい方向に進んでるな」

さあ、これで一勝一敗。科目の選択権は残り二回。まだあおいちゃ  
んもいるし……どうなるかな。



## 第十四話 Aクラス戦？（後書き）

昴「今回からの昴だ」

棗「とうとう兄さんも登場だね」

葵「それで昴のキャラ紹介はどうなるの？」

昴「葵と一緒にやるみたいだな。Aクラスが終わった後らしいぞ」

棗「まあそうじゃないとおおいちゃんのネタバレになっちゃうしね」

葵「そうだな」

棗「それでは、次回 第十五話 Aクラス戦？ です。またね」

## 第十五話 Aクラス戦？

高橋「それでは、三人目の方どうぞ」

今わたし達は一勝一敗、ここからは出来るだけ落としたいくないよね。さて、次は誰が行くのかな？

康太「……………（スック）」

ムツツリーニだね。ムツツリーニで、はじめて教科選択権が活きるね。だってムツツリーニはたった一つの科目で総合点数の8割を獲得してるんだから。

愛子「じゃ、ボクが行こうかな」

ん？ 誰だろう？ 薄い色の髪をショートにしたボーイッシュ女の子。あまり見たことない人だな。

愛子「一年の終わりに転校してきた工藤愛子です。よろしくね」

高橋「教科は何にしますか？」

康太「……………保健体育」

そうさっき言った、総合点数8割獲得のムツツリーニ得意科目。保健体育。

愛子「土屋君だっけ？ ずいぶんと保健体育が得意みたいだね？でもボクだっけかなり得意なんだよ？ ……君とは違って、実技で、





康太「……………問題ない」

いや、大ありでしょ。いまだに鼻血は出っ放しじゃん。

高橋「それでは、はじめてください」

愛子「はい。サモンっと」

康太「……………サモン」

工藤さんの召喚獣は巨大な斧を持っている。そして腕輪持ち。

愛子「実践派と理論派、どっちが強いか見せてあげるよ」

工藤さんの召喚獣がムツツリーニの召喚獣に襲いかかるけど。

康太「……………加速」

ムツツリーニが腕輪の力を使って終わらせた。

愛子「……………え？」

康太「……………加速、終了」

保健体育 Fクラス 土屋康太 572点

VS

保健体育 Aクラス 工藤愛子 446点

高橋「これで二対一ですね。次の方どうぞ」

葵「やりましょうか」

棗「ゆうくん、行って来るね」

雄二「おお、行って来い」

葵「いや〜楽しみだね、なつめ」

棗「あんまりあおいちゃんと点数勝負はしたくないんだけどね」

葵「そういうなよ。そのかわりこの学校の誰よりも召喚獣の操作に不慣れなんだからね」

棗「まあ、そうだけどさ。……科目はあおいちゃんが選んでね」

葵「わかったよ。どうしようかな? ……何がいいかわからないし、そつだね。高橋先生、総合科目でお願いします」

高橋「わかりました」

総合科目……いくらこつちが召喚獣の操作に慣れてるからって、それは絶望的なんだけど……。

棗・葵「サモン」

あおいちゃんの召喚獣はあおいちゃんのデフォルメされた姿で腕に黒の腕輪。あおいちゃんまで黒の腕輪なんだね……。それで装備が……。

棗「なに? その装備?」

葵「私も最初驚いたよ。でもまあ、これもありでしょ」

高得点者とは思えない装備だった。Tシャツとジーンズのラフな格好で、右手にハリセン、左手に召喚獣の二倍くらいあるピコハンを持っていた。

棗「そうだね。有りって言えば有りだよね」

そしてわたし達の点数が表示される。

総合科目 Fクラス 久多羅木棗 2164点

VS

総合科目 Aクラス 水無月葵 6551点

『『『なにー！ー！ー！ー！ー！ー！』』』』

わたしとアキと兄さんと高橋先生以外のすべての人の叫び。

わたしとアキはあおいちゃんがこれくらい取るのは容易に予想出来たから驚かない。兄さんもたぶん同じ。

『なんだあの点数は！ー！』

『霧島翔子を超えてるぞ！』

『あんな点数はじめてみた』

雄二「翔子を超えるかもとは聞いてたが、これほどとは……」

葵「何で皆騒いでるの?」

棗「あおいちゃんの点数がすごいからだろうね」

葵「そうかね。これ、結構不調だったんだけどな」

これで不調って、何点取るつもりなの?

葵「腕輪の力もどんなのか気になるけど、まずは召喚獣の操作に慣れたいしね。さて、やるか」

あおいちゃんの召喚獣がピコハンを振り下ろしてきた。わたしはそれをバックステップで回避した。そこにハリセンで突きを繰り出したけど、刀でそらして隙だらけのになった召喚獣に攻撃したけど。

葵「まだだ」

あおいちゃんの召喚獣は体を捻ってピコハンで攻撃してきて結局二人ともダメージになった。一応わたしはこの一回で五発のダメージをあたえたよ。

総合科目 Fクラス 久多羅木棗 1364点

VS

総合科目 Aクラス 水無月葵 4973点

棗「たった一発でこのダメージ?」

でかすぎだよ……。

葵「うにゃ。やっぱり操作の経験の差って厄介だな」



経験の差？ 今の見て、あるとは思えないけど。ほとんどの人はあそこで体捻って攻撃なんてしてこないよ？ ていうか出来ないよ？  
葵「それじゃ続きを楽しもうか」

今度はハリセンとピコハンを同時に振り下ろしてきた。それを刀でおさえたんだけど……。

棗「防御しても削られた」

点数差があるってきついね。もうこうなったら全部避けて、確實安  
全にダメージを入れていかないよ。

それからわたしはあおいちゃんの攻撃を避けて、攻撃をし、また逃  
げる……の、まあ、ヒットアンドアウェイを繰り返した。

総合科目 Fクラス 久多羅木棗 966点

VS

総合科目 Aクラス 水無月葵 2257点

葵「うん。大体召喚獣の操作はわかってきたかな。さて次は、お楽  
しみの腕輪だね」

そういうとあおいちゃんの召喚獣の黒の腕輪が光だした。

葵「さうて、どんな力かなうん」

そして力が発動して光が降ってきた。上を見てもみるとそれは一つだ  
けじゃない。

フィールド全域。その無数にある光が雨のように降ってきた。フィールドが光に包まれて、何もわからない。少して光がおさまってきて、フィールドが見えたらそこにはあおいちゃんの召喚獣しかいなかった

総合科目 Fクラス 久多羅木棗 0点

VS

総合科目 Aクラス 水無月葵 257点

わたしの負けだった。

葵「これが私の腕輪の力ね。うん、よさそうだ。自分の点数が2000点もなくなってるのは気になるけどね」

棗「ごめん。負けちゃった」

雄二「なに、負けたのは悔しいかもしれないが、いい試合を見させて貰った」

明久「お疲れ様。なつめ」

棗「うん。ありがとう」

これで二対二、科目選択権はこちらが後一回ある。これでゆうくんが勝てばFクラスの勝ちだ。

第十五話 Aクラス戦？（後書き）

葵「今回は私の番だったね」

棗「そうだね。ていうかあの装備と腕輪なに？」

葵「さあ、私も知らないよ？」

昴「装備の方はわからんが、腕輪の方はまあ、それは後々」

葵「えっと、次は……第十六話 Aクラス戦？ だね。それじゃ、またね」

## 第十六話 Aクラス戦？

現在二対二の引き分け状態。あと一回で戦争の勝敗が決まる。

高橋「最後の一人、どうぞ」

翔子「……はい」

Aクラスからは霧島さんが出てきた。うちのクラスは当然。

雄二「俺の出番だな」

高橋「教科はどうしますか？」

雄二「教科は日本史、内容は小学生レベルで方式は百点満点の上限ありだ！」

『上限ありだつて？』

『しかも小学生レベル。満点確實じゃないか』

『注意力と集中力の勝負になるぞ……』

ゆうくんが言っていた勝てる可能性。あとはゆうくん次第だね。

高橋「わかりました。そうなると問題を用意しなくてはいけませんね。少しこのまま待っていてください」

小学生レベルの問題まで用意出来るんだもんね……。この先生もあ

る意味、なんでもありだよね。

棗「ゆうくん。あとは任せたよ」

明久「そうだね。任せたよ」

雄二「ああ。任せろ」

ゆうくんはアキと手を握って、わたしは頭を撫でられた。

康太「……（ビツ）」

ムツツリーニはピースサインをゆうくんに向けた。

高橋「では、最後の勝負、日本史を行います。参加者の霧島さんと坂本君は視聴覚室に向かってください。皆さんはここでモニターを見ていて下さい」

ゆうくんと霧島さんと高橋先生は視聴覚室に向かっていた。

高橋「では、問題を配ります。制限時間は五十分。満点は100点です。不正行為等は即失格になります。いいですね？」

翔子「……はい」

雄二「わかっているさ」

高橋「では、始めてください」

瑞希「吉井君、いよいよですね……！」

明久「そうだね。いよいよだね」

瑞希「これで、あの問題がなかったら坂本君は……」

棗「その時はその時でしょ」

明久「まあ、そうだね」

棗「……あつたね」

ゆうくんが言っていた問題があつたのだ。大化の改新が何年に起こったのかの問題が。

瑞希「これで、私たち……！」

明久「うん！ これで僕らのちゃぶ台が」

『『『システムデスクに』』』

Fクラスの皆の声が揃った。皆は勝ちが確定したみたいにはしゃいでるけど、どうなるかは実際のところ最後までわからない。それに少し不安要素もあるし。

そしてテストが終わった。結果は……。

日本史勝負 限定テスト 100点満点

Aクラス 霧島翔子 97点

VS

Fクラス 坂本雄二 53点

あゝ。不安の中だ……。

わたし達はAクラスに負けて、ちやぶ台からみかん箱になった。

高橋「三対二でAクラスの勝利です」

言わなくてもわかってますよ。

翔子「……雄二、私の勝ち」

雄二「……殺せ」

明久「いい覚悟だ、殺してやる！ 歯を食いしばれ！」

はあゝ。アキはなにをやってるの？

棗「ほらアキ、落ち着いて」

明久「ここまで来てこの結果……。これが落ち着いていられるか！  
なつめは負けて悔しくないの？」

棗「いや、まあ、負けたのは悔しいけどさ。アキ、大事なこと忘れてるようだけど、わたし達も負けてるんだよ？」

明久「それは……、そうだけど。やっぱり喉笛を引き裂くという体罰くらいならいいよね？」

棗「だから落ち着いてよ！」

葵「それにアキ、喉笛を引き裂くって、体罰よりは処刑だよ」

昴「まあ明久、今回は大人しくしとけ」

明久「味方がいない……」

翔子「雄二が所詮、小学校の問題だと油断してなければ負けてた」

雄二「言い訳はしねえ」

やっぱりだね。

翔子「……ところで、約束」

棗・明久「約束？ それってなに？」

霧島さんが約束をって言ったたら、ムツツリーニは凄い速さでカメラを用意し始めた。

雄二「お前ら、タイミングいいな」

昴「FクラスがAクラスに宣戦布告したときに代表同士で約束したんだよ。勝った方の言うことをなんでも聞くってな」

棗「そんなことがあったんだ」

雄二「説明ありがとう。久多羅木兄」

昴「久多羅木兄は面倒だろう？ 昴でいいぞ。坂本」



雄二「助かる。こつちも雄二で構わない」

翔子「……………」

無視されてて霧島さんが拗ねてる…………。

雄二「ん、おっと。それで、なにをさせる気なんだ。翔子？」

翔子「…………雄二、私と付き合って」

霧島さんがゆうくんに交際を申し込んだ。

雄二「やっぱりな。お前、まだ諦めてなかったのか」

翔子「…………私は諦めない。ずっと、雄二のことが好き」

ゆうくんは考えてから…………言った。

雄二「…………わかった。付き合おう」

翔子「え？」

霧島さんは何を言われたのかわからなかったのか、疑問の声を出した。

葵「おおー！」

棗「おめでとつだね」

昴「そうだな」

『さて皆二二は何処だ？』

『『最後の審判を下す法廷だ！』』』

『異端者には？』

『『『死の鉄槌を！！』』』

FFF団がゆうくんを襲ってる。ゆうくんを助けようか。

葵「Fクラスはかわってるな」

昴「なんなんだかな……」

棗「兄さんとあおいちゃんも手伝ってくれろ？ 今からあの覆面被った危ない人達を殲滅するから」

昴「いいだろう。幸せを邪魔するやつは許せないからな」

葵「同じくだね。参加するよ」

わたしとあおいちゃんと兄さんでFFF団を八分くらいで全滅させた。

翔子「……本当に？」

雄二「嘘を言っただろうするんだ？ ……それより翔子。その手に持ってるのはなんだ？」

霧島さんの手には黒いものが握られていた。

翔子「……………マツサージ道具」

雄二「嘘をつくな。それはどうみてもスタンガンじゃないか！ そんなものどうするつもりだったんだ？」

翔子「……………断られた場合、実力行使するつもりだった」

雄二「今は使う予定はないな？」

翔子「……………必要なくなった。雄二、これからデートに行こう」

雄二「構わないがその前に……………」

話の途中で教室のドアが開いた。

鉄人「……………なんだこの惨状は？」

西村先生が驚くのも無理はないよね。わたしとあおいちゃんと兄さんで潰したFFF団がそこら辺に倒れてるんだから。

鉄人「まあいい。さてFクラスの皆。お遊びの時間は終わりだ」

棗「西村先生どうかしたんですか？」

鉄人「ああ。今から我がFクラスに補習についての説明をしようと思ってる」

ん？ 『我がFクラス』？

鉄人「おめでとう。お前らは戦争に負けたおかげで、福原先生から俺に担任が変わるそうだ。これから一年、死に物狂いで勉強できるぞ」

『『『なにー！』』』』

クラスの男子生徒全員が悲鳴を上げた。ていうかもう復活したの？

鉄人「明日から授業とは別に補習の時間を二時間設けてやるう」

そういつて鉄人は教室から出て行った。

昴「棗も大変だな……」

葵「あゝ。まあ、頑張れ」

棗「うん。頑張るよ」

他の人達は帰ったらしい。今残ってるのはわたし、アキ、ゆうくん、兄さん、あおいちゃん、霧島さん、みいちゃん、みなみだけ。

雄二「ところで昴」

昴「なんだ」

雄二「お前が持つてる腕輪の事を聞きたいんだが、後で話すと言ってたしな」

葵「それは私も気になるね」

昂「ああ、そのことか。いいぞ。そもそも黒の腕輪は、本来存在しないはずの腕輪なんだ」

翔子「……存在しない？」

棗「どういうこと？」

昂「そうだな。腕輪は大分類で三つに分けられるんだが、それはわかるか？」

明久「たしか攻撃系統の赤の腕輪、防御系統の緑の腕輪、補助系統の黄の腕輪だよな」

葵「へえ〜。そんなにあるんだ」

昂「そうだ。この攻撃系統の細かい分類で、砲撃系とかの腕輪があるわけだ。しかし去年、学園側が大分類四つ目の腕輪があることを公表したな」

雄二「ああ。それが、特殊系の腕輪だったな」

昂「それでぶつちやけるが……。黒の腕輪ってただ単にバグなんだよね」

「……はあ？」

昂「去年気になって学園長を問いただしてな、そしたらかなり慌ててくれたぞ。あれは面白かったな。それでずっと追い込んでたら、『それは特殊な腕輪なのさね』とかいいだして、次の日には公表し

てた」

明久「バグってなんの？」

雄二「明久……。召喚システムのバグだろう」

昴「その通り。それで本来作るつもりもなかった腕輪があると」

美波「でもそれならバグをなくしたら黒の腕輪はなくなるの？」

瑞希「確かにそうでしょうけど、今から黒の腕輪がなくなることはないですね」

美波「どうして？」

翔子「……バグを特殊系と言って、本来予定になかった腕輪を最初から計画にあったもののように公表したから」

明久「……………」

アキがショートしてる。

雄二「わかりやすく教えてやる。学園側がバグをそのまま使うことをよしとした。ただし、生徒にはバグだと知られないように、特殊系と最初から計画にあったもののように公表したんだ」

明久「それじゃあ、そのバグは修正されないの？」

奏「学園側が認めてるんだからされないでしょうね。威力やコストの補正とかもなさそうだし」

葵「ようは簡単だ。今まで通り気にせずに使ってればオーケーだ」と

翔子「……黒の腕輪って全部あんなに強いのか？」

昴「そういうことはないぞ。なかにはハイリスクローリターンなんてのもあるしな」

棗「特殊系って厄介だね」

翔子「……雄二」

雄二「なんだ？」

翔子「……今からデートに行く」

雄二「話も終わったし行くか。じゃあな」

ゆうくと霧島さんが帰って行った。

葵「あのままうまくいくといいね」

棗「そうだね。そうだ、アキ。今から一緒に出かけるよ」

明久「うん。いいよ」

わたしとアキも教室を出た。

昴「さて、あの二人はどうなるかね」

葵「ま、見守るしかないでしょ」



## 第十六話 Aクラス戦？（後書き）

棗「腕輪の説明無理ない？」

葵「無理ない？ どころか無理矢理だろ」

昴「無理矢理だな」

葵「まあとりあえずそうだいう腕輪だと言つのが何となくわかればオツケーだろ」

棗「そうだね。えと、次は第十七話 清涼祭準備の予定だね。またね」

## 水無月葵、久多羅木昂（オリキャラ紹介？）

みなつきあおい  
水無月葵

Aクラス所属の女の子。身長は155cmで胸はDサイズ。髪は赤茶色のショート。目はややつり目で色は水色。メガネをかけている。棗、明久、昂とは幼なじみ。小学校の頃から四人で行動することがほとんどだった。中学三年まで棗達と九年間同じクラスだったが、高校は入学した学校が違うため一緒ではない。葵が入学したのは誰もが知ってる高校で、一番学力が高い有名校。そこに首席合格して一年間、首席の座から動くことはなかった。ただその学校に通ってる生徒が真面目な人、悪く言えば勉強馬鹿、しかいなくてつまらないと言っことから文月学園に高二で転校してきた。得意科目はなく、苦手科目もなしの、オールラウンダー。召喚獣はTシャツにジーンズのラフな格好で、武器は右手にハリセン、左手にピコハンを持っている。黒の腕輪を所持。能力はフィールド全体に、敵、味方、使用者にダメージを与えるもの。ダメージは使用者200、味方300、敵400。

くたらしすばる  
久多羅木昂

Aクラス所属の男の子。身長は167cm。髪は黒のショートで目はやや垂れ目の色は黒。明久、葵とは小学校からの幼なじみで、棗の双子の兄。小学校の頃から四人で行動することがほとんどだったが高校に入ってから少し行動の時間を変えているため、最近あまり会えていない。棗に聞かれれば勉強を教えたりしている。得意科目は棗と同じく数学と化学で苦手科目は特になし。召喚獣は大剣を持って鎧を着ている。黒の腕輪を所持。能力は砲撃の中心に近ければ近いほどダメージが高くなる。最低300。

水無月葵、久多羅木昴（オリキャラ紹介？）（後書き）

棗「今回は大雑把にあおいちゃんと兄さんの紹介だね」

葵「そうだな。まああれでも十分だろ」

棗「そういえば……」

昴「どうした？」

棗「次は清涼祭の話に入るはずだったけど、なんか変更するらしい」

葵「この作者はよくやるよなこういうこと……」

昴「よくって、まだ二回だけだな」

棗「という事で次は……なんだろうね。わかりません。それじゃ、またね」

## 第十七話 それぞれの思い

棗サイド

今わたしはアキと一緒に出かけている。まあ、わたしはお出かけな  
んてのはただの口実なんだけどね。

明久「それで、これからどうするの？」

棗「そうだね。これと言って目的ないんだよね。……うん。今日  
晩御飯作ってあげようか？」

明久「え？ いいの？」

棗「うん。いいよ。そのかわり荷物持ちよろしくね」

明久「任されたよ」

晩御飯を作ってあげる約束をしたし、何を作ろうかな？ わたしは  
いろいろ考えながら歩いていたら目の前にみたことのある二人組み  
がいた。

棗「ゆうちゃんと霧島さんだ」

雄二「ん？ 久多羅木と明久か」

明久「雄二、ここで何してるの？」

雄二「翔子に引っ張りまわされてるところだ」

翔子「……雄二、表現が悪い。素直にデートと言えればいい」

雄二「わ、わかった！ わかったから、その手に持つてる物をしまえ！」

霧島さんの手にはスタンガンがあった……。

棗「あはは、仲良いね」

翔子「……ありがとう久多羅木。それと私は翔子でいい。私も棗って呼ぶから」

棗「わかったよ。しょうこちゃん」

翔子「……ちゃん付けは恥ずかしい」

ちよつとだけ、しょうこちゃんの頬が赤くなった。

棗「大丈夫だよ。慣れだから。どうしても嫌ならやめるけど？」

翔子「……嫌ではないからそのまま構わない」

雄二「ていうか久多羅木、さっきのやり取りをみて、仲良いはおかしくないか？」

明久「どっからどうみても、僕にも仲良く見えたけど」

雄二「明久、ならお前の目は節穴かビー玉かなんかだ」

棗「それでこれからどこかに行くの？」

翔子「これから雄二と映画をみに行く。というわけで雄二、行こう」

雄二「ん？ ああ、行くか。じゃあな二人とも」

二人は映画館に向かって歩いて行った。

明久「やっぱり仲良いじゃん。……？ どうしたのなつめ？」

棗「え？」

二人で歩くゆうくんとしょうこちゃんを見てたら、アキに話しかけられた。

棗「特に何も無いけど……」

アキは、さっきまでわたしが見ていた場所を見て……。

明久「なるほどね」

何がるほどなんだろう？ よくわからない。

明久「なつめも映画がみたいんだね」

棗「は？」

何がどうなってそうなの？

明久「よし、じゃあ行こう」

わたしはアキに手を引っ張られながら、それもいいかなと思った  
りした。

??サイド

「アキとなつめの後をつけて来たらこんなことになってるなんて」

「全くいけないですね。吉井君。お仕置きが必要です」

美波「どこに言ったかは話が聞こえてたからわかるから、すぐに行  
動するわよ瑞希」

瑞希「ええ行きましょう。美波ちゃん」

この二人は明久が棗の手を引っ張って行くのが、というより自分以  
外の異性と手を繋ぐのが許せないらしい。

棗サイド

そして映画館について映画をみた。みたのはわたしのリクエストで  
恋愛もの。見終わって映画の話をしながら、約束していた晩御飯の  
材料を買っていった。

棗「あれ？ アキ？」

さっきまで隣を歩いていたアキがある店の前で止まっている。そこは  
どうやら服屋らしい。女物の……。そこである服を見ている。

棗「どうしたの？　もしかして着たいの？」

明久「え？　いや、そうじゃなくてね。なつめに似合うんじゃないかな？って思ってたさ」

わたしは今のアキの言葉を全く聞いていなかった。アキを上から下まで眺めて、顔に戻る。

棗「もしかしたら今でもいけるんじゃないかな。うん。昔はやってたんだし構わないよね。機会があったらやってみようかな」

明久「なつめ……。小声で不安になるようなこと言わないでくれな  
い」

棗「ん？　不安になんてなることないよ。大丈夫」

明久「と、とりあえず、早く帰ろう。いつまでもここに止まるのも  
よくないしね」

棗「そだね。帰ろうか」

わたしとアキは帰路についた。

瑞希サイド

少し時は遡る。

吉井君とくーちゃんが映画館に入っていくのを確認しました。

瑞希「行きましょう。美波ちゃん」



美波「行きましょう」

くーちゃん達がなんの映画のチケットを買うのか監視をかいしです。しかし距離があって確認しにくいです。

美波「あれは……」

瑞希「何かわかったんですか？」

美波「ええ。あれはつい最近公開された恋愛ものの映画よ」

瑞希「恋愛もの、ですか？」

まさかくーちゃんと一緒にみて、そのまま雰囲気にならせて……。

瑞希「阻止ですね」

美波「同意見よ。行くわよ」

私達も映画鑑賞をしました。

美波「ここまで良い作品だとは思わなかったわ」

瑞希「はい。凄く感動しました！」

私と美波ちゃんのはしばらく映画の話で盛り上がってました。でも、何か忘れてるような……。

美波「そういえば……アキとなつめはどこ？」

そうでした。くーちゃんと吉井君を追い掛けていたんです。

瑞希「ちょっとわからないです」

美波「見失ったか……。しょうがない、今日はもうこのまま解散かな」

瑞希「そうしましょうか」

第十七話 それぞれの思い（後書き）

昴「明久の昔やってたやつってのはまさかあれか」

棗「そうだよ。兄さんも経験のあるあれだよ」

葵「おお、あれか」

棗「今から楽しみだよ」

昴「明久には同情するよ。さて次は、第十八話 清涼祭準備の予定らしいぜ。じゃあな」

## 第十八話 清涼祭準備

ただいまLHR中です。今学校では清涼祭の準備で大忙しです。ここ二―Fクラスを除いては……。今教室にいるのは、わたし、ひでちゃん、みいちゃん、みなみの四人。他の皆は。

須川「吉井！ こい！」

明久「勝負だ、須川君！」

須川「お前の球なんか、場外まで飛ばしてやる！」

準備を一切しないで校庭で野球をしていた。こういうお祭り系は皆好きだと思ってたからこの行動は意外だったかな。

鉄人「お前ら、クラスの出し物はきま……。おい、他の奴らはどうした」

西村先生は教室に来て、この現状を見ての質問をした。

秀吉「皆なら校庭で野球をしておるぞ」

鉄人「アイツ等は……、ちょっと待ってる」

そういつて教室から出て行った。しばらくして……。

鉄人「貴様ら、学園祭の準備をサボって何をしているか！」

明久「ヤバい！ 鉄人だ！ それと何をしていたかと聞かれたから、見ただけじゃわからない残念な鉄人に教えてあげます。野球です！」

鉄人「そんなのはみればわかる！！ 吉井！ 貴様がサボりの主犯か！」

先生、遊んでたのは事実だけど、アキをすぐに主犯にするのはやめようね。まあ、疑うのもわかるけどさ。

明久「ち、違います！ どうしていつも僕を目の敵にするんですか。雄二です！ クラス代表の坂本雄二が提案したんです」

雄二「明久！ てめえ！ ちつ。しょうがない」

明久「違う！ 今は球種やコースを求めているんじゃない！ しかも、それをやったら単に僕が怒られるだけだよね！？」

「いったいどんな指示を出されたの？ 声だけじゃ判断できない。わたしも混ぜっておけばよかったかな。……下手したら西村先生と鬼ごっこか。やっぱり混ざらなくて正解だね。」

鉄人「全員教室に戻れ！ この時期になってもまだ出し物が決まっていないなんて、うちのクラスだけだぞ！」

それからしばらくして皆戻ってきた。

雄二「さて。そろそろ学園祭、『清涼祭』の出し物を決めなければならぬわけだが……とりあえず、なんでもいいからやりたいものはあるか？ それと明久は出てきた提案を黒板に書いてくれ」

なんかゆうくん、やる気なさそうだね。そしてムッツリーニが手を挙げた。

雄二「ムッツリーニ」

康太「……………写真館」

雄二「……………どんな写真を出すつもりだ」

康太「……………秘密」

雄二「……………まあいい。とりあえず意見だ。書いてくれ」

アキが黒板に提案を書いていく。

雄二「他には？ 横溝」

横溝「メイド喫茶 と言いたいけど、流石に使い古されてると思うので、ここは斬新にウェディング喫茶を提案します」

雄二「ウェディング喫茶？ どんなのだ？」

横溝「普通の喫茶店だけだな。ウェイトレスがウェディングドレスを着てるんだ」

康太「……………結婚は人生の墓場」

ムッツリーニ……………。

雄二「明久、書いてくれ。他には？ 須川」

須川「俺は中華喫茶を提案する。本格的なウーロン茶と簡単な飲茶を出す」

雄二「中華喫茶か。今までの提案に比べるとまともだな。とりあえず書いてくれ」

鉄人「皆、清涼祭の出し物は決まったか？」

三つ案が出たところで西村先生が登場。

明久「今のところ、この三つです」

一、写真館

二、ウエディング喫茶

三、中華喫茶

鉄人「ちゃんとやっているようだな。なら、なるべく早くやるものを決めて準備に取り掛かれ」

それだけ言ってまた西村先生は教室から出て行った。どうやら様子を見に来ただけのようだ

雄二「それじゃあ、この中から選ぶぞ。どれか一つに手を挙げてくれ」

結果、選ばれたのは中華喫茶になった。しかもチャイナドレスも着るらしい。

須川「それなら、お茶と飲茶は俺が引き受けるよ」

康太「……………（スクツ）」

明久「ムツツリーニ、料理できるの？」

康太「……………紳士の嗜み」

中華喫茶が紳士の嗜み？ そんなの聞いたこともないけど。たぶんムツツリーニの事だからチャイナドレス目的で何度も行って、見様見真似で出来るようになったらどうだね。

雄二「それじゃあ、厨房班とホール班に分かれてもらう。厨房班はムツツリーニと須川のところ、ホール班は久多羅木と明久のところに集まれ」

明久「姫路さんはホールだからね」

瑞希「もちろんですよ」

美波「アキ。ウチは厨房にしようかな」

明久「うん。適任だと思うよ」

美波「……………」

秀吉「それなら、ワシは厨房にしようかのう」

棗「ひでちゃん、それはないよ。ホールに決まってるじゃない」

秀吉「決まっておるのか？」



明久「当たり前じゃないか！ そんなに可愛いんだからホールに決まってみぎゃあああ！ み、美波様！ 折れます！ 腰骨が！ 命に関わる大事な骨が！」

美波「……ウチもホールにするわ」

明久「そ、そうですね……。それが、いいと、思います……」

ホントにみなみはすぐ暴力で……。もう二度とそんなことを出来ないように矯正するべきかな。と、それより。

棗「みなみ、ちょっとしつれいするよ」

美波「ちょっと待って、折れる！ 命に関わる大事な骨が！」

そしてわたしはみなみがアキにしたように、同じようにやってあげた。アキにどれだけの事やってるか一度、その身で知るといいよ。もちろんやり過ぎないように手は抜いてるよ。

そして清涼祭の準備中にみなみに呼ばれた。そこにはみいちゃんを除くいつものメンバーがいた。

棗「どうしたの？」

美波「うん、ちょっと聞いておいてほしくて。ホントは瑞希に止められてるんだけど。あの子、転校するかもしれないのよ」

皆、驚いている。わたしもその一人だ。

棗「転校ってどういうこと？」

明久「そうだよ美波！ 姫路さんの転校ってどういうことさ」

美波「どうもこうも、そのままの意味。このままだと瑞希が転校しちゃうかもしれないの」

康太「……………このままだと？」

秀吉「島田よ。その姫路の転校とさっきの話がどうつながるんじや」

美波「瑞希の転校の理由が『Fクラスの環境』なのよ」

雄二「なるほどな。この酷い環境を親側が良しとしなかったか。まあ姫路は体が弱いから特にだろう。……………そうになると、いろいろやらないといけないな」

明久「いろいろって？」

雄二「とりあえず問題は三つ」

棗「ござとみかん箱の普通じゃありえない設備。はっきり言って学習環境じゃないよね。ちゃぶ台の時ですら思ってたことだし」

雄二「次に老朽化した教室。これは健康に害のある学習環境だ。そして最後にレベルの低いクラスメイト。つまり姫路の成長を促せない学習環境だ」

問題だらけだね。このクラス。

明久「参ったね。随分と問題だらけだ」

秀吉「そうじゃな」

雄二「それでもないさ。三つ目に関しては姫路と島田で対策を練っているんだろう」

美波「瑞希と一緒に召喚大会に出るつもりよ」

雄二「なら三つ目は二人に任せるとして、後二つは……。久多羅木、明久、ついて来い」

わたしは転校ではないけど、引越をしたからわかる。どうしようもない理由ならしょうがない。でもこんなことなら、絶対に転校はさせない。

第十八話 清涼祭準備（後書き）

葵「最後に凄いことになったな」

昴「小学生の時の知り合いだから手伝えたら手伝えたいがな」

棗「二人ともありがとう。もしかしたらお願いするかもしれないからそのときはよろしくね」

葵「任せな。で、話は変わるが清涼祭でチャイナドレスを着るの？」

棗「着た方が客寄せになるってことらしいよ」

昴「……まあ、頑張れ」

葵「兄としてはどうなんだい」

昴「ノーコメントだ」

棗「あはは。さて次は第十九話 交渉 の予定です。またね」

## 第十九話 交渉

棗サイド

今わたしとアキはゆうくん連れられてある場所に向かっている。  
今の問題を解決するために必要な場所。

明久「雄二、どこに向かっているのさ」

雄二「学園長室だ」

明久「学園長室？　なんでさ？」

雄二「あの老朽化した教室の改善要求をする」

明久「改善要求？　そんなの聞いてもらえるの？」

棗「あのねアキ。ここは学校。教育機関だよ。クラスによる格差は……まあ、この学園だししょうがないにしても、その方針で生徒の健康に害が及ぶような状態なら、改善要求は当然の権利だよ」

明久「はあ。なるほど」

雄二「ホントにわかったのか？」

明久「ん。たぶん」

雄二「不安になるな……」

棗「アキ……」

明久「それで改善要求の権利があっても、聞いてもらえるかわからないよね？」

棗「大丈夫。その時はその時でまた別の方法で攻めればいいだけだから」

明久「ふ〜ん。そっか。ん？ 何だろう、中から声が聞こえる」

わたし達は学園長室の前に着いた。アキが言っていたように中から話し声が聞こえる。話し合いよりは、言い争いの方が正しいかもしれないけど。

雄二「確かに聞こえるな。学園長がいるって事だな。ならさっさと入るぞ」

明久「失礼します」

雄二「邪魔するぞ」

棗「ちょ、ちよっと二人とも！」

アキとゆうくんはドアをノックして、返事を待たずに入室した。わたしも仕方なくそのまま入室することにした。

藤堂「本当に失礼なガキどもだねえ」

そのガキどもにわたしもはいつてるの？ 口の悪い学園長だね。さて、それで学園長とお話し中なのが教頭の竹原先生だね。

竹原「やれやれ。取り込み中だと言うのに……まさか貴方の差し金ですか？」

藤堂「馬鹿を言わないでくれ。なんでそんなことをしなくちゃいけないんだい？」

竹原「学園長のことですからね。隠し事も得意なようですし。っと、もう戻りますか。やることはいろいろあるからね」

そう言つて教頭は出て行つた。

藤堂「でだ、ガキどもは何のようだい？」

雄二「今日は学園長に話があつてきました」

棗「ゆうくん……。その前に名乗つておこつね……」

藤堂「その子の言う通りさね。社会の常識だ。覚えておきな。それとわたしは今忙しいんでね。簡単に頼むよ」

棗「あ、はい。二年F組の久多羅木棗です」

藤堂「久多羅木……」

なんだろう。なんか凄い嫌な顔された。学園長とはこんな風に話すのは初めてだから、どうしてか検討もつかない。……いや、もしかしたら兄さんかな？ 確か去年、黒の腕輪の事でかなり学園長をいじつたみたいだし……。もしそうならばっちは止めてほしいけど。

雄二「失礼しました。二年F組代表の坂本雄二。それでこっちが」

そう言ってゆうくんはアキを指差した。それよりゆうくん、ちゃんと敬語使えるんだね。

雄二「二年を代表するバカです」

藤堂「ほう……。そうかい。お前達が坂本と吉井かい」

明久「ちょっと待ってください！ 僕はまだ名前を言ってません！」

ゆうくんの紹介もおかしかったけど、学園長もおかしいね……。二年を代表するバカで迷わずアキだったわかったみたいだけど、それでわかるって、それはそれでどうなの？

藤堂「それじゃ、さつさと用件をいいな」

なんで学園長は口の端を吊り上げているんだろう？

雄二「Fクラスの設備について改善を要求してきました」

藤堂「設備の改善の要求？ それは暇そうなことだ。この学園のシステムがわからないのかい？ 却下だよ」

その程度の理由で拒否ですか。

雄二「今のFクラスの教室は、まるで学園長の脳みそのように穴だ



らけで、隙間風が吹き込んでくるような酷い状態です。学園長のよ  
うな戦国時代から生きている老いぼれならともかく、今の普通の高  
校生にこの状態は危険です。健康に害を及ぼす可能性が非常に高い  
と思われます。要するに、隙間風の吹き込むような教室のせいで体  
調を崩す生徒が出てくるから、さつさと直せクソババア、というわ  
けです」

途中から我慢が出来なくなっただね。さすがだね、それでこそゆ  
うくんだよ。ゆうくんが言わなかったらたぶんわたしが言ってた  
と思うから、ナイスだよ。

藤堂「お前達の言いたい事はわかった」

明久「それじゃあ、直してもらえるんですね？」

藤堂「もちろん……、却下だね」

明久「なつめ、雄二、このババアをコンクリに詰めて捨ててこよう」

雄二「……明久。もう少し態度には気を遣え」

棗「アキ。この程度のヤツにそんなことするのもバカみたいだから  
やめてね」

雄二「……久多羅木もか。バカと久多羅木が失礼しました。どうか  
理由をお聞かせ願いますか、ババア」

明久「そうだね。教えてください、ババア」

棗「さつきみたいにこの学園のシステムだから、なんてくだらない

理由は止めてくださいよ。こっちはそれを潰せる正当な理由があつての事なんですから。却下なら却下で納得のいく理由を教えてください。いいですね？ 学園長？」

藤堂「いったいなんなのさね。二人からはバカにされて、一人からは殺気に近いものを感じるんだが……。まあいい。却下したが条件付きでなら設備の改善を認めてやるうじゃないか」

条件？ 怪し過ぎる。なんでいきなり考えを変えた？

棗・雄二「……………」

ゆうくんも警戒してるみたい。まあ当然だよな。

明久「その条件ってなんですか？」

藤堂「清涼祭で行われる召喚大会は知ってるかい？」

棗「知ってます」

明久「同じく」

藤堂「それじゃあ、優勝賞品は知ってるかい？」

明久「は？ 賞品？ そんなものがあるんですか？」

藤堂「ああ、あるんだよ。優勝チームから三位のチームに腕輪と如月ハイランドプレオープンプレミアムペアチケットがね」

明久「はあ、それで？」

藤堂「なに、あんたらにペアチケットを回収してほしいのさ。ちょいと悪い噂があつてね」

棗「ちなみにどんな噂ですか？」

藤堂「ペアチケットでやってきたカップルを結婚までコーディネートするらしい。企業として、強引な手も使つつもりらしい」

棗「つまり条件は、そつちの不手際を隠したいから、大会の賞品と交換なら改修してやると？」

藤堂「もの凄い悪意を感じるが……まあそういうことだよ」

雄二「いいだろう。ただしこちらも条件がある。召喚大会は二対二のトーナメント制で、一戦事に教科が変わる」

藤堂「それがどうした？」

雄二「トーナメント表が出来たら科目を決めさせてくれ」

藤堂「そんなことなら構わないさね。そこまでやるんだ。優勝出るんだろうね？ 言い忘れてたけど他クラスに協力は求めるなよ？

Fクラスだけでやりな」

雄二「なに？ ……まあいいだろう。問題ない」

科目を決められる？ ちょっと不思議かな。ペアチケットで行ったカップルを強制的に結婚まで持つていく。いやなら行かなければいいだけ。たかだかその程度の問題で不正って言うてもいいことを許

す？ しかも他クラスに頼らずにFクラスだけで対応しろ？ まあFクラスの設備の事だからわからなくもないけど、なんかおかしいよね。

雄二「設備の改善の方はこれでいいとして、あと一つ」

藤堂「まだあるのかい」

雄二「清涼祭の売り上げで机などを買い揃えるから、その許可がほしくてな」

藤堂「召喚大会の優勝で認めてやるよ」

雄二「ああ、それでいい」

わたし達は学園長室を出た。

雄二「Fクラスだけでなんとかしろ、か。久多羅木、明久。お前等二人で大会に参加しろ」

明久「わかったよ」

棗「ゆうくんはどうするの？」

雄二「召喚大会には翔子と出ることになっていたんだが……。こうなると翔子とは出れないな。Fクラスの誰かを捕まえるさ」

棗「いいの？ しょうこちゃんのこと」

雄二「この場合はしょうがない。まだ参加登録もしてないしな。な

んとか説得するぞ」

棗「そう。頑張ってね」

さて召喚大会。予定になかったけどやるしかないよね。アキの点数がどんな感じか確認も出来るしね。

葵サイド

なんか翔子が荒れてる。なんかあったのかな？ そついえばさつき翔子の彼氏の……坂本だっけ？ が来てたね。それからだね。荒れてるのは……。

優子「代表、どうしたの？ なんか怖いわよ」

葵「確かにそうだな」

昴「何かあったのか？」

翔子「……雄二が……約束を破った」

昴「約束？」

翔子「……一緒に召喚大会に出る約束。さつきいきなり、Fクラスのやつと組む事になってしまったから、ホントに悪いが約束は破棄だっけ」

優子「代表の彼氏にこんなこと言いたくないけど、随分と自分勝手ね。先に約束していた方をなかった事にするなんて」

優子はかなり怒ってるね。わからないでもないんだけど、たぶん理由があるだろうしね。

翔子「……優子。大会に参加するの？」

優子「ええ。そのつもりだけど、一緒に参加する相手がないのよ」

翔子「……なら私が一緒に出る」

優子「いいの代表？」

翔子「……構わない。一緒に参加しなかった事を雄二に後悔させる」

昴「思いが強いつても考え物だな……」

葵「そうだな。それから昴。私達も大会に出ない？」

昴「葵みたいなバランスブレイカーが参加するのか？」

葵「バランスブレイカーって……。確かに点数は高いけどそれでも召喚獣の操作が不慣れだからそれほどでもないよ」

そう、不慣れだったからFクラス戦で私も昴も苦戦したんだし。

優子「久多羅木君も出ればいいんじゃない？ 確かに葵と組んだら、二人ともバランスブレイカーだからゲームにならない可能性もあるけど」

優子まで……結構失礼だね。

翔子「……明らかな優勝候補」

それは言い過ぎだよ。

葵「それに私が、こんな面白そうな事に参加しないでも？ 賞品に少し興味があつてね」

昴「賞品？ 確か腕輪とペアチケットだったか？」

優子「腕輪をねらつてるの？」

葵「まさか、狙いはチケットの方だよ」

翔子「……葵には、誰か一緒に行きたい人がいる？」

葵「私じゃないよ。なつめとアキにプレゼントしようかと思ってね」

昴「ほう。それは……面白そうだな」

昴が凄くいい笑顔でそんな事を言ったよ。

優子「それで、久多羅木君はどうするの？」

昴「そんな楽しそうなこと、断るわけがない。確か三位までもらえたな。よしやる気出てきた。葵、チームを組むぞ」

葵「そうこなくちゃ！」

優子「……かなりバイチームが出来たんじゃない？」

翔子「……周りから応援してもらえてるなんて棗が羨ましい」

優子「代表！？ 今の話からどうやったらずう解釈出来るの！？  
明らかに自分達が楽しむ為じゃない！」

いやゝ、Aクラスって最高クラスらしいから、前の学校のように勉強馬鹿ばかりなのかと思ってたけど……違うね。結構ノリいいわ。楽しい場所だね。



## 第十九話 交渉（後書き）

葵「なつめも大変だな。学園長のパシリにされるなんて」

棗「それはそうだけど、こっちも目的があるからしょうがないよね」

昴「しかし、大会に俺達まで出るんだな。いったいどうするつもりなのか」

棗「まあ、それは後々でしょ。そういうわけでまた次でお会いしましょう。またね」

## 第二十話 召喚大会への会議

雄二「教室の改善と、清涼祭の売り上げでの机等の購入の約束を取り付けた。ただし条件つきだな」

今わたしはFクラスにいる。学園長と話が終わってすぐだね。ゆうくんは一度Aクラスに寄ったらしいけど……。ちゃんと穩便に断ったのかな？ それでFクラスで待ってたみいちゃん除くいつものメンバーと会議を始めた。

秀吉「条件とは何なのじゃ？」

明久「召喚大会で優勝することだったさ」

美波「そうなの？ 瑞希となんとかかしてみるわ」

棗「大丈夫だよ、みなみ。わたし達も参加するから」

美波「そうなの？」

雄二「ああ。お前達だけじゃないから安心しろ、島田。今回の話し合いで俺達も出ることにした。チームは久多羅木と明久のペアだ。今の明久はそれなりに点数も取れているからな」

康太「……確かに、Aクラス戦でいい点数を取ってるのを確認した」

秀吉「他の科目も話を聞く限り、それなりに取れているようだしのうち」

美波「点数がある程度取れてて、召喚獣の操作はトップレベル……」  
そう、アキは点数より召喚獣の操作が最大の武器だからね。そこに  
点数がついてくればもっというい。

雄二「そうだ。そして久多羅木も明久並に操作が出来る。この二人  
のコンビネーションもなかなかだ。即席チームじゃ、相手の点数が  
上でも問題はないだろう」

明久「雄二。ハードル上げないでくれない」

雄二「上げてないぞ。事実だからな」

それはわたしとアキが最高のコンビだと。そう受けとっておこう。

棗「それでゆうくんはどうするの？ しょうちゃんと参加しなく  
なったんでしょ？」

雄二「それが……。秀吉、一緒に大会に参加しないか」

秀吉「ワシか？ 大丈夫じゃが、ワシはそれほど点数は高くないし  
操作の方もそれほどではないぞい」

雄二「安心しろ。操作の方はどうも出来ないが、点数なら何とか出  
来る。秀吉のやる気次第でな」

美波「どういうこと？」

雄二「まだ清涼祭まで日がある。その間に俺が勉強を教える」

今のゆうくんの成績はAクラス戦の時より上がってる。なんでも次

は必ずAクラスを倒すために勉強してるらしい。

美波「なるほど、それで木下のやる気次第ね」

明久「どうする？ 秀吉？」

秀吉「……わかったのじゃ。雄二よろしく頼むぞ」

雄二「ああ、任せろ」

康太「……明久はどうする？」

明久「僕は今まで通りなつめと勉強するよ」

康太「……羨ましい」

美波「お仕置きが必要かもね」

棗「そうなるとわたしもお仕置きしないとイケなくなるね」

雄二「落ち着け。とりあえず各自清涼祭まで出来る事をしておけ」

とりあえず、わたしはアキとの勉強くらいしかないね。

秀吉「一つ提案があるんじゃないか」

雄二「なんだ？」

秀吉「皆で勉強会をしたらどうかと思ってる。Aクラスに知り合いがいるのもあるし、呼んで教えてもらえたらと思っただけじゃ」

棗「へえ〜、面白そうだね」

勉強会か。それは面白そう。たぶんあおいちゃんと兄さんは引っ張ってこれると思うし。

美波「Aクラスに知り合いって？」

明久「雄二の彼女の霧島さん」

棗「ひでちゃんのお姉さんの木下さん」

秀吉「おぬしらの幼なじみもAクラスだったのう」

康太「……意外とAクラスの知り合いが多い」

雄二「Aクラスじゃないが、姫路もAクラスレベルだしな」

美波「その中で呼べそうなのは？」

雄二「翔子は無理だ。約束破ってる状況でそんなの出来るわけねえ」

まあそうだよな。もしかしたら敵として参加してくるかもしれないくらいだし。

明久「秀吉のお姉さんは？」

秀吉「姉上はどうじゃろうな。一応話はしてみるが……あまり期待はしないで欲しいのじゃ」

康太「……二人の幼なじみは？」

棗「兄さんはたぶん大丈夫だと思うよ」

明久「あおいも大丈夫だと思う」

雄二「それじゃあ、昴と水無月に一応話しておいてくれ。ダメだったら、それはそれでしようがない」

兄さん達は協力してくれるよ。きっと……。

雄二「となると、教師役が今のところ姫路、水無月、昴だな」

明久「なつめが入ってないけど？」

棗「いや、さすがにその三人が来たら、わたしは教えてもらう側だよ」

でも、さっきのは嬉しいね。アキからみたらわたしは教師なんだね。ちゃんと教えてあげられてる事がわかったからよかったよ。

雄二「久多羅木は昴と水無月が来なかった場合にやってもらってもいいけど」

康太「……雄二、質問がある」

雄二「どうしたムツツリー二？」

康太「その勉強会……大会に参加しない者でも参加していいのか？」

雄二「構わない。人数が多くなると困るから、来ても後二、三人だな」

康太「……なら参加する」

なぜか知らないけどムツツリー二がやる気を出している。

秀吉「雄二よ。今電話で姉上に確認したのじゃが、姉上は無理みたいじゃ」

雄二「そうか」

秀吉「それと、約束を破った事、後悔させてあげる、と霧島からの伝言じゃ」

ひでちゃんはしょうこちゃんの伝言を伝えた。声真似して。

雄二「わざわざ声真似する必要はないぞ。しかしそうか。翔子は敵か。……よし、とりあえず今日は解散だ。来る人数が決まってから場所は考える」

それでわたし達は解散した。

棗「アキ、今からAクラスに行こう。兄さん達がいるかもしれないし」

明久「そうだね」

わたし達はAクラスに向かった。そのAクラスについて兄さん達をさがした。

明久「あ、いた。お〜い。昴、あおい」

昴「明久か。どうした？」

明久「僕達は召喚大会に向けて勉強会をすることになってね、それに昴とあおいが参加出来ないかと思って聞きに来たんだ」

優子「それって、さつき秀吉から電話で言われたやつね」

棗「うん。そうだよ」

昴「俺は構わないぞ」

葵「私もいいよ」

愛子「なにになに？ なんの話してるの？」

棗「あ、工藤さん。えつとね、召喚大会の為に勉強会をしようって事になって、兄さん達も誘えないかって話しになってね。それで誘いに来たの」

愛子「ふ〜ん。そうなんだ。それと僕は愛子でいいよ。棗ちゃん」

棗「わかったよ、あいこちゃん。それと気になってただけど、なんでしようこちゃんは落ち込んでるの？」

もしかして一緒に大会に出るっていう約束を破ったことかな？

翔子「……なぜ私には、雄二からその話しが来ない？」



そっちですか。

明久「約束を破ってる状況で、そんなの頼めるわけがないって雄二は言ってるけど」

そうだな。

棗「しょうこちゃんも来る？」

翔子「……いいの？」

棗「うん。大丈夫だよ」

愛子「ねえねえ、僕は大会に参加しないんだけど、勉強会に参加してもいいかな？」

明久「大丈夫だよ。ムツツリー二も大会には参加しないけど、勉強会には参加するし」

愛子「なら僕も参加するね」

棗「参加するのは兄さんとあおいちゃん、しょうこちゃん、あいこちゃんの四人だね。ゆうくんに伝えておくよ」

葵「で、それはいつ、どこでやるんだ？」

明久「まだ決まってるじゃないんだよね。どれだけ集まるかわからないから。来る人数が決まってから場所を考えるって言うってたし」

昴「まあ、そりゃそうだな」

棗「たぶん明日には決まると思っけど」

翔子「……問題ない。場所ならある」

葵「どうしたの？ 翔子」

翔子「場所ならうちを使えばいい」

そういつてしようこちゃんは携帯を取り出して電話をかけた。

翔子「……雄二、棗から勉強会の話は聞いた。私も参加する」

葵「なんか直接交渉を始めたな」

愛子「代表って結構行動力あるんだね」

翔子「……大丈夫、問題ない。場所はうちを使えばいい。土日の泊まりでもオーケー」

棗「泊まりね。うん。それはそれで楽しそう」

翔子「……その点についても問題ない。泊まりを強制しない。そこまでは予定が合わない人もいるかもしれないから。泊まりでも構わないって人だけ」

昴「意外と交渉が上手くいってるようだな」

棗「そうだね」

翔子「……わかった。それで決定」

そういつてしようこちゃんは携帯をしまった。

翔子「……日と場所が決まった。場所はうち。日は今週の土曜日。泊まりもオーケー」

しようこちゃんって結構行動力あるんだね。

棗「ならわたしは泊まりにしようかな」

翔子「……歓迎する」

そしてここにいる勉強会参加組は皆泊まりになった。

## 第二十話 召喚大会への会議（後書き）

昴「勉強会が楽しくなりそうだな」

葵「ホントだね。勉強会の話を出した秀吉。あんたは最高だ」

棗「二人とも……。勉強会では二人とも教師役だからね。ちゃんと教えてよ」

昴「もちろんだ」

葵「それでは次回は第二十一話 勉強会 の予定だな。またね」

## 第二十一話 勉強会？

勉強会の予定を立てた日から数日。今日はその勉強会の日です。ただほとんどの人が場所がわからないため、一度集まってから、しようこちゃんに案内してもらった事になったの。

棗「おはよう。皆早いね」

もう集合場所に集まっていた人達に挨拶をした。

秀吉「まあ。遅刻して迷惑かけるのも嫌じゃからな」

康太「……これくらいは当然」

愛子「ムツツリー二君も気合い入ってるね」

康太「……当然だ。これはチャンスだ。うりも……なんでもない」

美波「土屋、あんたね……」

棗「あはは……、一応聞かなかった事しておくよ」

康太「……助かる」

葵「やあ瑞希久しぶり」

昴「そついえばそつだな」

瑞希「えっと、どちら様でしょうか？」

葵・昴「おいおいおい……」

昴「姫路、それはあまりに酷くないか。中学三年間と高校一年間の四年間会ってないだけでその反応は」

葵「そうだよな」

瑞希「あ、大丈夫です。あおいちゃんは覚えてます」

昴「俺だけか!？」

葵「よかったよ。という事でまたになるけど、久しぶり」

瑞希「はい。お久しぶりです」

明久「姫路さん。昴だよ。小学生の時に僕となつめとあおいとよく一緒にいた」

みいちゃんは腕を組んで頭を何度も何度も傾けながら時間をかけて思い出そうとしていた。……て、そこまで覚えてないの？

瑞希「え? …………… ああ! 久多羅木君ですか」

昴「……随分時間がかかったな。思い出してもらえたようで何よりだ」

こんな会話をしていたらゆづくんとうこちゃんが来た。それと兄さんドンマイ。これにくじけちゃダメだよ。

愛子「葵達は知り合いなの？」

葵「小学生の時から友達だよ」

愛子「僕もちちゃんと挨拶しとこうかな。戦争の時に言ったけどね。僕は工藤愛子、よろしくね瑞希」

瑞希「あ、はい。姫路瑞希です。よろしくお願いします」

雄二「自己紹介は終わったか」

棗「しようこちゃんと来たけど仲直りでもしたの？」

わたしはゆうくんになんて事聞いてみた。

雄二「ああ。説明出来る範囲で説明した」

棗「そっか。よかったね」

雄二「なにがよかったのかわからんがな」

まったく照れちゃって〜。

翔子「……それじゃ案内する。ついて来て」

それからしばらく歩いてしようこちゃんの家に向き着いた。

棗「話では聞いてたけどこんなにでかいんだね」

明久「みたいだね」

そう、話では聞いてた。しょうこちゃんの家はお金持ちであると。

翔子「……それじゃ、上がって」

皆で挨拶をしてから上がった。

明久「へえ〜。いろんな部屋があるね」

翔子「……用途別」

こんなに長い廊下ももはじめて見たけど部屋が用途別って……、凄  
いね。

愛子「あの本が並べられてる部屋は？」

翔子「……書斎」

葵「スクリーンのある部屋もあるね」

翔子「……シアタールーム」

棗「いろいろあるね〜」

翔子「……それで、ここが勉強部屋」

そういつてしようこちゃんは部屋のドアを開けた。開かれたドアの  
ところから部屋の中をみてみた感想。ただただ広い。今回勉強会に  
参加するのはわたし、アキ、ゆうくん、ひでちゃん、ムッツリーニ、  
みいちゃん、みなみあいこちゃん、しょうこちゃん、あおいちゃん、  
兄さんの十一人。それだけいるのに全員入っても狭いとは感じない



広さ。

雄二「それじゃ、勉強を始めるか」

それぞれ勉強を始めた。

わたしとアキとひでちゃんとムツツリーとあいこちゃんが、あおいちゃんと兄さんに教えて貰って、しょうこちゃんとゆうくんは一對一、みなみとみいちゃんは後でわたし達に加わるみたい。

棗「あおいちゃん。ここがわからないんだけど」

葵「ん？ あゝ、それは……………で、……………だな」

棗「あゝ、うん。なるほど。わかったよ」

秀吉「久多羅木兄よ、ここを教えて欲しいんじゃないが」

昴「いいぞ。それと昴でいい。でだ、……………だから、……………なる。これで大丈夫か？」

秀吉「大丈夫なのじゃ」

明久「昴、教えて」

昴「何がわからないんだ？」

明久「何がわからないかがわからない」

兄さんは右手で頭を掻いたね。それにアキ、それは問題発言だよ。

昴「そんな問題発言を堂々とするな。棗、かなり苦労してるんじゃないのか」

棗「そうでもないけど……。普段そんなこと言わないし」

明久「なつめにそんなこと言わないよ。昴だからやってるんだよ」

昴「そうか、俺は特別か。と、そんなことより、じゃあ質問はないのか？」

明久「いや、わからないところがあるのは本当。ここなんだけど」

なんだ、アキもちゃんとやってるね。ムツツリーとあいこちゃん  
はなんだろう？ あいこちゃんの手には機械がある。ボイスレコーダ  
ー？

昴「わかったか、明久」

明久「うん。オーケーだよ」

秀吉「明久、おぬし本当に勉強が出来るようになっておるのう。こ  
れも久多羅木との普段の勉強の成果かのう」

明久「頑張ってるからね。それでもまだまだだよ。なつめは大好き  
だからね」

棗「にや！？」

時が止まった。ていうかアキは何を言ってるの？ 変な事言うから



美波・瑞希「やるわよ!!!」

明久「待つんだ!! 美波に姫路さん!! 話を聞いて!」

雄二「なんだ明久、三股か。感心しないな」

翔子「……ちゃんと一人に決めるべき」

明久「ちくしょう! 味方がいない!! そうだ! なつめは僕の味方だよな?」

棗「そうだね。味方だね。だから、さっきの事について詳しく」

明久「まさかなつめまで敵だった!? いい? よく聞いてよ。僕はなつめが好きなんだ。っておかしいだろう!!」

今の言葉でわたしはショートした。

秀吉「それはさっきも聞いたのじゃ」

雄二「いや秀吉。大事な事だから二回言ったんだろ」

昴「ああ、なるほど。確かに大事な事だからな」

翔子「……棗が羨ましい。私は雄二に好きだと言われた事がない」

明久「……ねえ、もしかしたらだから間違ってたらゴメンなんだけど、今のこの事態の原因は秀吉じゃないよね?」

秀吉「うむ? なぜじゃ?」

明久「秀吉だったら声真似が出来るからもしかしたらと思って」

雄二「そついや翔子の声真似もホントに似てたしな」

秀吉「残念じゃが、ワシはそつやって人を追い込んで楽しむ性格ではないんじゃないが」

明久「……確かにそうだね。疑ってごめん。秀吉」

秀吉「まあ、しょうがないじゃろ」

明久「それじゃあいつたい誰が……」

雄二「自分で言ったんだろ、恥ずかしいからつごまかすな」

葵「そうだよアキ。これだけの人がいるところでの告白だから恥ずかしいかもしれないけどさ。それとなつめ？ そろそろ戻ってこい」

わたしは体が揺られる感覚で現実に戻ってきた。

葵「お。帰ってきた。お帰り」

葵「ただいま」

なんだろう。皆がにやけた顔でわたしを見てる。……そつだ、思い出した、確かアキに……。

康太「……明久、助けてやる」

そういつてムッツリーニはアキの肩に手を置いた。それよりムッツリーニ、鼻血はもう大丈夫なの？ ちゃんと血は足りてるの？

明久「ありがとう！ じゃあお願いするよ。なつめよく聞いて。僕は雄二の方が好き。ってこのヤロー……！」

棗「アキ。そんなことを堂々と言われても、わたしはどうしたらいいの？」

泣きたくなってきた。

葵「別に同性愛を否定はしないけど、やっぱり異性を好きになった方がいいと思うぞ」

翔子「……雄二、吉井がああ言ってるけど」

雄二「その手に持つてるものをしまえ！ 安心しろ。俺も明久の事が好き。テメエエエエ……！」

翔子「……雄二、浮気は許さない」

雄二「まで！ 翔子早まるな！ あれはちがギヤアア……！」

瑞希「やっぱり坂本君なんですね」

美波「前から怪しいとは思っていたけど」

明久「落ち着いて二人とも、そんなわけないじゃないか！ 僕は普通に通に女の……！」



それから二時間後、なんとか騒ぎが落ち着いたら時、ネタバラシがあった。

雄二「てことはなんだ。明久の告白は作り物だと」

愛子「まあ、そうだね」

棗「ねえあいちゃん。ちょっと聞いていい」

愛子「う……、なんか怖いけど、どうぞ」

棗「アキの告白は全部作り物？」

愛子「あゝ。そのことか。それは秘密。全部かもしれないし、違つかもしれないし」

昂「もし全部じゃなかった場合、明久の本音が混ざってた事になるな」

それからしばらく聞いてみたけど教えてくれなかった。せめて全部か一部かだけ教えてくれれば。



## 第二十一話 勉強会？（後書き）

葵「この勉強会はまたカオスだな」

棗「Fクラスのメンバーと一緒にだからこうなるかなとは思っただけ、まさかあいちゃんが引き金を引くなんて」

昴「明久の告白はどうなんだろうな」

葵「さあ？ 愛子が教えてくれないし」

昴「まあいい。いずれわかるだろ。それじゃ次は第二十二話 勉強会？だな。また荒れるのか……。とりあえずじゃあな」

## 第二十二話 勉強会？

ちよつとした？ 事件が終わってからまた勉強が始まった。それからは何事もなく勉強をしていた。……だったらいいな。問題を……、問題つてレベルまではいかないけど、原因はみなみ、みいちやんペアがだいたいだね。巻き込まれるのは主にアキ。たとえば……。

美波「アキ、ここがわからないんだけど……」

明久「僕じゃなくて、昴やあおい、なつめに霧島さんとかに聞いた方がいいよ」

美波「いいから教えなさい」

明久「だからその関節はそっちには……！！！」

瑞希「吉井君、ちゃんと勉強に集中してくださいね」

明久「関節をきめられる、っていつか無理させてる状態でどうしろと？」

瑞希「そんなに美波ちゃんと勉強の方がいいですか？」

明久「お願いだから話を聞いて！」

と、こんな感じ。これでも数ある騒ぎの一部だけどね。今更かもしれないけど、なんでFクラスの人達は話を聞こうとしないんだろう。まあ、しょうこちゃんもたまにそうなるけど。それで、アキがわたし達に助けを求めて救出、……の流れを繰り返してただけどあま

りの頻度に、皆スルーすることにした。わたしはたまに助けるけどね。全部は無理……。それで今わたしは、テストを受けている。やったことをちゃんと理解してるかの確認テスト。もちろん希望者のみ。テストはしょうこちゃん、あおいちゃん、兄さんの三人が協力して作ったもの。皆それぞれ勉強してた範囲が違うからこうなった。それとしようこちゃんがテストは持つてるらしいけどそれだと出題範囲が広く、やったことを理解出来るかの確認には不適切ということ。だからってテスト作らなくても……。で、テストを受けてるのはわたし、ゆうくん、ひでちゃん、ムツリーニ、あいこちゃん。ホントはアキも受けるつもりだったらしいけど、……。さっきの状況だし。

昴「……終了だ」

時間がきた。テストが終了。答案をしようこちゃんとあおいちゃんが回収していく。

愛子「終わったね」

康太「……………（コクコク）」

雄二「秀吉、どんな感じだ？」

秀吉「うむ。何とか思ったと思うんじゃないか……」

棗「大丈夫だよ。これはあくまでも確認テストなんだから。間違えたところをそのままにしないで、ちゃんと復習すれば大丈夫」

秀吉「久多羅木は優しいのう。確かにそうじゃな」

康太「……………久多羅木、頼みがある」

棗「何？」

ムツツリーニ、その手に持つてる物は何？ あいこちゃんが持ってた物に似てるんだけど……………。

康太「……………もう一回』にゃ』と鳴いて欲しい」

棗「なんで？ まさか録音するき！？」

そりゃ、小さい時は……………今でも小さいけどさ……………。確かに言ったよ。口癖だったし。でも言うつと毎回危ない目をしたクラスメイトとかが近寄つて来たんだよね。それをアキとあおいちゃんと兄さんが近づけないようにしてくれたけど。

康太「……………頼む！」

そういつてムツツリーニは土下座まで始めたよ。そこまでして録音したいの？

雄二「どうしたムツツリーニ。そこまでするとは……………」

康太「……………あれは」

秀吉「あれは？」

康太「……………絶対に売れる」

棗「はい！ 却下！！」

康太「……………無慈悲な！」

雄二「なんだ。今回は録音してなかったのか？」

康太「……………あんな、……………秘密兵器を隠し持つてるとは予想外だった！ 本当に迂闊だった！」

秀吉「ムツツリー二がこんなに感情を込めて話してる姿は始めてみるんじゃない？」

確かにそうだね。迂闊だったのところは本当に後悔してるみたいだったし……………。

愛子「でもムツツリー二君、音声だけだとあまり意味がないような気がするんだけど」

康太「……………問題ない。不測の事態だったせいで完璧とは言えないが、久多羅木が鳴いてる時の写真がある。ホントは動画の方がよかったんだが……………」

棗「写真とセットで売る気？」

康太「……………写真だけでも十分なんだが、やはり音声もあった方が……………」

雄二「おい、久多羅木はそんなに売り上げに貢献してるのか？」

康太「……………売り上げは八位くらい。かなり高い」

雄二「八位で高いのか」

康太「……………が、これは古い情報。戦争が始まってから人気が上がった。急激に上がったのはBクラス戦」

雄二「Bクラス？ ああ、久多羅木に殲滅姫とか殲滅天使なんて二つ名がついた時か」

棗「それやめて……………」

その二つ名はどんどん広まってるんだね……………。

康太「……………そうだ。それから男女問わず人気が出ている。現在の売り上げは三位。しかも一位と二位にそれほどの差もない」

秀吉「それなら欲しがるのもしょうがないのかもしれない」

愛子「あはは。これな〜んだ」

あいこちゃんは機械。ボイスレコーダーかな？ を動かした。そして流れてきたのが……………。

『こゃ』

わたしが鳴いた時のものだった。

康太「……………く、俺が、またチャンスを逃しただと？」

あいこちゃん。それをどうするつもり？

愛子「ムツツリー二君。これが欲しい？」

康太「……………凄く欲しい」

愛子「なら、僕と保健体育のテストで勝負してよ。前に負けた時から悔しくてね」

康太「……………勝つたらくれるのか？」

愛子「まあね。本当は僕だけの物にしておこうと思ったけど、これを使えば早く再戦出来るかもだしね。だからこれを賞品にやらない？」

何勝手な事言ってるの!?

康太「いいだろう」

いつものためが全くない!

棗「ゆうくん……………」

雄二「なんだ？」

棗「RPG持ってない？」

雄二「RPG？」

秀吉「ゲームの話かのう」

棗「ううん。ゲームの話じゃないよ」

雄二「……ああ。そういうこと……。そんな物騒なのあるわけねえだろ！ それと少し落ち着け！ らしくないぞ！ 深呼吸しろ」

言われた通りに深呼吸をした。……うん。なんかちよつと落ち着いた。

康太「霧島、保健体育のテストを至急用意してくれ。二人分だ」

翔子「……わ、わかった」

雄二「あの翔子が圧されてるだと……」

秀吉「凄い気迫じゃ……」

棗「あいこちゃん。負けたらダメだよ？」

愛子「約束は出来ないけど、頑張るよ。じゃあね、棗ちゃん」

絶対に勝ってね。お願いだから。

昴「採点が終わったぞ」

テストの返却が始まった。80点が合格ライン。あの三人が作ったテストだよ。なかにはかなりの意地悪問題もあったし……。わたしが受けたのは数学。返ってきたテストは……。

棗「うん。68点」

合格ラインに12点届かない。でもひでちゃんに言ったようにこれ



で終わりにしなければいい。

葵「そうがっかりすることないよ。なつめの数学の点数は元から高かったから少し、ていうかほとんどを嫌がらせ問題にしたしね。正直50点取ればいいんじゃない、レベルで作ったからね」

ホントにやるのが酷いよね。それで返ってきたテストで合格ラインを超えてたのはゆうくんとひでちゃんだだけだった。

ムツツリー二とあいこちゃんの勝負は引き分けが十三回で最終的にあいこちゃんが勝った。

それからしばらくしてお昼。どうやら自分達で好きに作っていいらしい。だから料理はわたしとアキとあいちゃんと兄さんで簡単にだけど作った。

アキがパエリアを作ってたけどね。わたしが汁物、スープの方が言い方はいいかな。あいちゃんと兄さんでサラダなどを作って、それを皆のところに運んだ。

雄二「ほう、美味そうだな」

愛子「ほんとだね」

秀吉「パエリアは誰が作ったのじゃ」

明久「僕だけど」

美波「アキが作ったの？ きつと見た目だけね」

棗「失礼な事言わないの。それにアキのパエリアは最高だよ。わたしもアキのパエリアにだけは勝てないし」

葵「そうだな。アキのパエリアはホントに美味いからな。久しぶりだから楽しみだ」

翔子「……それじゃあみんな、いただく事にしよう」

皆それぞれ食事を開始した。

康太「……………美味い」

秀吉「言ってた通り美味いのう」

雄二「確かに美味しいな」

明久「そういつてもらえてよかったよ」

美波「……………」

昴「どうした？ 手が止まってるけど嫌いなものでもあったか？」

美波「……………やる気なくすわね」

葵「あゝ。まあ、わからんでもない」

瑞希「あの～皆さん」

明久「どうしたの姫路さん？」

瑞希「私も家で作ってきたんですけど……」

そういつてみいちゃんがバックからタッパーを出した。

棗・明久・葵・昴「!!!!」

いま……、なんて言った？ 作ってきた？ 約束を破ったの？

棗「みいちゃん……。約束は？」

瑞希「だ、大丈夫です。お母さんが一緒でしたから」

みいちゃんのお母さん？ 大丈夫なんだろうか？ どうやら持ってきたのは少しだけみたいだけど……。

昴「明久、試しに食べてみてくれ……」

明久「きよ、拒否したい……」

葵「それは全員が一緒だろ……」

棗「そうだよね……」

もしこれがバイオ兵器だったら？

雄二「これが前に言ってたやつか？」

秀吉「見た目は普通じゃのう」

確かに見た目はね。でもその破壊力は普通じゃない。

愛子「何を警戒してるのかしらないけど……。なら僕が貰おうかな」

葵「ダメだよ愛子!! 友達が死ぬところを見たくない!」

愛子「そんな……。料理で死ぬって。流石にないでしょ」

クツ。経験した事がないからの樂觀。それは本当に危ない。

瑞希「そうですねよ。ちゃんと一人じゃなくてお母さんと作ったんですから大丈夫ですよ」

愛子「そう言ってるんだから大丈夫だよ。じゃあいただきます」

あいこちゃんの口にみいちゃんの作った物体が入りそうなところで横からアキが奪った。ナイスだよアキ。そしてそれを自分の口に入れた。って何してるのアキ!?

ボタン!

「「「……」」」

アキが口に入れてからすぐ効果が発揮された。やっぱりバイオ兵器だった。

棗・葵「アキ!!」

昴「おい、明久! 大丈夫か! しっかりしろ!」

みいちゃんの実力を知らない人は今のでわかったよね?

明久「昂……。僕は用事が出来たみたいだよ……。ちょっと……逝  
つて来る」

そしてアキから力がなくなったようなダランとなった。

昂「明久ー!!」

棗「今すぐ心臓動作と呼吸の確認をしてー!!」

葵「ダメだ!! 心臓が止まってるー!!」

昂「呼吸も止まってるぞー!!」

棗「今すぐに心臓マッサージと人口呼吸を!! 急いでー!!」

愛子「……なんか大変な事になってるんだけど」

翔子「……普通の料理でなんだろうなる?」

雄二「……姫路、あれに何を使った……」

瑞希「ふ、普通の材料ですよ……。えっと、食塩、硫酸……」

愛子「硫酸!？」

瑞希「それから、硝酸カリウム、クロロ酢酸ですね」

雄二「普通じゃねえよ」

翔子「……ちょっと待って、それって」

美波「どうしたの？」

翔子「……王水？」

雄二「なんだと!？」

秀吉「王水ってなんじゃ？」

翔子「……簡単に言うと、硫酸や塩酸より強力なもの」

愛子「……僕は吉井君のおかげで助かったのかな？」

雄二「そのかわり明久が逝きかけてるけどな……」

瑞希「あ、あはは……」

「「「笑い事じゃない!!!」」」

明久「……う」

昴「明久に反応があつたぞ!！」

アキに反応があつた! ホントによかつたよ。死ななくて……。

明久「う……。昴? 昴まで来ちゃつたの?」

葵「違うよアキ! 現実!」

明久「……僕は生きてるの？」

昴「そうだ生きてるんだ！」

それからしばらくして生きてる事を、生き延びた事を理解したアキは、本気で泣いた。気持ちはよくわかる。わたし以外の経験者もきつと同じ気持ちだろう。わたしは本気泣きのアキの頭を泣き止むまで優しく撫でてあげた。そしてみいちゃんに、今度約束を破ったら無理矢理にでもたべさせると脅しておいた。

第二十二話 勉強会？（後書き）

葵「まさか瑞希が作ってくるとは思わなかったよ……」

昴「まさかあの恐怖をまたくらうとは……」

棗「とりあえず誰も死ななくてよかったよ……」

葵「そうだな。次は第二十三話 勉強会？ だ。またな」



## 第二十三話 勉強会？

お昼の事件から数時間たって、今は夕食後ののほほんとした時間。

明久「昴、ちよつと気になってたんだけど」

昴「なんだ？」

明久「黒の腕輪つて確か予定になかった力なんだよね」

昴「そうだが？」

明久「じゃあ腕輪の力に名前？ みたいなものはないの？」

昴「は？」

雄二「お前はそんなことを気にしてたのか」

明久「だって気になるじゃないか。姫路さんのはたしか熱線とかあったよね。ムツツリー二のは名前かわからないけど加速でしょ。そういうのがあるから黒の腕輪はどうなのかと思っただよ」

昴「名前はないな。自分でつけるか、他の人につけてもらうしかないだろう」

葵「そうなの？ じゃあちよつと考えてみようかな」

棗「あおいちゃんノリノリだね」

葵「当然。出来ればいい名前にしたいしな」

そういつてあおいちゃんは腕輪の力の名前を考えるのを開始した。

葵「信頼、友情、愛、熱血、魂、覚醒……」

棗「あおいちゃん……、本気？」

葵「冗談に決まってるじゃないか」

そう笑顔で言ってからまた考え出した。

愛子「そついえばさ。棗ちゃんのクラスは清涼祭、何するの？」

棗「中華喫茶だね。あいこちゃんの方は？」

愛子「僕達の方はメイド喫茶だよ」

棗「へえ、メイド喫茶楽しそう。時間があれば行ってみようかな」

翔子「……ぜひ来て欲しい」

棗「メイド喫茶か……。やっぱりメイド服を着るの？」

愛子「そうだよ。ていうよりもメイド服着てなかったらただの喫茶店になっちゃうよ」

棗「そついえばそつだね」

秀吉「Aクラスも大変なんじゃない」

棗「わたし達もチャイナドレスを着ることになってるし」

秀吉「女子は大変じゃな」

あれ？　なんか違和感がある。なんだろう？　……ああ、そうか。  
ひでちゃんがまるで人事のように言うからだ。

棗「人事みたいに言ってるけどひでちゃんも着るんだよ？」

秀吉「なんじゃと！？　久多羅木、おぬしまでワシの性別を女じゃ  
と思っておるのか!？」

棗「何言ってるの？　女の子っぽく見えるけど男でしょ」

なにをわかりきった事を聞くかな。

秀吉「わかっておるならい……いや待つんじゃ。男だとわかってて  
着せるのかの？」

棗「ひでちゃん、重要なのは性別じゃないよ。これはもう似合うか  
似合わないかの問題だよ。だから着て一緒に売り上げを上げよう！」

秀吉「なんなのじゃ……。ちゃんと男と見てくれる者から、女装を  
勧められておる……。数少ない男と見てくれる人から……」

愛子「ま、まあ頑張って」

翔子「……きつといいことがある」

康太「……………撮影なら任せる」

ムツツリーニ、それはおかしい……………。

棗「あ、と。そうだ。ひでちゃん、ちょっと協力して欲しいんだけど」

秀吉「うむ？ 何を協力するんじゃ？」

棗「それじゃちょっと耳をかしてね」

そういつてわたしはひでちゃんに耳打ちをした。

秀吉「それは面白そうじゃが、いけるのかのう？」

棗「わたしからみていけると思う。ひでちゃんはどっと思っ？」

ひでちゃんは考えて、答えが出たみたい。

秀吉「問題がないのう」

棗「それで、そのことでひでちゃんに協力してもらいたい。どっ？」

秀吉「それなら協力するのじゃ」

ここにわたしとひでちゃんの協力が約束された。

愛子「なに？ なにか面白い話？」

翔子「……………私も気になる」

棗「そうだね……。清涼祭当日をお待ちくださいってところかな」

秀吉「そうじゃな」

棗「それでこれは問題なくすすむね。ただ後一つ問題が残ってるんだよね……」

翔子「……問題って？」

棗「清涼祭での設備の貸し出し申請の事なんだよね」

愛子「あれってほとんど断られないはずだけど」

設備の貸し出し申請……清涼祭でだけのものだけど、これは貸し出して欲しい物を用意されている紙に書いて自分のクラスの担任・教頭・学園長の許可を貰わないといけないもの。全員の許可を貰ってようやく貸し出して貰える。

翔子「……無理な要求したとか？」

棗「それはないよ。テーブル八個が無理な要求だとは思わないよ」

愛子「まあそれくらいなら問題ないはずだけど……その申請誰がしたの？」

秀吉「久多羅木じゃな」

翔子「……それはおかしい。Fクラスの数少ない常識人が出してるのに。条件も無理なものじゃないし」

数少ない常識人って……。まあ、事実常識人が少ないのは確かだから認めるけどさ……。

秀吉「そうなのじゃ。鉄人すら通っておるんじゃが。教頭はなんなんじゃろつかのう?」

棗「喫茶店だからやりたくないけど、テーブルをごまかすしかなかったし」

翔子「……棗、テーブル八個、Aクラスのから貸してあげる」

棗「いいの? しょうこちゃん達も必要な分しか申請してないんじゃないの?」

それは嬉しい提案なんだけどね。

愛子「大丈夫だよ。予備込みで申請してるからね」

秀吉「Aクラスが教師から睨まれたりせんかのう?」

翔子「……問題ない。クラス同士での貸し出しは何も言われていない」

棗「わかった。ありがとう。後でゆうくんに言うておくね」

翔子「……棗」

棗「なに?」

翔子「……頭撫でていい?」

棗「いいけど」

そういつたら、しょうこちゃんは頭を撫でた。

翔子「……小さくて可愛い」

！今なんかボソツととんでもない事言われたような気がする……。ま、まあ。いいかな。これで問題は全部クリアだね。後は喫茶店の売り上げと召喚大会を頑張ればいいだけ。

葵「決まった〜！」

棗「にゃ！？」

急に大声ださないでよ。驚いたじゃない。それでしょうこちゃん。なんでわたしは抱きしめられてるの？

秀吉「水無月。何が決まったのじゃ？」

葵「腕輪の力の名前だよ」

棗「……今までずっと考えてたの？」

葵「当然」

愛子「それでどんなのになったの？」

葵「天の裁きと名付けたよ」

棗「名前負け……って事はないか。あれだしねえ……」

葵「他にもいろいろ案があったんだけどね。悩んだ結果これになった」

明久「他にはどんなのがあったの？」

あ、アキだ。皆もこっちの話に参加するんだね。

葵「ほかには、稲妻キック」

棗「あの演出でキック？」

葵「神風」

雄二「それはそれでどうなんだ？」

葵「ダメだ、腐ってやがる」

昴「それは止めとけ。それにそれは台詞だ」

葵「どこへ行くこうというのかね？」

愛子「今度は城が空飛んでるやつかな？」

もういろいろだめだよ、あおいちゃん……。しかもピックアップしたのそこなの？ もっと有名な台詞があるでしょ？

明久「えー……」

康太「……これなら悩む必要がない」



瑞希「あおいちゃん。こういうところは相変わらずなんですな」

葵「こんな感じだね。ここから悩んで悩んで最初のにしたよ」

棗「……そつか、いい名前付けられてよかったね」

葵「ちなみに昴のも考えてみた」

昴「余計な事を……」

兄さん。小声じゃなくてはつきりいいなよ。まあ兄さんには同情するよ。

翔子「……どんな名前になった？」

葵「神の息吹」

昴「そんなの言ったら、イタイ人確定だな」

また小声ですか。でも同意します。

葵「なんだつたら他の案も聞く？」

昴「い、いや。いい」

こんな感じでのほほんとしながら残りの勉強会を過ごして、勉強会は終わった。それから数日、清涼祭が始まった。それとあおいちゃんから言われたんだけど、もしわたしの腕輪も黒の腕輪だったら各付けてあげるとのこと。もし腕輪を持つことになったら、黒の腕輪

だけは本気で遠慮したいと思った。

第二十三話 勉強会？（後書き）

棗「これで勉強会も終わりだね」

葵「次からは清涼祭だな」

昴「まあ、棗は喫茶を頑張れ」

棗「頑張るよ。それじゃ第二十四話 清涼祭開始の予定です。またね」

## 第二十四話 清涼祭開始

雄二「なんとか形になったか。テーブルもごまかさなくてよくなっ  
たしな」

今日は清涼祭初日です。清涼祭で喫茶店をするうえで問題だったテ  
ーブルも、勉強会の時にしようこちゃんとあいこちゃんが貸してく  
れると言ってくれたので、それで解決したしね。

棗「ムツツリー二、厨房の方はどう？」

康太「……………味見用」

そういつてムツツリー二は木のお盆を差し出してきた。そこにあっ  
たのはお皿に載った胡麻団子と陶器のティーセットだった。

秀吉「美味しそうじゃのう」

美波「土屋、これウチらが食べちゃっていいの？」

康太「……………（コクリ）」

瑞希「では、いただきますね」

わたし、ひでちゃん、みなみ、みいちゃんの四人で胡麻団子を食べ  
てみた。

棗「美味しいね」

瑞希「ホントに美味しいです。私も作ってみたいですね」

……みいちゃん、恐ろしい事言わないで……。あれを見てた人はみんな青い顔してるじゃない。

棗「みいちゃん」

瑞希「くーちゃん。だ、大丈夫ですよ。約束は守りますから」

それはよかったよ。

美波「表面はカリカリで中はモチモチで食感もいいし」

秀吉「甘すぎないところもいいのう」

食べた皆からは大絶賛だね。わたしもそう思うし。お茶も美味しい。さて、胡麻団子は残り一個。どうしようかな。

雄二「そんなに美味しいのか？ どれ」

そういつてゆうくんが最後の一個を食べた。

明久「ちょ、何やってるのさ雄二！ 僕の分がないじゃないか！」

棗「アキ、これでよかったら食べる？」

明久「いいの？ ありがとう。いただきます」

美波「ちょ、待ち……」

みなみが何か言おうとしてたけど、気にせずにアキは胡麻団子を食べた。

美波・瑞希「あぁー！！」

明久「うん！ 本当に美味しいね」

瑞希「吉井君どうして食べちゃったんですか!？」

明久「ん？ もしかしてさっきの胡麻団子は姫路さんが作ったの？  
だとしたら効果がないのはおかしいし……。いや、でも、なつめ  
が一緒にいたのなら……」

なんかアキが考えながらブツブツ言いはじめたね。大丈夫だよアキ。  
みいちゃんが作ったものじゃないから。

美波「そうじゃなくて、さっきアキが食べたのはなつめの食べかけ  
よ!！」

棗「それがどうかした？」

美波「だって間接キスになるじゃない!」

はあ？

棗「えっと、そんなことで騒いでるの？」

その程度で騒ぐなんてどうなの？ 直接するんなら流石に騒ぐかも  
しれないけど、この程度に騒ぐのはどうかと……。まあ、わたしは  
アキにしかしないつもりだけだね。

美波「そんなことじゃないわよ！」

瑞希「そんなことじゃありません！」

棗「全く、アキからもなんとかい……」

振り向いてアキを見たら、アキの顔が真っ赤だった。ていうか、アキもなんだね。

明久「え？ な、なに？ なつめ？」

棗「……なんでもないよ」

雄二「さて、開店時間も近い。女子達は着替えて来てくれ」

そして着替え中

さつきからなんか視線を感じる。なんだろう？ もしかして覗き？  
だったらけさないとね。覗いた人の……。とまあ、冗談は置いといて、見られてるのは確かなんだよね。しかも嫉妬とか、羨望とかいろいろ混ざったやつ。で、その見ている人がいるであろう場所を確認すると……。いた、なんか怖い雰囲気のみなみが。

美波「何で皆そんなに……」

みなみは何を言ってるの？

瑞希「美波ちゃんどうしたんですか？」





わたし達は教室に戻った。ムツツリー二が凄い勢いで写真を撮り始めるし、周りは騒ぎまくるして静かにするのが大変だった。例えば……。

『久多羅木さん、こっち向いて!』

『お願い久多羅木さん、付き合ってください!』

『バカヤロウ。是非俺と!』

とかこんな感じ。その時のみいちゃんともなみが凄く怖かった……。だって。

美波「ねえ。なんでウチらは何も言われないの?」

瑞希「さあ、どうしてでしょう。皆さんの声を聞いてたらわかるかもしれないよ」

美波「そうね。原因の解明といきましようか」

瑞希「原因をみつけたらお仕置きしましょうか」

美波「当たり前な事いわないでよ瑞希」

なんて会話を隣でしてるんだから怖いよホント……。とりあえずこんな事があったんだよ。

雄二「着替えが終わったか」

秀吉「よく似合っておるのう」

ちなみにみいちゃん、赤色のチャイナドレス、みなみは青色のチャイナドレス、わたしは黒色のチャイナドレスだよ。

雄二「……明久、いつたいどうした？」

どうかしたの？ 気になってアキを見てみたら。

明久「……」

なんかわたしをジッと見て、何かブツブツ言ってる。何を言ってるかわからないけど。

棗「アキ、どうしたの？」

明久「……」

反応がない。

棗「アキ、ホントにどうしたの？」

今度は肩を揺すってみた。

明久「はっ!!」

雄二「明久、やっと戻ってきたか」

棗「どうしたのアキ？」

明久「な、なんでもないよ!!」

なにかあったとしか思えない反応だね。まあ信じてあげるよ。

雄二「さて、明久も戻ってきたし、次だ。秀吉、これに着替えてくれ」

秀吉「やはり着ないといけないのかのう」

明久「当たり前じゃないか！ 秀吉は似合っただから！」

なんか納得いかないね。そういえばわたし、チャイナドレスの感想貰ってないような気がする。

秀吉「納得いかんのう」

そろそろ計画を始めようかな。

棗「ひでちゃん、準備出来てる？」

秀吉「出来てるぞい」

雄二「？ なんの話だ？」

秀吉「なに、明久にもチャイナドレスを着て貰おうと思ってのう」

明久「何言ってるのさ。僕が着たら店の悪評になるじゃないか」

棗「そんなことはないよ」

明久「またまた。そんな冗談を」

棗「大丈夫。絶対似合うから」

明久「似合わないって。それにもうチャイナドレスはないんじゃないの？」

秀吉「大丈夫じゃ。演劇部の衣装をかりてきたのじゃ」

棗「ということまでひでちゃん、後よろしくね」

秀吉「任されたのじゃ」

そういつてひでちゃんはアキの襟首を掴んで引っ張って行った。

明久「着るわけないじゃん！ ていうか振りほどけない！？ 秀吉  
ってこんなに力があつたの！？ くそ、離せー！！」

雄二「なあ、久多羅木。明久に着せて大丈夫なのか？ 下手したら  
さっき明久が言ったように悪評に繋がる可能性もあるんだが……」

棗「大丈夫だよ。戻ってくるのを待っててね」

ゆうくんは心配そうだけど、大丈夫だよ。それからしばらくしてひ  
でちゃんが戻って来た。

棗「うん。ひでちゃんやっぱり似合う」

秀吉「あまり嬉しくないのう」

美波・瑞希「……………」

雄二「明久はどうした？」

秀吉「そうじゃの。それでは主役の登場じゃ」

そう言つてひでちゃんはクラスのドアを開けた。そこには腰まである長い黒髪に黒のチャイナドレスを着たアキが立っていた。どうやら少し化粧もしてるみたいだね。はつきりいつて美少女にしか見えない。

明久「なつめ、これでどう？ 全く似合わないでしょ」

棗「何言ってるの？ 凄く似合ってるじゃない」

そうじゃなかったら、ゆうくんやムッツリーニが顔を赤くすることはないよ。

棗「ひでちゃん。いい仕事したね」

秀吉「うむ。ワシもここまでなるとは思わなかったのじゃ。美少女と言つても過言ではないのう」

明久「過言だよー!!」

もう今のアキを見て、その人が吉井明久だと思える人はまずいないくらいの出来だね。

秀吉「いやいや、あそこをみてるのじゃ」

そういつてた、ひでちゃんの指差した場所にいたのは、膝と手をつけて凄く落ち込んでるみなみとみいちゃんだった。その他の場所をみてみたら意識をとばしてる人がいたり、鼻血を出している人がいたり、前屈みの人がいたりとさまざまだ。

雄二「よ、よし。明久。そのまま接客しろ。俺が許可する」

明久「嫌だよ!! 何でこんな格好で……」

棗「アキ、ちょっと耳かしてね」

明久「どうしたの？」

棗「(これも中華喫茶の売り上げのためなんだから我慢しないとね)」

明久「(いや、でも、僕がこんな格好してたら……)」

棗「(大丈夫。それはクラスの反応を見ればわかるはず)」

明久「(もしかして、なつめもそう思ってるの?)」

棗「(うん。とっても可愛いよ)」

明久「(……わかった。やるよ。ところでなつめ)」

棗「(なに?)」

明久「(これって耳打ちするよんな話かな?)」

棗「(アキも同じでしょ。ノリノリでわたしに合わせて小声で話してるんだから)」

明久「(……………確かに)」

棗「ゆうくん。アキは了解してくれたよ」

ん？ もうゆうくんの顔は赤くない。順応いいね。

雄二「そうか。久多羅木とアキちゃ……………明久がいれば大丈夫だろう」

そうでもないみたい。目茶苦茶動揺してるね。

雄二「このレベルの高い美少女二人に、姫路、島田、秀吉がいるんだ。これは期待出来そうだな」

明久「なんかサラッと僕を女扱いしたよね」

雄二「いや、すまない。久多羅木の時は前もって準備してたから問題なかったんだが、まさか予想外に明久がこんなことになるから動揺してな。似合いすぎだろ」

康太「……………(コクコク)」

どうやらムツツリーニもゆうくんと同じ用に準備してたみたいだね。

明久「嬉しくない評価だよ。それとなつめをどんな風にみてたのさ？」

雄二「さ、さあ。おまえら復活しろ！ 清涼祭が始まるぞ」

明久「逃げやがったな」

稔「まあまあアキ。落ち着いて」

気にかけてくれるのは嬉しいけどね。



第二十四話 清涼祭開始（後書き）

昴「……………」

葵「どうした、昴？」

昴「明久はいいんだ」

葵「はあ？」

昴「棗に告白したやつ潰してくる」

葵「ちよ、待って！ 落ち着いて」

昴「離せー！」

棗「あ、あはは。えっと次は第二十五話 召喚大会一回戦 の予定です。またね」

## 第二十五話 召喚大会一回戦

棗サイド

棗「胡麻団子を二つと烏龍茶を二つですね」

今わたしはウエイトレスとして働いています。何て言うかウエイトレスが少ないですか？ アキとひでちゃんを女装させたけどそれでも五人だし……。もちろん男子のウエイターもいるけど、なぜかウエイトレスに声をかけてくるし。いや、なぜでもないね。しかも中華喫茶のウエイトレスは誰が一番かを決めるとか言い出しはじめたせいか、みなみとみいちゃんが妙に張り切ってるし。

明久「なつめ、そろそろ召喚大会の時間だよ」

棗「うん。わかった。すぐ行くよ」

雄二「秀吉、俺らもだぞ」

秀吉「うむ。わかったのじゃ」

美波「そういえばアキ達も大会にでるのよね？」

明久「？ そうだけど？」

その話ならしたよね？ なんだろう？

美波「あの時、聞いとくべきだったかな……。誰と幸せに行きたくの？」

明久「何の話？」

あれだね。如月ハイランドのペアチケット。結婚までをプロデュースするって言うやつだよ。一応回収が目的だから狙ってるのは確かだけど……。アキはどうするのかな？

美波「ペアチケットの話よ」

明久「ん〜。そうだね……。……なつめと行こうかな」

ええ！？ ほ、本気！？ いや、もちろん、これは本当の事が言えないから幼なじみのわたしと行くなって言っただけ、場を収めようとしてるんだと思うけど。わかってても嬉しいね〜。アキの好きな人って誰なんだろうね？ 気になるな。

瑞希「へえ〜。その話詳しく聞かせて欲しいです」

美波「そうね。坂本や木下じゃなくなつめだっただけ事も気になるしね」

明久「なんでそこで雄二が出てくるのさ。秀吉ならともかく」

秀吉「あ、明久。ワシはそんなことを言われても困るのじゃが……」

ひでちゃんも大変だね。ひでちゃんの認識はほとんどの人が女だからね。でもわたしは、ちゃんと男の子だっただけわかってるから元気を出してね。

雄二「たく、お前らは……、漫才してないでさっさと行くぞ。不戦敗なんてやってられないからな」

確かにそれもそうだね。

明久「早く行くよなつめ!!」

そういつてアキは、わたしの手を取って走り出しました。

美波「待ちなさい!!」

瑞希「待つてください!!」

アキも大変だね。

明久サイド

僕達は二人の鬼をなんとか振り切って、今、大会会場にいる。でもなんで、美波と姫路さんに攻撃されなくちゃいけないんだろう？僕何かした？ 何もしてないよね？ 理不尽な攻撃ばかりだし……。嫌われてるのかな？

棗「そういえば、一回戦の相手って誰かわかる？」

明久「いや、僕もしらないよ」

棗「そつかく。時間なかったから確認してなかったんだよね。ん、まあ、何とかなるよね」

明久「うん。たぶん、なんとかなるよ」

まあ、これで一回戦から雄二とかだったら、どうすんの？ って話

だけど。

数学教師「それでは一回戦を始めますので来て下さい」

棗「それじゃ行くっか」

明久「うん」

僕達是对戦相手を待った。ちょっとしたら対戦相手が来たけど……あの二人なんだ……。

小山「久多羅木さんが相手ね」

根本「……………」

根本君が少し怯えてるね。そして僕も今、少し怯えてるんだ。だって……僕の隣、なつめだね。なつめがもう臨戦態勢、下手すればそのまま攻撃を始めるんじゃないかって感じだし。

数学教師「えー。観客がいますが、緊張せずいつも通りでいいですよ」

どうやら先生は僕と根本君が緊張していると勘違いしてるんだね……。

数学教師「それでは始めてください」

小山「久多羅木さん」

棗「なに？ 小山さん」

小山「今日は久多羅木さんの幼なじみのバカがないみたいだけど  
どうしたの？」

小山さん。戦いの内容はそれでいいの？ まさかの舌戦だね……。  
それにさっき言ってたなつめの幼なじみのバカって僕の事だよ？  
僕はいるよ？ わからないの？ …… そういえば、中華喫茶で仕  
事をしてそのまま来たんだっけ。と、いうことは……。僕は黒髪の  
カツラをつけたままで、チャイナドレスを着ているわけで。

明久「チャイナドレス着たままじゃん……」

小山「ほら、どうしたの？ 幼なじみのバカは！」

ブチッ！

今何か切れる音したよね？ 僕は隣を見てみると……。

棗「アハッ  
」

物凄くいい笑顔で笑ってるなつめがいた。あの笑顔だけなら、ほと  
んどの人が見惚れてたかもしれないけど、そうもいかない。だって、  
なつめからよくわからない黒いものが出てるんだもん……。なつめ  
が怒ってるんだね。

根本「お、おい。もうやめろ。これ以上挑発するな」

小山「なんでよ。たかがFクラスでしょ。生身では負けたけど、召  
喚獣なら話は別よ。絶対あの時の事をやり返すんだから！」

小山さんとなつめに何があったんだろう？

棗「小山さん……前にも言ったはずだよ。アキをバカにするなって」

小山「ふん。バカな事は事実でしょう」

根本「どんどん勝ち目がなくなっていく……」

根本君、ご愁傷さまです。それと少し違うよ。もう既に勝ち目な  
かないんだよ……。

棗「オツケー。わかったよ。滅ぼしてあげる」

明久「なつめ、召喚獣で戦うだけにしてね」

棗「……善処するね」

ああ、心配だ……。

小山「たかがFクラスが調子に乗らないで。サモン」

根本「もう……。無理かな。サモン」

棗「わたし一人でやるよ。いいよねアキ？」

明久「もちろん」

今のなつめに、逆らうなんて選択肢が存在しないから。

棗「ありがとう。それじゃ、すぐに終わらせるよ。サモン」

そしてなつめが召喚して、僕も一応召喚した。この後ははやかった。なつめが先に動いて一瞬で終わらせた。Bクラス戦の再現だった。

数学教師「え〜。勝者。久多羅木、吉井ペア」

棗「アイツを見ていたくない。さっさと教室に戻ろう」

明久「わかったよ」

僕はなつめの頭を撫でながらFクラスに戻った。

秀吉サイド

雄二「さて一回戦だ。気合い入れていくぞ。秀吉」

秀吉「うむ。了解じゃ」

ワシらはこれから一回戦をはじめめるのじゃ。そういえば相手は誰かのう？

秀吉「雄二、一回戦の相手は誰なのじゃ？」

雄二「二年のBクラスのペアだ」

むう。初戦からBクラスかのう。これは大変そうじゃ。

数学教師「それでは一回戦を開始します。選手は来て下さい」

雄二「よし、秀吉行くぞ！」



秀吉「了解じゃ！」

うむ？ あれが対戦相手かのう？

真由美「がんばろうね。律子」

律子「うん」

対戦相手の女の子二人が頷きあったのう。微笑ましい光景じゃな。

数学教師「それでは始めてください」

真由美・律子「サモン」

相手の召喚獣は西洋の鎧に剣をもってるのう。

秀吉「ワシらもやるのじゃ」

雄二「そうだな」

秀吉・雄二「サモン」

数学 Fクラス 木下秀吉&坂本雄二 103点&179点

VS

数学 Bクラス 岩下律子&菊入真由美 179点&163点

秀吉「雄二の点数が高いのう」

雄二「秀吉も結構取れてるじゃないか」

秀吉「これも勉強会のおかげじゃな」

あの勉強会のおかげでワシもいくらか成績が上がったのじゃ。あれはなかなか大変じゃったが楽しかったのう。

真由美「律子！」

律子「真由美！」

真由美・律子「行くわよ！」

そういつて二人は同時に襲い掛かってきたのじゃ。息がピッタリじゃな。そして二人とも剣を振り下ろしてきたのじゃが、それをワシも、雄二も後ろに下がって避けたのじゃ。

雄二「いいチームワークだが、しょせんは女の子の仲良しごっこだな」

挑発しておるなあ。

律子「失礼ね！」

真由美「私達のチームワークは最強よ！」

それはどうじゃろう。久多羅木と明久のペアをみた事があるのじゃが、明らかに久多羅木、明久ペアの方が上じゃな。

雄二「さて秀吉、久多羅木や明久は初戦がBクラスが相手だが、問題なく勝ち進むだろう。俺達はどうする？」

秀吉「無論。こんなところで負けるつもりはないのじゃ」

実はこの召喚大会でやりたい事があるのじゃ。それは久多羅木や明久と戦ってみたいというものじゃ。普段は同じクラスだから戦う機会もないしこのう。あの二人に自分がどこまで通じるか試してみたいのじゃ。雄二もワシの目的をしっているのじゃ。

雄二「いい返事だ！ やるぞ秀吉！」

今度はワシから討ってでたのじゃ。雄二が点数の高い律子を、ワシがもう一人の方を担当する一対一で戦う事にしたのじゃ。

ワシは薙刀を上から振り下ろしたが簡単に避けられた。じゃが手を休めるつもりはない。距離を詰めて横に一降りしたら相手の召喚獣に当たったのじゃが、また距離をとられてしまったのじゃ。

数学 Fクラス 木下秀吉 103点

VS

数学 Bクラス 菊入真由美 142点

真由美「点数が低いからって油断は出来ないね」

秀吉「むう……。まさかこれほどダメージにならんとは……」

さっきのは当たったんじゃないかかすただけかろう？ そっいえば雄二の方はどんな状況なんじゃ？ そっちを見てみたら雄二が圧倒しておった。こっちも負けてられんこのう。

真由美「余所見？ 随分余裕だね」

秀吉「!!」

相手の召喚獣がもう剣を振り下ろしておるのじゃ！ 今から避けるのは……むりじゃな。ワシは薙刀で相手の剣をおさえたのじゃが、わずかに削られたのう。

秀吉「ここからは本気じゃ」

もちろん最初から本気じゃったが気持ちの切り替えに言ってみたのじゃ。それからワシは相手と打ち合ったり、回避したりとして戦って、しばらくして決着がついたのじゃ。

数学 Fクラス 木下秀吉 47点

VS

数学 Bクラス 菊入真由美 0点

雄二「秀吉、よくやった」

そう雄二は言ってくれたのじゃ。どうやら雄二の方は既に勝負がついていたようじゃのう。

数学教師「そこまで。勝者。木下、坂本ペア」

雄二「よし、秀吉。クラスに戻るぞ」

秀吉「わかったのじゃ」

ワシはこんなところで負けてられないのじゃ。

葵サイド

葵「さて始まったね。大会が！」

昴「テンション高いな」

葵「そういう昴だつてやる気満々だろ」

昴「まあな」

私はこの大会で手に入るペアチケットを目的に参加してるけど、他にも目的がある。ただ単純に楽しみたい。楽しむ時に楽しまないのは人としてどうかと思う。それに私は騒がしいのは大好きだ。祭とか最高だよな。

葵「そういえば一回戦の相手どこか知ってる？」

昴「たしか三年のAクラスらしいぞ」

葵「ふ〜ん。三年か。楽しめるかな？」

昴「どうだろうな。なにせバランスブレイカーだし」

葵「もうそれはいって……」

数学教師「一回戦を開始します。選手は来て下さい」

昴「呼ばれたな」

葵「んじゃまあ、行きましようか」

あそこにいる男二人が相手かな。

数学教師「では、始めて下さい」

葵・昴「サモン」

数学 Aクラス 水無月葵&久多羅木昴 882点&679点

VS

数学 Aクラス 南条薫&相川元気 299点&325点

試合は……あつという間に決着がついた。三年だというから少し期待したんだけどな。

数学教師「しよ、勝者。水無月、久多羅木ペア」

葵「なんかいまいちだな」

昴「確かにそうだな」

葵「これならなつめ達の方が強いんじゃないのか？」

昴「おお。そうだ。なら葵にいい情報だ」

葵「どうしたの？」

昴「棗と明久が組んで大会に参加してるぞ」

葵「ホントに!!」

昴「ああ。ただブロックが違うみたいだな。当たるのは決勝だろう」

葵「なつめとアキ、あの二人と戦えるんだ。楽しみだねえ」

昴「棗達が決勝に来る前に負ける可能性もあるがな」

葵「大丈夫だよ。なつめ達なら」

この大会、更にやる気が出てきたよ！

第二十五話 召喚大会一回戦（後書き）

棗「あおいちゃんと兄さんも一回戦突破したんだね」

昴「当然だな」

葵「相手にならなかったな。なつめも勝ったんだよね」

棗「うん。そうだよ」

昴「でもあれはどうなんだ。ブチ切れ状態じゃないか」

棗「だってアキがバカにされたんだもん……」

葵「なつめ頑張れよ」

棗「？」

葵「それとこれからも勝ち進んでね」

棗「あはは。頑張るよ。それじゃ次は第二十六話 営業妨害の予定です。またね」



第二十六話 営業妨害（前書き）

バカテスらしさって出すの難しいよね。

PV55000

ユニーク10000

突破です。

見ていただきありがとうございます。

## 第二十六話 営業妨害

わたし達は一回戦が終わって今教室に向かって歩いていく。頭を撫でられながら。ホントはもう機嫌はなおってるんだよね。でも撫でられるのが気持ちいいから機嫌の悪い振りをしてるんだよ。そんな状態で教室に向かってたらムツツリーニと遭遇した。

棗「ムツツリーニ、どうしたの？」

明久「そうだね。お店の方は大丈夫？」

康太「……………その店の事で話がある」

棗「お店がどうかしたの？」

康太「……………営業妨害が発生した」

そんなことする暇な人がいるの？

明久「学園祭の出し物で営業妨害？ そんなのいるんだね……………」

棗「それで、どんな人？」

康太「……………うちの学校の三年で、坊主とモヒカンの男」

明久「スッゴイ特徴だね」

本当だね。それならすぐにみつけれそうだ。

棗「ムツツリーニ。今の情報をゆうくんにも伝えてくれる」

康太「……………（コクリ）」

ムツツリーニは頷いてから、ゆうくんのところに行った。

明久「それじゃあ、急いで教室に戻ろうか」

棗「うん。営業妨害してるなら、その対応しないといけないし」

わたし達はFクラスに走って戻った。

明久「なんか教室が賑やか、というよりうるさいね」

棗「まだ営業妨害してる人がいるって事でしょ」

わたし達は教室についた。妨害者は確かモヒカンと坊主だったね。さがそうと思っただけど、さがす必要もなかった。だって大声で文句言ってるもん……………。

常村「ここの料理は不味いなー」

夏川「全くだ。よくこんなので営業してるよな」

常村「なんで豚の餌を飲食店で扱ってんだよ」

夏川「最低のFクラスだからだろう。豚の餌くらいしか出せないんだらうよ」

あー、それ以上言わないほうがいいと思うな。他のお客が凄く怖い

顔で睨んでいますよ？

棗「……アキ、ちょっと行って来るわ」

明久「大丈夫なの？」

棗「大丈夫。時間を稼ぐだけだから」

明久「何かあつたら僕も動くからね」

棗「うん。その時はよろしく」

わたしは迷惑二人組みに向かって行った。

棗「お客様。周りのお客様のご迷惑になりますので騒ぐのはお控えください」

夏川「ああ？ なんだ？」

常村「俺らがどうしようが勝手だろうが」

棗「そう言う訳にもいきません。ただでさえ他のお客様のご迷惑になっっています」

夏川「ていうかさー、こいつ可愛くね？」

常村「だよなー」

舐めるようにみないで欲しいんだけど。気持ち悪い。この二人どうしようかな？

夏川「こんな不味い物しか出せない店の店員なんかしてないでさ、俺らと祭を楽しもうぜ」

常村「そりゃいいなー。どうだ、店員さん。こんな不味い店ほっといてよ」

もしかしてナンパされてる？ おっかしいな。何がどうなってこんなことに……。

棗「お断りします。わたしにも選ぶ権利がありますので」

夏川「なんだ？ 俺らじゃ不満だって言いたいのか？」

不満しかないよ。

常村「そうだぜ。俺ら以上のやつなんていないんだからな」

これ以上ないと言わんばかりのドヤ顔で言われても……。そんな自信はどっから出てくるんだろう？ ……しょうがない。少し挑発でもしてみようかな。

棗「たいした自信ですね。一度鏡で、自分をよく観察した方が賢明かと思えますよ。ナルシストさん達」

夏川「てめえ、調子に乗ってんじゃねえぞ！」

常村「下手にでてりゃ調子に乗りやがって！」

ナルシストさん達が激昂しながら席から立ち上がったよ。何て言う

か、恐ろしく沸点が低いね。さっきの俺ら以上はいない、は正しいと判断したよ。ナルシストさん達より沸点の低い人はいないと思うもん。さて、この二人はどうしようかな？ 今にも殴りかかってきそうだし。……ゆうくんが来るまで待つてようかと思っただけ、潰しといた方がいいかな。……これ以上店に迷惑かけて欲しくないし、滅<sup>や</sup>ろうか。

夏川「グペツ」

ん？ 坊主のナルシストが奇妙な声を上げながら吹っ飛んでいった？ わたしまだ何もしてないけど……。

雄二「代表の坂本雄二です。何か問題でもございましたか？」

ああ、ゆうくんが来たんだ。なら大人しくしようかな。……いや、更に追い込む？ ゆうくとアイコンタクトで確認したらアキの後ろに隠れて怯えた振りをしてくれとの事。言われた通りアキに駆け寄って、後ろに小さくなって服を少し握って隠れた。

常村「……連れが殴られたんだが」

雄二「それは私のモットーの『パンチから始まる交渉術』に対する冒涇ですか？」

斬新な交渉だね。

常村「ふ、ふざけんなよこの野郎……！ 何が交渉術ふざけあつ！」

雄二「そして『キックでつなぐ交渉術』です。最後に……その前に」

ん？ どうしたんだろう。

雄二「お客様の罪を確認しましょうか。アキちゃん、このお客様は何をしていた？」

ゆうくんがこつちをむくとお客もこつちを向いた。

明久「あ、はい。そこのお客様はお店へクレームを言っていました。それと同時に今、当店でお食事をされていたお客様を侮辱されました。最後に……」

アキがわたしをみて。

明久「こちらのウェイトレスをお店の事を理由にセクハラをしようとし、うまくいかなかったら今度は暴力で言うことを聞かせようとしていました」

今のアキの発言を聞いてお客からも声が上がる。その全部が、わたしをなぐさめるものやナルシストさん達を避難するもの。どうやらお客はゆうくんが殴る前のわたしのやりとりはみてなかったみたいだね。

雄二「これが、お客様の罪です。では最後の交渉を始めましょう」

夏川「ち、ちなみにどんな交渉をするんだ」

雄二「たいした事はありませんよ。『プロレス技で締める交渉術』です」

常村「わ、わかった。こちらはこの夏川を交渉に出そう」

夏川「ちょっと待てや常村！ お前、俺を売ろうと言つのか！？」

雄二「それで常夏コンビとやら、交渉を続けるか？」

なるほど、常夏コンビね。ナルシストさん達より言いやすいね。

常村「い、いや、もう充分だ。退散させてもらおう」

雄二「そうか。それなら……」

ゆうくんは坊主の方にバックドロップをきめた。うん。綺麗にきまつたね。

雄二「アキちゃん、鉄人を呼んできてくれ」

常村「鉄人だと！！ 冗談じゃない！！」

そういつて常夏コンビは逃げ出した。三年だから西村先生はあまり知らないと思つてたけど、そうでもないんだね。まあこれで問題解決。お客からはなぜか歓声があがってるし。

雄二「お客様方、お騒がせしてしまい大変失礼しました。問題は解決しましたので、ごゆっくりとおくつろぎください」

ゆうくんがちゃんと代表やってるよ。なかなかレアかもしれないん？ なんて教頭がいるんだろう。あんまりこういう行事には関心がないって噂だけど……。何もたのんでないし。あ、席を立て、出て行った。いったい何しに来たの？



## 第二十六話 営業妨害（後書き）

昴「営業妨害とは……暇人だな」

葵「ゆるせないな」

棗「まあまあ落ち着いてあおいちゃん。一応は解決したんだから」

昴「しかし雄二の交渉術は新しいな」

葵「確かに聞いた事ないな。どうかと思うし」

棗「さて、では次は第二十七話 召喚大会二回戦 の予定です。  
またね」

## 第二十七話 召喚大会二回戦

棗サイド

営業妨害が逃げ出してからまたお店でウェイトレスとして働いてます。営業妨害のせいで少しお客の入りが悪くなってるのか、それほどいい。

明久「なつめ、大会に行くよ」

ん。もう時間なんだね。

棗「うん。わかった。ちょっと待ってね。……それじゃあ大会に行ってくるから後よろしくね」

わたしはお店を皆に任せて、大会会場に向かった。

葵サイド

さて、これから大会の二回戦だね。次の相手はどんなのかな。せめて私の点数をみても驚かないような相手がいいな。

昴「いや、それ無理」

！！ あつれ。考えてること読まれた？

昴「葵の行動は結構単純だ。そう難しいことじゃないだろ」

葵「はあ、全く、単純とは言ってくれるじゃない。まあ否定はしな

いけど」

昴「しないのかよ」

葵「そんなことはいいのさ。で、次の相手ってわかる？」

昴「さあな、他の試合を見たわけじゃないから、どこが勝ち残ったかわからないし」

まあそんなの、実際に戦う時になればわかるよね。

物理教師「それでは第二回戦を始めますので選手は来てください」

昴「それじゃあ」

葵「ここも」

葵・昴「サクッと終わらせようか」

私達が戦いの場に行ったら対戦者らしき二人組がいた。

物理教師「では、召喚大会二回戦を始めてください」

葵「昴、相手は何年だ？」

昴「たぶん三年だな」

葵「よく三年とあたるな」  
相手が召喚獣を召喚した。

物理 Cクラス 会津坂下&勅使河原司 632点&134点

葵「Cクラスじゃありえない点数だな」

昴「Aクラスでも滅多にみない点数だよ。まあ得意科目なんだから」

会津って言うのは得意科目だからあーだこーだなんか言ってる。

葵「確かに高い点数だけど、まあ大丈夫だな」

昴「ああ、問題はないだろ。それじゃあ……」

葵・昴「サモン」

物理 Aクラス 水無月葵&久多羅木昴 893点&547点

VS

物理 Cクラス 会津坂下&勅使河原司 632点&134点

前はすぐに終わっちゃったし、今回はちょっと時間かけて倒してみようかな。

葵「昴、会津ってうちの私がやるよ」

昴「マジか。てことは俺はあっちね。わかった、任せる」

私は召喚獣を動かして会津の召喚獣に向かって行った。どうやら迎え撃つつもりなのか攻撃をしてきたけど、その攻撃を避けて相手の右腕をハリセンで叩いた。そのあとは、反撃する暇を与えず左腕、右足、左足と攻撃して最後、頭にピコハンで全力で叩いて、相手の召喚獣は消滅した。

物理 Aクラス 水無月葵&久多羅木昴 893点&547点  
VS

物理 Cクラス 会津坂下&勅使河原司 0点&0点

物理教師「勝者。水無月、久多羅木ペア」

葵「今回はちょっと遊べたね」

昴「お前はそうだろうな」

葵「あー。やっぱり一撃？」

昴「ああ……」

次は強いのが来るといいね。

雄二サイド

秀吉「次の相手はどこかわかるかのう？」

雄二「ああ、トーナメント表を見る限り二年のBクラスだな」

秀吉「よくBクラスとあたるのう」

物理教師「第二回戦を始めますので選手は来てください」

雄二「うし。行くか」

秀吉「うむ。行くかのう」

さて、相手は……あれか。

『相手はFクラスだし余裕だろ』

『そうよね。さっさと片付けよ』

物理教師「それでは始めてください」

『『サモン』』

雄二・秀吉「サモン」

物理 Fクラス 坂本雄二&木下秀吉 187点&101点

V S  
物理 Bクラス 金田瞬&藍田京子 158点&155点

雄二「よし、秀吉。やるぞ」

秀吉「了解じゃ」

俺と秀吉は召喚獣を動かした。俺の狙いは男の方。まずは挨拶でパ  
ンチを一回撃ってみたんだが……。

雄二「はあ？」

何の抵抗もなく喰らった！？ コイツまさか素人か？ だがBクラ  
スには戦争を仕掛けたから経験が無いなんて事は……あるな。久多  
羅木がキレた状態で初勝負なら何も出来なかったはずだし……。ま  
あいい、好都合だ。下手に慣れられる前に片付ける。そのあと俺は、  
ひたすらただ殴るだけだった。そこに細かい操作はない。それでも

片付けられた。

雄二「さて、こっちは終わりだな。秀吉は……そろそろ片が付くか」  
それから少しして。

物理教師「そこまで、勝者。坂本、木下ペア」

雄二「今回は楽しかったな」

秀吉「そうじゃのう」

これであと少しで秀吉は目的に辿りつくわけだ。しかしここからは大変だぞ。トーナメント表を見る限り、次はあいつらだ。それに秀吉の目標の前にはとんでもなく高く分厚い壁があるからな……。

棗サイド

棗「お店は大丈夫かな？」

明久「そこまで妨害する暇な人はいないんじゃない」

棗「だいたいけど」

アキの言ってる事が普通の意見なんだろうけど、なんか引つかかるんだよね……。ん。いや、今は考えるのはやめよう。それに何かあっても、アキとゆうくんがいるから大丈夫だよな。

物理教師「それでは二回戦を始めます。選手は来てください」

今度は女の子の二人組が相手みたいだね。

美紀「アキちゃん!!」

棗「アキ、知り合い？」

明久「いや、知らないけど」

それだと、凄いと云った方がいいのかな……？ 前にも言っただかも知れないけど今、アキは女装をされていて、男のアキとはわからない完成度なのにわかるなんて……。

美子「ちよつとたまちゃん。落ち着こうよ」

美紀「そうだよな。うん。落ち着くよ。アキちゃん」

明久「なんですか？」

美紀「この服を着てみない？」

そういつて、たまちゃんと言われてた人はどこからかわからないけど服を取り出した。えーと、メイド、ナース、スクール水着、他にもいろいろいる。……いや、待とうよ。たまちゃんとやら。アキにメイドやナースならありだけど、スクール水着は完全にアウトだから。

棗「そうだね、メイドとナースなら似合うかもね」

明久「なつめも!? 絶対に着ないからね!？」

美紀「そんな恥ずかしがらないで! アキちゃんなら絶対に似合う



から！」

明久「なんで男の僕にそんなのを着せようとするの!?!」

美紀「なにを言ってるのアキちゃん! この荒廃した地に降り立った唯一の癒しのアキちゃん以外に誰が着るの!」

あの一、たまちゃんとやら、なんか暴走してませんか……?」

明久「絶対に着ない! そして僕はいつたいなんなんだ! 僕と癒しは絶対イコールにはならない!」

わたしはアキは癒しだと思うよ。

美紀「いいえ。アキちゃんは癒しです! そしていづれは坂本君と……」

明久「話が飛んだ! なんでそこで雄二が出てくるんだ! それと雄二と何だつてのさ!?!」

棗「勉強会の時に言ってた事は本当だったんだね……」

明久「なつめまで……! 誰か助けてください!」

うん。たまにはアキをいじらないとね。しかしたまちゃんって人、結構危ないかも……。

棗「あなたのパートナー……いつもあんな感じなの?」

美子「ううん……はじめてみた……」

なんかどうしたらいいかわからないって顔してるね。

物理教師「あの、もう始めていいでしょうか？」

棗「はい、お願いします」

美子「はい、私も大丈夫です。ほら、たまちゃん正気に戻って」

物理教師「不安もありますが、始めてください」

棗・明久・美子・美紀「サモン」

物理 Fクラス 久多羅木棗&吉井明久 241点&136点

VS  
物理 D、Eクラス 玉野美紀&三上美子 135点&93点

相手の召喚獣が現れた。玉野さんの召喚獣は刀を持っていて、三上さんの召喚獣は貫頭衣に本を持っている。

美紀「行くよ、アキちゃん」

玉野さんがアキに突っ込んで行った。それじゃあ、わたしは三上さんの方をやるのかな。さて、三上さんはそれほど点数が高いわけじゃないけど、どんな攻撃をしてくるかわからないから、危険と言えば危険なんだよね。いままで、武器が本の人なんて見たことないし……。

美子「来ないの？ だったらこっちから行くよ」

三上さんの召喚獣の周りに三つの光の球が現れた。何をするつもりなんだろう？ もう少し観察してたら、三上さんの召喚獣が手を横に振った。そうしたら光の球がわたしの召喚獣に向かって飛んできた。

棗「て、飛んできたー！？」

わたしはそれを全部避けた……けど、なぜか光の球と当たった。おかしいな。確かに全部避けたはずだけど……。

美子「まだまだ行くよ！」

そういつて三上さんは第二射を撃ってきた。今度は余裕が出来るくらいに避けた。それでさっきの被弾のからくりがわかった。あの光の球、ただ飛んでくるだけじゃなくて追尾性能もあるみたいだね。遠距離で追尾ありね。もうだいたいネタはわかったはずだし、そろそろやりましょうか。わたしは召喚獣を動かしたけどそう簡単には近づけない。もうたくさん撃ってくる。避けながら近づくのは大変だ。ここはアキと協力してなんとかしよう。そう思っアキの方を見たら……。

美紀「アキちゃん。わたしが勝ったらメイドやナースを着てもらいますからね！」

明久「絶対嫌だ！ なつめ手伝ってー！」

やばい。アキが圧倒されてる。召喚獣の操作でアキを圧倒するなんて、やっぱり暴走してると強くなるもののかな？ しかしそうなるかどうか？ アキの助けは借りられないし……。いや、三上さんの点数はそんなに高くないし……。よし！ ダメージを喰らっても

いいから速攻で突破する。そしてわたしはダメージを気にせずにつ込んだ。三上さんに近寄り足を払って、倒れた召喚獣を掴んでアキを襲ってる玉野さんの召喚獣に投げつけた。結果、玉野さんと三上さんの召喚獣はバランスを崩して倒れた。倒れたところをわたしとアキで袋にして相手の召喚獣は消滅した。

物理 Fクラス 久多羅木棗 & 吉井明久 137点 & 46点

VS

物理 D、Eクラス 玉野美紀 & 三上美子 0点 & 0点

美子「そんな……」

物理教師「勝者。久多羅木 & 吉井ペア」

なんとか二回戦も勝てた。次からはまた相手が強くなるんだし大変だね。

でも、目指せ優勝！ だね。

## 第二十七話 召喚大会二回戦（後書き）

葵「なんか作者が玉野で結構悩んだみたいだぞ」

昴「なんでだ？」

棗「たしか玉野さんの召喚獣の装備どうするって悩みだったかな」

葵「ああ。原作では刀使ってるし、かと思えば杖持って三角帽を被ってるのもあるしで悩んだらしい」

昴「なるほど」

棗「まあ、そんなことがあったんだよ。それじゃあまた次回です。またね」

## 第二十八話 小さなお客様

召喚大会二回戦が終わり現在Fクラスの教室にいます。

秀吉「久多羅木に明久、二回戦はどうだったんじゃ？」

明久「なんとか勝てたよ」

棗「凄くギリギリだったけどね」

秀吉「うぬ？ お主らでギリギリだったのかのう？」

棗「なんていうか……」

明久「いろいろ危ない人だったよね……」

あれはホントに何だったんだろう……。欲望に忠実というかなんというか。

明久「そういう秀吉達はどのなの？」

秀吉「安心するのじゃ。もちろん勝ち進んでおるぞ」

それはよかったよ。チケットの回収をしないといけないからね。

棗「んつと……、なんの疑問もなく話してたけど、お店にお客がないんだけど……」

お店にお客が一人もない。

秀吉「いないからゆっくり話せるのじゃろ。……とまあ、冗談は置いていて、ワシも大会から戻ってきた時には既にこんな状況だったのじゃ」

棗「ムツツリーニ。あれからまた営業妨害でもあったの?」

康太「……………いや、営業妨害は発生していない」

明久「じゃあ、なんでこんな事になってるのさ?」

棗「ここじゃなくて、他の場所でうちの営業妨害してるのかもね」

もしそうなら、なるべく早く解決しないと。

棗「ゆうくんは?」

秀吉「トイレに行っておるぞ」

明久「なら待つしかないね」

噂がどこから流れてるかわかればいいんだけど……………。

「お兄さん、すみませんです」

雄二「いや、気にするな。ちびっ子」

葉月「ちびっ子じゃなくて葉月です」

ゆうくんが戻ってきたみたいだね。なんか女の子の声が聞こえたけ

ど？ 葉月？ ん？ どこかで聞いたような……。

秀吉「雄二が戻ってきたようじゃな」

明久「そうみたいだね。なつめ、さっきの声に聞き覚えがあるんだけどなんだっけ？」

棗「ごめん、わたしも思い出せない」

なんかこう……思い出しそうなんだけど……。

雄二「んで、探してるのはどんなやつだ？」

教室のドアが開いたら、そこにはゆうくんと小柄な女の子がいた。

『お、坂本。妹か？』

『可愛い子だな。ねえ、五年後にお兄さんと付き合わない？』

『俺はむしろ、今だからこそ付き合いたい』

二人はあつという間にクラスの皆に囲まれていた。まあ、お客さんがいなくて暇なんだろうね。それと一番最後の人は黙ってようか。

葉月「葉月はお姉ちゃんとお兄ちゃんを探してるです」

雄二「お姉ちゃん？ お兄ちゃん？ 名前はなんて言うんだ？」

葉月「あう……。わからないです」



雄二「？ 家族の姉や兄じゃないのか？ それなら、なにか特徴は？」

へへ。ゆうくんって意外と優しいんだね。その優しさを少しでも、アキにやってあげて欲しいもんだよ。アキが騙されて怪我するなんて事はよくあるし。

葉月「えっと……バカなお兄ちゃんでした！」

ごめん葉月ちゃんって子。その検索ワードじゃ、ヒットするのが多過ぎてわからない。ゆうくんは周りを見渡して。

雄二「沢山いるんだが」

そうだよね。このクラスのほとんどが対象になるね。

葉月「えっと、じゃあ……」

雄二「まだ特徴があるのか？」

葉月「はいです！ 小さいお姉ちゃんと優しいお兄ちゃんでした」

雄二「優しいお兄ちゃんて該当するやつは知らないが、小さいお姉ちゃんて該当するやつは……久多羅木だな」

え？ わたし？

稔「確かにわたしは小さいけど、わたし並に小さい子の知り合いは確かないよ？」

葉月「あ！ 小さいお姉ちゃんです！」

そういつて葉月ちゃんはわたしに駆け寄って抱きついてきた。

雄二「久多羅木と同じくらいの小さな知り合いはいないんじゃないかなかったのか」

棗「そのはずなんだけど……。って、あの時の子かな。人形をプレゼントした時の」

葉月「はいです」

満面の笑顔で答えてくれた。うん、いい笑顔だね。ん？ なんだろう。葉月ちゃんがわたしに抱きついたまま周りを見てる。何か探してるのかな？

棗「葉月ちゃん、どうしたの？」

葉月「優しいお兄ちゃんがいなくて」

ん？ ああ、アキだね。

棗「優しいお兄ちゃんだね。ちょっと待ってね。アキ、来て」

明久「どうしたの、なつめ？」

アキがわたしの隣にたった。

葉月「……お兄ちゃん？」

明久「なんで疑問形なの？」

それはそうでしょ。

棗「自分の格好を見てみればわかるよ」

アキは言われた通りに自分の格好を確認して……。

明久「そうか……。女装してたんだっけ……」

アキがなぜか知らないけど落ち込んでる。

葉月「……もしかしてバカなお兄ちゃんですか？」

葉月ちゃんはわたしに確認してきた。

棗「そうだよ。あの時のバカなお兄ちゃんだよ」

葉月「でも、なんで女の子の格好してるんですか？」

棗「バカなお兄ちゃんの趣味だよ」

明久「そんなわけないでしょ!!」

雄二「明久、無理に否定しなくてもいいぞ。皆お前が、女装が趣味なのは知っている」

おお、ゆうくんも乗ってきた。

明久「僕に女装の趣味はない!!」　しかも周知の事実のように言う

な！！」

雄二「なんだと？ 明久が周知なんて言葉を知っていたのか……」

ゆうくん、それはバカにし過ぎ。

明久「……雄二は放つといて、なつめ。その子は誰？ 知り合い？」

葉月「忘れちゃったですか？」

明久「忘れたというか……、会ったことあったっけ？」

あゝあ。地雷踏んだね……。

葉月「バカなお兄ちゃんのバカ！ バカなお兄ちゃんに会いたくて、葉月、『バカなお兄ちゃんを知りませんか？』って聞きながら来たのに……」

雄二「明久……じゃなくて、バカなお兄ちゃんがバカでごめんな？」

秀吉「そうじゃな。バカなお兄ちゃんはバカなんじゃ。許してやってくれんかのう」

棗「バカなお兄ちゃんはバカだからね。思い出すまでもうちよっと我慢して付き合っただけでね」

わたしは抱きついてる葉月ちゃんの頭を撫でてあげた。

明久「なんなんだ……？ このかつて無い、バカの連呼は……。しかもなつめにまで……」

葉月「でもでも、バカなお兄ちゃん、葉月と結婚の約束もしたのに」  
あはは、あったね。そんなのも。でもあれって、約束って言うのかな？

美波「瑞希！」

瑞希「美波ちゃん！」

美波・瑞希「殺るわよ！」

明久「ごぶあ！」

みなみとみいちゃんはまたなんだね……。止めに行きたいけど葉月ちゃんに抱きつかれてて行けないし。

美波「瑞希。そのまま首を真後ろに捻って。ウチは膝を逆方向に曲げるから」

瑞希「こ、ことうですか？」

みいちゃんがアキの首を捻ってる……。あれ、ホントに死んじやうよ。

明久「ちよつと待って！ 結婚の約束なんて、僕は全然……」

葉月「ふえええん！ 酷いです！ ファーストキスもあげたのに！」

そんな事もあったね。

秀吉「久多羅木は落ち着いておるがいいのかのう」

棗「？　いいつてなにが？」

秀吉「明久を明らかに狙ってるのが増えたみたいじゃからな」

棗「ああ、そのこと。それなら大丈夫だよ」

雄二「たいした自信だな」

自信とかじゃないけどね。

美波「坂本は包丁を持ってきて。五本あれば足りると思う」

……これ以上自由にさせるのは危なそうだね。

棗「みなみ。それ以上やるならわたしも動くよ？」

美波「なつめが動いたらなんだって言うの？」

棗「今からみなみがアキにやろうとしていることを、みなみにやってあげる」

美波「嫌よ！　ウチが死ぬじゃない！」

棗「それがわかってやろうとしてるんだ。ふぐん。アキはよくて自分はダメなんだ。随分自分勝手だね」

本当にみなみは……。こんなことをしようと思わなくなるように洗

の……もとい、教育した方がいいかな？

棗「今すぐやめるように。じゃないと本当に実行するよ？」

美波「……わかったわよ」

みなみはしぶしぶだけど離してくれたね。あとは……。

棗「みいちゃんも離してね」

笑顔で言ってあげた。

瑞希「わかりました」

なんでみいちゃんはここまでFクラスに染まつちやっただかな？

明久「ありがとう。助かったよ、なつめ」

棗「どういたしまして。それとアキ、ホントにこの子覚えてないの？」

明久「……思い出すための情報が欲しい」

棗「去年の春頃、人形を買ってあげたでしょ」

明久「去年の春、人形……」

一所懸命悩んでるね。

明久「……おお。思い出した。あの時の人形の子か！」

葉月「人形の子じゃないです。葉月です」

明久「そうだね、葉月ちゃん。それにしても、よく僕の学校がわかったね？」

葉月「お姉ちゃんとお兄ちゃんがここの制服を着てましたから」

美波「あれ？ なつめとアキって葉月と知り合いなの？」

明久「去年ちよつとね。美波こそ葉月ちゃんを知ってるの？」

美波「知ってるもなにも、ウチの妹だもの」

棗「へえ。そういえば似てるね。全く気付かなかった」

瑞希「吉井君はずるいです……。どうして美波ちゃんとは家族ぐるみの付き合いなんですか？ 私はまだ両親にも会ってもらってないのに……。もしかして、実はもう『お義兄ちゃん』になっちゃってたり……」

やっぱりみいちゃんはFクラスに染まってるな。

雄二「ところでこの客の少なさはどういう事だ？」

わたしもそれは知りたいね。

葉月「そういえば葉月、ここに来る途中でいろいろな話を聞いたよ」

棗「どんな話？」



わたしに抱きついたらままの葉月ちゃんに優しく聞いてみた。

葉月「えっとね、中華喫茶は汚いから行かない方がいい、って」

第二十八話 小さなお客様（後書き）

棗「今回は葉月ちゃんの登場だったね」

葵「そうだな。しかし今回は見事に出番がなかったな」

昴「まあ、次に出番があるらしいぞ」

葵「なら、いいのかな。そんじゃ次回もよろしくね」

## 第二十九話 常夏の終わり

葉月ちゃんがどこかで聞いた噂を教えてくれた。

雄二「ふむ……。例の連中の妨害が続いてるんだろっな。探し出してシバき倒すか」

明久「例の連中って、常夏コンビ？　そこまで暇じゃないでしょ」

雄二「どうだかな。ひとまず様子を見に行く必要があるな」

そうだね。そして場合によっては……。

棗「噂がどれくらい広まってるのか、確認もしたいしね」

明久「結構な勢いで広まってる可能性もあるしね」

葉月「お姉ちゃん、お兄ちゃん。葉月と一緒に遊びにいこ」

葉月ちゃんは抱きついたらまま言うってくるけど、ちょっと難しいよね。今、問題が何もなければそれでもいいんだけど。……ていうか、いつまで抱きついてるの？

明久「ごめんね、葉月ちゃん。お兄ちゃんはどうしても喫茶店を成功させなくちゃいけないから、あんまり一緒に遊べないんだ」

葉月「む。せっかく会いに来たのに」

葉月ちゃんが不満顔だ。ん。

雄二「それなら、ちびっ子も連れて行けばいい。飲食店をやっている他のクラスを偵察する必要もあるからな」

棗「そうだね。今から一緒に遊びに行こうか」

葉月「うん」

不満顔が満面の笑みになったね。

康太「……………島田、姫路、秀吉、雄二も行って来るといい」

秀吉「うむ？ いいのかのう？」

康太「……………どうせ客がない。なら休める時に休むべき」

秀吉「そういう事なら遠慮なく受けようかのう」

雄二「すまないな」

棗「それじゃ、わたしはちょっと着替えてくるね。さすがにこの格好で行くと潰す時にすぐバレちゃうし」

明久「そうだね。やっと男の服装に戻る」

一時的にね。

棗「そんなわけで着替えくるから、葉月ちゃん。抱きつくのをやめて離してくれるかな？」

葉月「はいです」

葉月ちゃんが離れて行った。そしてわたし達チャイナドレスを着ているメンバーは急いで着替えて、また教室に戻ってきた。

雄二「揃ったな。そんじゃちびっ子、さっきの話はどこら辺で聞いたか教えてくれるか？」

葉月「えつとですね……短いスカートをはいた綺麗なお姉さんが一杯いるお店です」

雄二「それはどこのクラスだ？」

明久「いつたいどうしたの雄二？ 雄二だったら『綺麗なお姉さんがいる』で走り出してそうなもんなのに？」

雄二「それはお前もだろう」

明久「だってここで走り出したら……」

なぜか、アキはわたしをみたね。いつたいどうしたの？

雄二「ああ、なるほど。まあ俺も似たようなもんだ」

何を分かり合ってるの？ 是非教えて欲しい。

葉月「どうしたですか？ バカなお兄ちゃん。それと聞いたのは、確か二年A組だったはずですよ」

Aクラスねえ。丁度いいね。しょうこちゃん達の所に遊びに行こう

と違ってたし。

棗「それじゃ、Aクラスに行って妨害者の排除をしようか」

明久「そうだね」

雄二「そんじゃ行くか」

わたし達はAクラスに向かって行って、それほど時間もかからずに到着した。相変わらずAクラスってデカイよね。さて、あいこちゃんからはメイド喫茶をやるって聞いてたね。

雄二「……Aクラスは何を……翔子は何を考えてるんだ？」

ゆうくんはメイド喫茶の名前を見て、どう言っているか困惑してる感じだね。そのAクラスの出し物。その名前は……。

棗「メイド喫茶『ご主人様とお呼び！』か……。これは新しいね」

明久「もう、メイドなのか、主なのかわからない」

ホントだね。

美波「それで土屋は何してるの？」

ん？ ムツツリーニは店にいるんじゃないの？ わたしは辺りを見回してたら見つけた。

康太「……………！！（パシャパシャパシャパシャ！）」

凄い勢いで写真を撮っているムッツリーニを……。

秀吉「……………ムッツリーニ、何をしておるのじゃ？」

康太「……………人違い」

うわっ。堂々と言い切ったよ。

美波「どこからどうみても土屋でしょうが。アンタ何してるの？」

康太「……………休憩」

雄二「そのカメラは？」

康太「……………敵情視察」

最近の敵情視察はローアングルから女の子を撮影することを言うんだ？ さすがムッツリーニだね。

明久「ダメじゃないかムッツリーニ。盗撮とか、そんなことしたら撮られている女の子が可哀相だと」

康太「……………一枚百円」

明久「ニダースも……………違う！！ 買わないよ！」

雄二「おお。明久が買わないとは」

秀吉「驚きじゃな」

アキが買わなかっただけでここまで言われるとはね。

康太「……………そろそろ当番だから戻る」

ムツツリーニはそういつて悔しそうに戻って行った。

秀吉「それじゃ、いい加減入るとするかのう」

棗「そうだね」

美波「それじゃお邪魔します」

みなみが一番にドアをくぐった。

翔子「……………おかえりなさいませ、お嬢様」

瑞希「わあ、綺麗」

秀吉「それじゃワシらも」

明久「そうだね」

そういつてアキとひでちゃん、みいちゃん、葉月ちゃんが入って行った。そしてしようこちゃんは。

翔子「……………おかえりなさいませ、ご主人様にお嬢様」

みなみの時と同じように出迎えてくれた。最後にわたしとゆづくんが入る。



翔子「……おかえりなさいませ、お嬢様。それと今夜は楽しみましよう。あ・な・た」

とんでもないアレンジがされていた。

雄二「……すまない。来る場所を間違えたようだ……」

ゆうくんは来た道を戻ろうとしたけど、しょうこちゃんに襟首を掴まれた。

翔子「……雄二、どこに行くの？ここに用があつて来たんじゃないの？」

雄二「……人生の墓場に来た覚えは無いんだが？」

翔子「……大丈夫。きっといいところ」

雄二「……翔子、とりあえず離せ」

しょうこちゃんはゆうくんを離して、あいちゃんとあおいちゃんを呼んだ。

葵「おお、来たか。なつめ」

愛子「いらっしやい、棗ちゃん」

棗「うん。遊びに来たよ」

しかしまあ、しょうこちゃんもあおいちゃんもあいこちゃんもメイド服似合ってるな。

翔子「……愛子、皆を席に案内して」

愛子「じゃ、席にご案内します」

そういつて歩いて行くあいこちゃんに、皆と一緒にいつて行くことしたんだけど……。

葵「なつめはこっちだぜ」

わたしはしょうこちゃんとあおいちゃんに腕を引っ張られて別の場所に連れて行かれた。

棗「……で、わたしはなんでこんなところにいるの？」

今、わたしが連れ込まれたのは、メイド服が置いてある衣装部屋だった。

葵「簡単だよ」

翔子「……棗にメイド服を着てもらっ」

棗「なんで？ 着るのは別にいいけど、なんで？」

葵「まああれだ。なつめのメイド姿が見てみたいと」

翔子「……棗は可愛いから絶対に似合っ」

まあ、着るだけならいいよね？

棗「わかった。着るよ。でも、着るだけだよ？」

翔子「……大丈夫。それでいい」

それからわたしはサイズの合うメイド服を渡されて、着替えた。なんでわたしにピッタリのサイズがあるかな？

翔子「……うん。よく似合う」

しょうこちゃんに抱きつかれた。なんか、よく抱きつかれる日だな。

葵「ほら、翔子、落ち着いて。とりあえずはなつめ。皆のところに戻るぞ」

棗「それじゃあ、ちょっと待ってね。着替えてくるから」

葵「何言ってるんだ？ そのまま行くんだぞ」

は？

棗「聞いてないよ？」

葵「そりゃそうだろ。言っていないからな」

何を堂々と……。まさか、そのまま働かされるとかじゃないよね？

翔子「……安心して、働く必要はないから」

棗「……わかったよ。じゃあ戻ろうか」

わたしはアキ達のところに戻った。

棗「ただいま」

明久「うん。おかえ……どうしたの？」

アキがわたしを見て、どうしたらいいのかわからない感じだね。

棗「あおいちゃんとしようこちゃんに着るように言われてね。それより、問題の妨害者はいたの？」

さつきから周りの視線がなんかイヤ。実はアキ達と合流するまでに何回も声をかけられていたりする。ほとんどがナンパ……。そんなのは他所でやって欲しいよ。そしてわたしを巻き込まないで欲しい。

雄二「いや、まだだ」

まだ来てないか。それよりもホントにこのクラスなの？

棗「葉月ちゃん。葉月ちゃんの言った場所ってここでよかったの？」

葉月「うん。ここで嫌な感じのお兄さん二人がおっきな声でお話してたの」

秀吉「どうやら来たみたいじゃぞ」

ひでちゃんが見ている場所を見ると、確かにいる。坊主とモヒカンの男が二人。常夏コンビだ。

『おかえりなさいませ。ご主人様』

『おう。二人だ。中央付近の席は空いてるか？』

葉月「あ、あの人達だよ。さっき大きな声で中華喫茶の悪口言ったの」

常村「それにしてもここのは美味しいな！」

夏川「そうだな。さっき行った二年F組の中華喫茶は不味かったからな！」

常村「全くだ。人が食うもんじゃなかったな！」

へえ。人が多い喫茶店の中央で、わざわざ、大声で言うか。そんなことしてましたか。

雄二「待て、明久」

アキが常夏コンビを殴りに行こうと立ったところを、ゆうくんに止められたね。

明久「雄二、どうして止めるのさ！ あの連中を早く止めないと！」

雄二「落ち着けて。こんなところで殴り倒せば、悪評は更に広まるだけだ」

その通りだね。

明久「けど、だからってこのまま指をくわえて見ているなんて……」

棗「アキ、何言ってるの？ あの二人は潰すよ？」

明久「え？ どういうこと？」

雄二「勉強が出来るようになってきてても、これは変わってないのか……。そうだと久多羅木の言うように、あの二人は潰す」

明久「でも、さっき止めたじゃないか？」

雄二「やるなら頭を使えと言う事だ。翔子！」

翔子「……なに？」

しょうこちゃん……。どこから現れたの？ 全くわからなかったよ。

雄二「あの連中が来たのは初めてか？」

しょうこちゃんが首を横に振って、明らかな嫌悪をあらわしてる。

翔子「……さっき出て行ってまた入ってきた。話の内容もさっきとかわらない。ずっと同じような事を言っている」

わたし達だけじゃなくAクラスにまで迷惑掛けてるんだね。ホントどうしようも無い人達だね。

雄二「そうか……よし。とりあえず、メイド服を貸してくれ」

翔子「……わかった」

この二人はお似合いだよねって、まっつて！

瑞希「霧島さん！？ こんなところで脱ぎ始めちゃダメです」

翔子「……雄二が欲しいって言ったから」

棗「そういうのはゆうくと二人きりの時にやってね。予備のメイド服があったら貸してくれないかな？」

翔子「……ちよっと待ってて」

しょうこちゃんが慌てて戻っていった。いったいどうしたの？

雄二「久多羅木、お前は何を言ってるんだ？」

なんでわたしは、ゆうくに睨まれてるの？

雄二「……まあいい。久多羅木に姫路に島田、櫛を持ってはいないか？」

瑞希「？ 持っていますけど……」

棗「ゆうくんが何をするつもりかはわかるんだけど……。それを誰がするの？」

雄二「明久だ」

明久「え？ 僕？ 何させられるの!？」

アキか……。適任だとは思っけど……。

棗「それは難しいんじゃないかな？」

雄二「なんでだ？」

棗「営業妨害の時に見られてるから、しかける前にはれるかも」

雄二「……そっぴやそっぴやだ。なら他に使えそっぴやつを知らないか？」

ふっふん。もちろん知っていますとも。

棗「任せて」

秀吉「全く話についていけないのう……」

明久「大丈夫。僕もだから……」

なんで二人とも落ち込んでるの？

翔子「……持ってきた」

雄二「おう。すまないな」

棗「しょうごちゃん、もう一つ貸して欲しいんだけどいいかな？」

翔子「……構わない」

棗「なら、兄さんを貸して欲しいんだけど」



翔子「……待ってて」

そういつてしようこちゃんは兄さんと呼んでくれた。ホント協力ありがとうでございます。

昴「いったい何の用だ？」

棗「ゆうくん、来たよ」

雄二「確かに悪くないが……いけるのか？」

棗「アキと同じパターンだよ」

雄二「なるほど、それならいけるな」

昴「なんか……、嫌な予感がするんだが……」

兄さん。それ大当たり。兄さんからしたら嫌な事だからね。

雄二「嫌な予感？ まさか、そんなに大変なものじゃない。ただ、これを着てもらっただけだ」

ゆうくんは堂々とメイド服を見せる。

昴「……やっぱりか。断る。棗が着ているんだからそれでいいんじゃないか？」

棗「兄さんはもう一回、わたしにあんな思いをさせるつもりなんだね……」

昴「？ 何があつたんだ？」

雄二「久多羅木が、あそこで騒いでるヤツらにいやらしい目で舐めるように見られて、ナンパされていたな。断られたら力で無理矢理つてやつらだった」

うわー。確かに事実だけど、わずかな嘘も混ざってる。

昴「それで、メイド服を着るのとさっきのがどう関係するんだ？」

雄二「あそこで騒いでるやつらを潰すため……」

昴「よし、着よう」

おお、急に変わったよ。

葵「昴はホントになつめに甘いな」

秀吉「シスコンじゃな」

美波「シスコンね」

瑞希「シスコンですね」

昴「そこまでじゃねえよ！」

かなり言われてるね兄さん。

雄二「助かる。早速だ、秀吉。昴の着付けを頼む」

秀吉「任されたのじゃ」

ひでちゃんは、兄さんを連れて教室から出て行った。

葵「しっかし、昴に女装させたか。見るの久しぶりなんじゃないか？」

棗「そうだね」

明久「昴も僕と似たようなもんだからね」

そう。アキと兄さんは小さい頃から親に、女装をさせられてたからね。似合うんだからしようがないよね。

翔子「……戻ってきたみたい」

教室の入り口にはメイド服を着て、赤髪セミロングのカツラをつけた兄さんがいた。うん。似合ってる。どこから見ても女の子だね。

美波「……ねえなつめ？」

棗「なに？」

美波「どうしてアンタの周りは、女装させたら女より綺麗な男がそんなにいるの？　ウチは自信無くしそうよ……」

瑞希「美波ちゃん……私も同じ気持ちです」

ホントに二人ともどうしたの？　落ち込んで？

兄さんは……問題の二人のところにいるね。席を立たせてから、全力で殴った。殴られたのは坊主の方だね。そのあとモヒカンの方が兄さんの肩に触った。そして触られた兄さんは……。

昴「こ、この人、今私の胸を触りました！」

さあ、お仕置きの時間。反撃の開始だね。

常村「まで、お前はもともと触るほど無いつていうか、そもそもおと……くばあ！」

雄二「こんな公衆の面前で痴漢行為とは、このゲス野郎が！」

ついでにセクハラ発言もあったね。

常村「まで、何を見ていたんだ！？ 明らかにひがいし……」ごふ！」

明久「はあゝ。痴漢しておいて言い逃れ？ 最低だね」

雄二「それにお前らはこのウェイトレスの胸を揉みしだいていただろうが！ 俺の目は節穴じゃないぞ！」

とんでもない節穴だと思う。わたしに出来る事はあるかなゝ。

棗「しょうごちゃん。縄とかある？」

翔子「……持ってる」

聞いというてあれだけど……何で持ってるの？

棗「それじゃあ、縄を貸して欲しいんだけどいいかな？」

翔子「……はい」

しょうこちゃんは縄を渡してくれた。いったいどこから出したの？  
常に持ち歩いているの？ まあいいや……。わたしも動こう。わたしはゆうくんの隣まで行って。

棗「こちらをお使いになりますか？」

雄二「……それは助かるんだが、なんでそんなもん持ってんだ？」

棗「しょうこちゃんから借りた」

雄二「……なんでアイツはこんな物持ってんだ？ まあいい、ならそのウエイトレスと一緒に、そこで気を失ってる坊主を動けないように縛ってくれ」

棗「わかりました」

わたしは兄さんのところに行ってから、兄さんと一緒に坊主を縛りに行った。

雄二「さて、痴漢行為の取り調べの為、ちょっと来て貰おうか」

ゆうくんが指を鳴らしながらモヒカンに近寄っていつてる。

常村「く！ 状況が悪いか！ とりあえず先ずは」

そういつてわたし達の方に走ってくる？ あれ？ 逃げないんだ？  
この坊主の回収をするつもりなのかな？ でもそうはいかないよ。

常村「げばあ！」

あおいちゃんがモヒカンの顔を殴った。モヒカン、この短時間で顔に三発目。

葵「お客様。お店と店員への迷惑行為の覚悟はよろしいですか？」

棗「あおいちゃん。モヒカン、もう気絶してるよ」

葵「勘弁してよ。そんなに強く殴ってないぞ。……どれだけ弱いんだ」

あおいちゃんはまだ納得いってないようだね。この後ひでちゃんが、わたし達のクラスの喫茶は大丈夫だった。って噂を流して、Fクラスにまたお客が戻ってきた。

わたし達は西村先生に事情を話して、常夏コンビを補習室に叩き込んだ。西村先生が言うには三年の生活指導の先生と徹底的に見張るらしい。今日と明日、清涼祭中は補習室からは出さないそうだ。これで問題は解決だよね。

第二十九話 常夏の終わり（後書き）

棗「やっと営業妨害を終わらせたね」

葵「なつめ達は苦労してるようだな」

棗「全くね。なんであんな事をしたのかわからないけど」

葵「ま、解決したんだし。後は祭を楽しむだけだな」

棗「そうだね。それではまた次、会いましょう」

### 第三十話 召喚大会三回戦

棗サイド

常夏コンビを補習室に叩き込んでから、また中華喫茶に人が来るようになった。むしろ妨害が発生する前よりお客の入りがいい。きつとAクラスでひでちゃんが流した情報を聞いて、試しに来たお客が  
良い噂を流してくれたりしたんだらうね。

そういえばそろそろ召喚大会三回戦の時間だね。

棗「アキ、そろそろ召喚大会に行くよ」

明久「ん。わかった」

ちなみに、今わたしは、チャイナドレスを着て接客をしている。まあ、当たり前だな、みたいな声が聞こえそうだけど。それとアキとひでちゃんもチャイナドレスを着て接客をしているよ。かなり渋ってたけどね。そして何故か、葉月ちゃんもチャイナドレスを着て中華喫茶のウェイトレスとして働いている……。ホントに何故？

わたし達は今大会会場に向かって歩いている。

明久「ねえ、なつめ」

棗「なに？」

明久「また営業妨害が発生したらどうする？」



アキも心配性だね。まあ、わたしもだけどね。

棗「そうだね。もし、次があったなら、みいちゃんの料理を食べさせる」

アキ「マジ？」

棗「さあどうだろう？ 本気かもしれないし、冗談かもしれないし……。さて、どっちだろうね？」

明久「冗談であってほしい……」

アキ、そんなに深刻そうな顔しなくていいんだよ。いくら周りに迷惑をかけるようなやつでも、死んでいいとは思ってないから……。……。話してたら大会会場についたね。まだ、相手は来てないみたいだね。対戦相手を待つとしよう。

十分後。

古典教師「もう一つのチームが来ませんねえ……」

もうすでに三回戦が始まっている時間なのにまだ相手が来ない。担当教師も困っているみたいだし……。対戦相手どうしたんだろう？

更に十分後。

古典教師「……対戦相手が来ませんし、ここは久多羅木、吉井ペアの不戦勝でいいでしょう」

三回戦は不戦勝だった。わたし達は会場から離れて教室に戻ってま

す。

明久「……ねえ、なつめ。さっきの三回戦なんだけとさ……」

棗「うん？ どうしたの？」

明久「もしかして対戦相手って常夏コンビだったんじゃないかなって思ってた」

ああ、なるほど。その可能性もゼロじゃないよね。

棗「もし常夏コンビだったら、同情はないね。他の人なら話は別だけれどね」

明久「あはは、それもそうだね」

葵サイド

しかし、まさか学園祭であんな妨害してるやつがいるなんて思わなかったよ。ごく一部の人のせいで多くの人が不快になるのは、私は許せない。やっぱり補習室に叩き込むだけじゃ軽いような気がするんだよね。

葵「……まあ、いい。終わった事だしね。とりあえずは次だな」

昴「やっと戻ってきたか」

戻ってきたって……ちょっと考え込んでただけじゃん。

葵「さて、次の相手はどんなかな？」

昴「楽しめるといいな？」

どうせ無理だと思ってるんだろ？

葵「ああ、そうだな」

古典教師「三回戦を始める。選手は来てくれ」

それじゃ気分を変えてやりませんか。私は会場にいる対戦相手を見つけた。たぶん、また三年かな？

古典教師「それじゃ、はじめてくれ」

まず対戦相手の三年が召喚した。

古典 Aクラス 穴戸五郎&坂下四郎 546点&521点

葵「へえ、高いね」

穴戸「そりゃそうだ。得意科目だからな」

坂下「おまえらも運がないな」

なんかもう、私らが負ける事前提で話してるな。

葵「どうする、昴？」

昴「確かに点数は高いけど、それだけだろうな。一撃でやられないっただけじゃないか？」

葵「まあ、そうだろうな」

宍戸「生意気なこと言ってるけど、てめえらはどうなんだ？」

昴「今みせるよ。サモン」

葵「サモンっと」

古典 Aクラス 水無月葵&久多羅木昴 877点&569点

VS

古典 Aクラス 宍戸五郎&坂下四郎 546点&521点

点数は近いけど……それだけだった。戦いはすぐに終了。

古典教師「勝者。水無月、久多羅木ペア」

昴「んじゃ、戻るか」

葵「そうだね」

私達はAクラスに戻ることにした。その戻ってる時に気になるもねがあった。ガラの悪い男達が校舎に入って行く光景。はつきりいつて浮いてる。昴も見つけたみたいだね。まあ、いいか、見た目あんなでも祭を楽しむ事はするだろうし。

棗サイド

棗「ただいま」

秀吉「うむ？ 随分早かったのう」

明久「うん。相手が来なくて不戦勝だったんだ」

雄二「まあそうだろうな。お前らの三回戦の相手は常夏のはずだったからな」

ふうん。だったら……。

棗「別に気にしなくていいって事だね」

明久「そうだね。常夏だし」

棗「それで、ひでちゃん達の三回戦は？」

秀吉「これからじゃ」

雄二「もう時間だな。大会に行くぞ」

秀吉「うむ。それじゃお店を少し抜けるのじゃ」

明久「わかった」

棗「頑張ってね」

ひでちゃんとゆうくんが教室を出て行ってすぐ、みなみに声をかけられた。

美波「なつめ、悪いけどウチ達も召喚大会だから抜けるわ」

みなみ達もなんだ。

棗「うん。わかった。頑張ってたね」

みなみとみいちゃんも教室から出て行った。……これってもしかして、ゆうくん達の相手って……。まさかね。

棗「アキ、接客に戻るよ。ウェイトレスが三人も大会でいなくなっ  
たからね」

正確には違うけどね。

明久「ん。そうだね」

雄二サイド

たぶん相手はあいつらだからな、これは苦勞するぞ……。

秀吉「対戦相手が来たようじゃな」

雄二「ああ。来たな」

やっぱりあいつらだ。まあ、そう簡単に負けるとは思ってなかった  
しな。……予定通りか。

秀吉「なんじゃ、次の相手はおぬし達なのか？」

美波「みたいね。同じクラスだからって手は抜かないから」

瑞希「そうですね」

秀吉「むう……。これはきつそうじゃのう」

雄二「まあ大丈夫だ。今まで通りやれば問題無い」

美波「坂本、たいした自信じゃない」

雄二「そりゃそうだろ。俺達の勝ちが決まってる試合で何故、不安にならなければいけない」

瑞希「坂本君、私達は強いですよ？」

それはどうだろうな。この三回戦では島田はいないのと一緒だ。

美波「そうよ。三回戦はウチの得意な数学なんだから負けるわけないわ」

秀吉「？ ちょっと待つんじゃない。三回戦は数学ではないんだがのう……」

瑞希「でも、トーナメント表に三回戦は数学だとありますけど？」

まさか姫路まで気づいてないとは思わなかったな……。お前らが持つてるトーナメント表は俺が作ったものだ。数箇所、いじつてあるがな。

秀吉「そもそも数学は一回戦であつたじゃろう」

美波「……そういわれてみればそうね」

姫路「そうですね。じゃあ三回戦の教科はなんですか？」

雄二「召喚してみればわかるぞ」

瑞希「それでは」

瑞希・美波「サモン」

古典 Fクラス 姫路瑞希&島田美波 399点&9点

美波「うそ！？ 古典ってウチの苦手科目……」

姫路の点数が心配だったが、あれなら大丈夫だな。

雄二「9点しかない召喚獣なんて、いないのと同じだな。秀吉」

秀吉「そうじゃな。これなら勝てそうじゃ」

雄二「そんじゃ俺らも」

雄二・秀吉「サモン」

古典 Fクラス 坂本雄二&木下秀吉 211点&136点

VS

古典 Fクラス 姫路瑞希&島田美波 399点&9点

古典教師「それじゃ、始めてください」

雄二「俺が姫路をひきつける！ 秀吉は島田を片付ける！」

秀吉「わかったのじゃ」



召喚獣を動かして姫路の召喚獣に攻撃をした。姫路は避けようとはしたんだろうが、攻撃がかすった。だが姫路もただやられるだけじゃなく、しっかり攻撃してきてるがな。俺はそれを難なく避ける姫路の方が操作の経験は多いから警戒してたんだが、どうやらそれほど、警戒なんてしなくていいレベルだな。さて、次はどう攻めようか？ 秀吉もそんなに時間がかからずにこっちに合流できるだろうしな。ま、あと数回攻めときますか！

また姫路の召喚獣に向かって動かす。今度は仕掛ける前に攻撃してきた。剣を振り下ろしてきたな。とりあえず右に避ける。振り下ろした剣を横に振ってきたから後ろに回避した。そして剣を横に振り切った隙だらけの召喚獣に近寄って顔に攻撃して、距離をとった。

秀吉「待たせたのじゃ」

雄二「おう。待ってたぞ」

古典 Fクラス 坂本雄二&木下秀吉 211点&130点  
VS  
古典 Fクラス 姫路瑞希&島田美波 367点&0点

秀吉は少し点数が減ってるが、これなら大丈夫だな。

雄二「秀吉、ここから本番だぞ」

秀吉「わかっておるのじゃ」

瑞希「私一人でも負けません！」

姫路もやる気だな？　もしかしたら苦労するか？

俺と秀吉は姫路の召喚獣に向かって行った。俺が攻撃して、姫路は避けたが、秀吉がそこに攻撃してダメージを与えて、姫路の攻撃が秀吉の召喚獣に直撃しそうな時は、俺が防ぎに行ったりしながら戦っていた。そんな戦いをしばらく続けてたら……。

瑞希「あ……」

古典　Fクラス　坂本雄二&木下秀吉　57点&32点

VS

古典　Fクラス　姫路瑞希&島田美波　0点&0点

古典教師「勝者。坂本、木下ペア」

二対一に持ち込んでギリギリとは……。一対一の時はギリギリになるとは思ってたんだけど。姫路の火事場か？　とんでもないな。

第三十話 召喚大会三回戦（後書き）

棗「皆、勝ち残ってるね」

葵「楽しみな戦いがあるからね。そこまでは負けらんないよ」

棗「あおいちゃんが本気なのも怖いね……」

葵「いいの、いいの。また次で会いましょう」

棗「またね」

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n9692t/>

---

バカと幼なじみと召喚獣

2011年10月9日07時33分発行